
ギリ爆3 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記-

餓龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギリ爆3 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記1

【Nコード】

N0161BA

【作者名】

餓龍

【あらすじ】

中学時代、散々なイジメを潜り抜けてきた亀鶴ジオン（本名は詩音）は、高校入学時に出会ったテルがきっかけで、かつてのヤンキー魂を取り戻す。が、後ろ盾であったテルはミュージシャンを目指すと言って上京。

孤独と化したジオンだったが、幼馴染みの白鳥ユイに連れて行かれた献血で、生まれた時からA型だと思ってた血液型が実はO型だったと知る。それから生まれ変わったかのように、ポジティブで活発

な性格になったジオンだった。

1年のトップの竜崎光一、3年の総番長の宮大地と、ひよんな事から共に行動するようになったジオン。そんな2人と絆を深め、3人はいつしか親友になっていたが、様々な事件が、やがて3人の絆を壊してしまった。

竜崎は朝露雫との別れと仲間との決別、宮さんは屈辱的敗北と失恋での痛手、ジオンは盟友テルの死、佐倉との別れ、その他数々の苦難と向き合っていた。

やがて年末を迎え、今まで自分たちを脅かしていた点と点が線となり、全てが繋がり導火線となってある人物に繋がる事を知る。

一方、失恋間もない宮さんに新たな恋の予感。さらにはパーティーにジオンの妹、詩乃舞も加わり、新たな青春の始まりに心が躍るジオン。

ポジティブ全開で、ついに最終章が幕を開ける・・・！！

ギリギリ爆発

血液型マニユアル男のヤンキー伝記を、3つの章に分けてお届けしています。

こちらは『第3章』になります。

第326話 初詣（前書き）

中学時代、散々なイジメを潜り抜けてきた亀鶴ジオン（本名は詩音）は、高校入学時に出会ったテルがきっかけで、かつてのヤンキー魂を取り戻す。が、後ろ盾であったテルはミュージシャンを目指すと
言って上京。

孤独と化したジオンだったが、幼馴染みの白鳥ユイに連れて行かれた献血で、生まれた時からA型だと思つてた血液型が実はO型だったと知る。それから生まれ変わったかのように、ポジティブで活発な性格になったジオンだった。

1年のトップの竜崎光一、3年の総番長の宮大地と、ひよんな事から共に行動するようになったジオン。そんな2人と絆を深め、3人はいつしか親友になっていたが、様々な事件が、やがて3人の絆を壊してしまった。

竜崎は朝露雫との別れと仲間との決別、宮さんは屈辱的敗北と失恋での痛手、ジオンは盟友テルの死、佐倉との別れ、その他数々の苦難と向き合っていた。

やがて年末を迎え、今まで自分たちを脅かしていた点と点が線となり、全てが繋がり導火線となってある人物に繋がる事を知る。

一方、失恋間もない宮さんに新たな恋の予感。さらにはパーティーにジオンの妹、詩乃舞も加わり、新たな青春の始まりに心が躍るジオン。

ポジティブ全開で、ついに最終章が幕を開ける……！！

第326話 初詣

大晦日、家族で白黒歌合戦を見た後、カウントアップTVを朝まで見て、ぐだぐだと正月を迎えた。

翌日、朝っぱらからオレを起こす声がある。

「お兄ちゃん、ユイさんが来てるから、起きてー!!」

「はあ？ ユイだあ？ オレあゝ別にアイツと会う約束なんかしてねえよ」

「聞かないのお？ みんなで一緒に初詣行ってくつて約束してたんだよ。お兄ちゃんが言いだしっぺかと思ってたんだけど」

「何だ、そりゃ・・・？」

「あ、そゝそゝ、ユイさんの晴れ着綺麗だよ」

「は、晴れ着だ？」

ユイが正月だからって振袖着るとは思えねえ。

「待たせるの悪いから上げるよ」

「はあ？ 何勝手に・・・って、オイ、詩乃舞・・・！」

ちぎしよゝ、めんどくせえ。

渋々着替えていると・・・。

「きゃっ、何パンツ一枚でうるついてんのよ、バカ」

人の部屋に入るなり、いきなりユイがツッコんだ。

「着替えてる途中で勝手にオメエが入ってきたんだろが！
・・・つて、オイ、どうしてマジブも一緒なんだよ」

「明けま・・・、きゃっ!!」

マジブはオレを見るなり悲鳴をあげて姿を消した。

「早く着替えなさいよ!!」

「何なんだよ、一体・・・」

緑を基調としたシックなデザイン。

ユイの振袖姿は眩しいほど美しく輝いている。

・・・つたく、新年早々、きらびやかなモン見せんなよ。

・・・つつか、何で人の家にいるんだよ、オマエら！

「よっ、あけおめことよろ」

褐色のスーツを着こなしたオツキーが、いきなり部屋に入ってきた。

「何でオメエも来るんだよ」

「ジオンの妹さん、いつ見ても可愛いよなあ。なあ、ジオン、妹萌えとかしねえのか？」

「はあ？ 何だよ妹萌えって」

「妹萌えは妹萌えだよ。例えばさ、妹がドジっちゃった時の仕草が妙に可愛くて萌えたりさ、隠れてお兄ちゃんのシャツのニオイをクンクンかむ妹を偶然見ちゃった時に、愛おしく萌えちゃって感じたり」

「ないない。基本的にオマエはバカか？ 何だよその勝手なシチュエーションと変態的な妄想は。オマエはパソコンゲームのやり過ぎなんだよ。バーチャルとフィジカルの区別つける。……つつつか、どうしてオマエがオレン家なんだよ」

「あれ？ ジオンが企画したんじゃないかねえ？ 今日の集い」

集い？ ……まったく、新年早々何だってんだ……？

「おっ早よお、明けましちやって、おめでとサン！ 今年もヨロピク」

宮さんが、紋付、袴もんつき はかまで登場した。

「流石宮さんですね。男の晴れ着、カッコイイですね。いや、

「はやく、凄いなあ〜」

「ガツハツハツハ、オツキーのスーツも中々似合ってるぞ」

「宮さんっ、なぜ家に?!」

「え? 今日、皆で初詣行こうって誘われたんだけど・・・」

「聞いてない!!」

「やく、ユイちゃんの晴れ着、綺麗だね〜」

「そう? 宮さんも似合うよね〜、晴れ着」

「アタシも晴れ着、着たかったなあ〜。ねえ〜、しのぶ〜、来年は絶対アタシたちも晴れ着、着ようね〜」

「ウン」

「真誓も詩乃舞ちゃんも似合いそ〜ね」

「アタシもユイ先輩みたいなグリーンにしようかな〜」

「マジブ〜はユイ先輩にゾッコンだよね〜」

「そ、そんな事ないモン」

「またまた〜、アタシは真誓が大好きよ〜」

「あ、ありがとうございます」

「あはは、マジブく赤くなってる」

「か、からかわないですよ、しのぶー!」

オイオイオイオイ、そこっ!

「ど〜という関係なんだよオマエら。初対面にしては随分仲良いじゃねえ〜か」

「え? アタシと真誓? 詩乃舞ちゃんから聞いてないの?」

「アタシとユイ先輩は、結構前からお知り合いですよ」

はえ? 知り合い?!

「マジブくはね、ユイ先輩と同じ、琵琶神社の巫女さんだよ」

詩乃舞……、知ってたんなら言えよ。

「アタシは助勤だけど、真誓は正真正銘の巫女さんよ。琵琶神社の看板娘で超ベテランなんだから」

「いえいえ、そんなことはありませんです」

「マジブくって、いつ頃から琵琶神社で働いてんの?」

宮さんが聞いた。

「中1の冬頃からだよな？」

「ハイ。ちょうど丸2年ですね」

「だよな〜。アタシとマジブ〜の付き合いも、もう2年なんだな〜」

ユイは感慨深く頷く。

「ユイちゃんとマジブ〜が知り合いってだけでオツドロキ〜なのに、マジブ〜が巫女さんだったなんて、さらにオツドロキ〜。オレらしよ〜ちゆう琵琶神社に顔出してたけど、マジブ〜の存在に気が付かなかったなあ〜」

驚きを連発する宮さんと一緒に、オレも気が付かなかったぞ。

「アタシ、存在感薄いって良く言われます」

「いやいや、ユイが濃いだけ」

「ジオン、い〜から早く着替えなさいよ」

・・・まったく、みんなど〜してオレの部屋でくっちゃべってんだよ！

そして、みんなに連れて来られたのは琵琶神社。

もうすぐ正午なのだが、物凄い人ゴミだ。

「オマエさ、このバイトって、半年くらいやってね〜？ どうしてこんなに重要な日にバイト休むワケ？」

「だってさ〜、誠さんがどうしても休めって言っただもん。忙しいから休めって」

「はあ？ フツ〜、忙しいから雇うんじゃねえ〜の？」

「お正月は凄く混むからバイトのコ沢山雇うのよ。だからアタシは不要なの」

「う〜ん、分からん。新人さんが沢山いるなら尚更ユイは必要だろ〜に。・・・つつ〜か、琵琶神社の超ベテランの看板娘もど〜して休みなんだよ」

「誠さんを悪く言うのは許しません」

頬を膨らましたマジブ〜に睨まれた。

「御託ごたたくはいいから、ホラ、中に入った入った」

オレの背中を押すユイ。

「並ばなくていいのかよ？ みんなお賽銭投げるのに並んでるんだろ？ 順番とか守んねえ〜と、神様が・・・」

「神様なんて信じてないくせに何言ってるのよ！ アタシたちは〜」

「祈祷！！」

「祈祷？」

オレたちは強引に本殿に入れられた。

中ではすでに沢山の人たちが、誠さんに祈祷をしてもらってる最中だった。

神主姿の誠さんを見るのは初めてだ。

毅然とした佇まいに、オレの背筋は自然に伸びる。

神々しいな、誠さん……。

やがて祈祷が終わると、後ろで見てたオレたちを発見した誠さんが歩み寄ってきた。

「みなさん、ようこそお越しくださいました。明けましておめでとう、ジオン君」

「あつ、こちらこそ、新年明けましておめでとうございませす。今年もよろしく願ひします」

「色々不幸続きだったようだね、去年は。今年は良い年であるように、ボクも祈ってるよ」

「え？ ヨイ、誠さんに話したのか？！」

オレが佐倉にフラれた事とか、色々惨めなことを……。

「うん、全然」

ユイは首を横に振る。

「いやね、最近ジオン君たちの心が疲れきってる姿が思い浮かんでね、ユイ君に無理強いして、みんなを連れてきてもらったってワケさ」

「え？ じゃ、誠さんがセッティングしたの？ オレたちのためにわざわざ？！」

「いいからいいから、ホラ、座った座った」

ユイがオレを座らせる。

ユイのヤツ、誠さんとグルになって……。

くそ、ユイにまんまと騙だまされた……！

「たかまノはらに かむづまります すめらがむつ かむろぎ かむろみの みこともちて やおよろづノかみたちを かむつどえにつどえたまい かむはかりにはかりたまいて あがすめみまノみこととは とよあしはらノみずほノくにを やすくにと たいらけくしろしめせと ことよさしまつりきかくよさしまつりし……」

おほほえのことば
大被詞を唱え終わった誠さんは、オレの頭上で、白いフサフサのヤツをバサバサした。

「被い給え 清め給え 守り給え 幸え給え」

誠さんの透き通るような美しい声が胸に心地良い。

今年が良い年になりそうだ。

「ありがとうございます」

オレと宮さんとオツキーは、力いっぱい誠さんにお礼を述べた。

「いえいえ、では」

ニツコリ笑顔の誠さん・・・、何か、忙しそうだ。

オレたちが本殿を出ると、次々と祈祷待ちの人たちが中に入っていた。

みんなまとめてなのに、オレたちだけ特別扱い、しかも無料。

誠に申し訳ない・・・なんちつて。

「ねえ、みなでおみくじ引いてかない？」

ユイの号令で、みんなでおみくじ売り場に向かった。

「おみくじ〜？ 何も願う事ねえ〜よ・・・」

・・・と、言いつつ、恋愛成就を祈りながらおみくじを引いてみたりする。

相手いねえ〜けど・・・。

「ワオ〜、オレ、大吉だ〜」

オツキーがにこやかに小躍りする。

「私も大吉ですよ〜」

詩乃舞がオツキーの小躍りにまざる。

オイオイ詩乃舞、何はしゃいでるんだよ、バカの近くにいるとバカがうつるぞ。

「宮先輩、どうですか？」

「吉〜！ ま、無難なトコかな？ マジブ〜は？」

「アタシも吉です」

「へ〜、偶然だねえ〜」

「この世に偶然って無いんですよ。あのですね〜。…」

マジブ〜と宮さんは相変わらず楽しそうだ。

へん、仲良くやって下さいよ。

「ヤダ〜、アタシ今年も大凶!〜!」

「今年もって、オマエ去年大凶引いてんのかよ、はっはっはっは、だ〜からフラレたんじゃねえ〜の?」

「うるっさいわね〜! で? アンタはど〜なのよ?〜!」

「バカ、オレは…。」

な、何だ、コレ?

「見せなさいよ!〜!」

「…あっ」

「最凶? 何コレ、は、初めて見た。何よ、最凶って…。」

「オレに聞くなよ」

「最も恐い、最強最悪な凶って事かしら…。」

「ど、ど、どすりゃいい?」

「とにかくあそこに結びましょー!!」

オレとユイは急いでご神木のそばのおみくじを括り付ける為の紐におみくじを結んだ。

「これで結界に封じ込めたわ。大丈夫よ、きっと」

ユイが唇を固く結んだ。

「な、そんな凶とかより、おみくじに何て書いてあったか読むの忘れてねえか？ それ、一度返してくれ」

「ダメよ！ 一度結界に封じ込めたおみくじを戻しちゃったら、ダメなのよ」

「ワケ分かんねー！ そもそもオマエがおみくじを引こうなんて言い出したから、こゝいう事になるんじゃないか！ もし今年オレに不幸な事があつたらどう責任とってくれんだよ?!」

「はあ？ バツカじゃないの、アンタ?! あゝゝゝ、ホント、ムカつく！ マジ、ムカつく!! せっかくバイト休んでまでアンタの為にこゝして着物まで着て祈祷してもらってバツカみたい!!」

「はあ？ それはどゝいう意味だよ！ オレは別にオマエに祈祷してくれなんて頼んでねえから!!」

「誠さんがアンタに祈祷してあげたいって言うし、去年アンタ散々だったし佐倉にフラして可哀想だと思つてさ、だからこゝして連れて来たんじゃない」

「だからオレは頼んでね〜し！ むしろ余計なお世話じゃね？ B型は世話焼きだっつゝのは百も承知だけどさ、オマエは強引さも加わって、たまにマジウザいんだよ！！」

「言ったわね？！ 佐倉にフラれたストレス溜まってるからってアタシに当たらないでよ！！」

「オマエだってI k a r Uにフラれたストレス、オレに八つ当たりして解消してんじゃねえ〜か！！」

「アタシは別にストレスなんか溜まってないんだから！！」

「そうかそうか、それは良かったな。じゃ〜、大凶だからって別に悲観する事ねえ〜な」

「アタシは最初から悲観なんてしてないわよ！ そうだ、おみくじが見たいんだっけ？ ハイ、結果から外してあげる！ 今年いっぱい、最凶を楽しんでちょうだい。アタシもアタシの最凶っぷりを今年一年楽しませてもらうから」

「うるせえ〜、外すな、縁起でもねえ〜！！ あ〜〜〜、マジで外す？ バカじゃねえ〜？ オレ死んだらどうすんの？ マジでどうすんの、それ。結果外しちゃったよ、この人。マジで信じらんね〜」

「アタシが外せって言ったんでしょ〜？ ホラ、読んでみなさいよっ！！」

ユイがおみくじを投げつけてきた。

ヒヨイ

寸前で鮮やかに避けるオレ。

「へへ〜〜んだ、どこ、投げてんだよバ〜〜カ」

ポヨン

ユイが投げたおみくじは、オレが避けたせいで、運悪く後ろの人に当たってしまった。

フードを被った髪の毛の長い女性の頭に当たったおみくじは、ポテツと地面に落っこちた。

・・・と、その時!!

「何ぶざけてんだよ、このアマ〜！ 湊^{レイ}さまに謝れコラ」

「湊、どうする？ やっちやう？!!」

フードの女のそばにいる、仲間と思われる女たちが執拗^{しじじ}に絡んできた。

「その晴れ着が気に入らない。トイレで脱いできてもらって」

第326話 初詣（後書き）

あけましておめでとございます。
今年もヨロシクお願いします。

第327話 フードの女

オレたちがふざけすぎた罰ばちが当たったのだろうか？

新年早々、神社で絡まれた。

しかも、晴れ姿のユイと一緒に。

絡んできたのは3人組の女たちだ。

年は分からないが、ウチらと同世代だと思われる。

仲間に滲シと呼ばれた女は、黒髪のストレートで、パーカーのフードを被っている。

フードの下から見え隠れする顔立ちは、一見すると可愛らしくもあり、美しくもある。

長いまつ毛とハッキリした二重まぶた、整った目鼻立ちがそう見せるのかもしれない。

アルファベットのWのようなアヒル口は幼さも醸し出し、年下？と思わせる雰囲気併せ持つが、声には凄みがあった。

たった一言、冗談ともとれる、「その晴れ着が気に食わない。トイ

レで脱いできてもらって」というセリフだったが、オレはその言葉にただならぬ恐怖を感じた。

本気で言ってるなら、コイツ、相当度胸あるぞ……？

この公衆の面前で、しかも、男連れの女性に……。

「……………」

いつもだったら何かしら言い返すユイだが、オレと一緒に何か恐怖のようなものを感じているようだ。

ユイらしからぬ、少々ビビリ気味の表情を浮かべている。

「オラ、来いよ」

仲間の女がユイの振袖を掴んだ。

どうやらマジでオレたちに絡んでいるようだ。

「オイオイオイオイ、おふぎけはその辺でやめとけよ。オレらが悪かった、謝るよ、ゴメンな」

オレはそう言って頭を下げた。

こゝいうアブナイ連中とはかわらない方が無難だ。

「ア、アタシも調子に乗り過ぎました。ゴメンなさい」

ユイも照れ笑いをしながら、ペコペコと頭を下げる。

「遷サマ？」

「いいよ、こゝで脱がして」

「マジで？ こゝじゃ、ヤバくね？」

な、何を言ってるんだコイツら……。

オレは不気味さを感じ、言葉すら失った。

「アハッ、冗談だよ冗談。謝らなかつたら振袖燃やしてたけどオ、素直に頭下げたから許してあげるウ」

「良かったな、オマエ」

「今度から気を付けろよバーカ」

フードの女と、その仲間2人は、人ごみの中に消えていった。

……な、何だったんだ？

「アタシ疲れちゃった……。そろそろ行こっか……」

引き攣った笑顔で、みんなのもとへ歩き出すユイ。

「ああ。オレも疲れた……」

オレも溜息を吐きながら歩き出す。

「ねえ、ジオン、さっきのフードの女、ど〜思う?」

「ど〜もこ〜もねえ〜な。アレは普通じゃねえ〜。何っ〜か、半端ねえ〜アブねえ〜ニオイがする」

「やっぱり、そ〜思う?」

「ああ。何っ〜か、修羅場を幾つも潜り抜けてきたっ〜か、アイツ、おそろく強いぜ」

「だろ〜ね」

「上手く言えねえ〜けど、例えるなら、ユイが初対面の一般人を脅す、みたいなの? 何っ〜か、ワルじゃなくて、正統派の怒りっ〜か、その人がそのセリフ吐いちゃダメだろ……。ってカンジ? 存在だけで十分な人が、そんな恐いセリフ吐いたら相手、泣いちゃうだろ的な……」

「そ〜そ〜、そんなカンジ。ウチらと同類？ そんな雰囲気持ってたよね、アイツ。アタシとかジオンとか、竜崎とか宮さんみたいな、真っ直ぐな何か・・・」

「タカノブもそんなカンジか？ 以前ユイ、アイツは真っ直ぐな瞳をしてたって言ってたろ・・・？」

「ウン。でも、全然違うじゃん、雰囲気。タカノブはワルよ。そんなのアタシだって一瞬見りゃ分かるわよ」

何かそれ聞いて安心。

「何だろ〜な、あの女」

「分かんないけど、もう会わないと思うし」

「だ、な」

その後オレたちは琵琶神社を後にし、それぞれ一旦家路についた。

夕方から雪が降り出し、街は銀色に染まった。

ピンポーン

さっそくおいでなすったな・・・。

「ど〜ぞ〜」

詩乃舞とマジブーが、着替えてきたユイと宮さんとオツキーを招き入れる。

そんなパーティーで新年はスタートした。

第328話 巫女と怪獣

新学期がスタートした。

残りあと2ヶ月ちよい、来年はいよいよ3年か……。

オレもそろそろ進路とか考えねえとな。

宮さんはどうすんだろ？ やっぱ就職かなあ？

「お早っ、ジオン」

「なあ、あれから琵琶神社に宮さん来たか？」

「うん。毎日来てたよ。よっぽどあの場所が気に入ったのかな？
毎日随分と長居してたわ。誠さんも毎日抹茶振舞ってたし」

「はっはっは、やっぱり。家としては助かってるよ。もしマジブが琵琶神社で巫女さんやってるって知らなかったら、宮さん毎日家に来てたぞ絶対。いや、良かったよかった」

「何が良かったのよ」

「あれ？ 聞いてない？ あの2人、付き合ってるんだぜ」

「はあ？ あの2人って、真誓と宮さん？」

「あつ、ここだけの話な。流石に中学生との恋愛はマズイだろ？」

「へ〜、知らなかった〜」

「3日の日に、宮さんが家に来たんだけど、その時内緒で教えてくれたんだ」

「いいの？ アタシに言っちゃって」

「いいんだよ。宮さんに、ユイにはオレから言つときますか？つて聞いたら、ヨロシク頼むよ〜つて言ってたし」

「ま〜、宮さんの口からアタシに言い辛いかもね。へ〜、まさか、あの2人がねえ〜。やっと宮さんに春が来たつてカンジ？ 喜ばしい事じゃない。宮さんから誘つたんでしょ？ 真誓、純粹だから、断れなかったのかな？」

「それがさ〜、告つたのはマジブ〜の方らしいぜ。宮さんは、それはマズイよ〜つて言つたらしいんだけど、結局押しに負けたみたいなんだ。『Stay by me side』つて言われたつて言つてたけど、ど〜という意味？」

「アタシの傍にいてね・・・つて意味でしょ？ 真誓・・・、やるわね、アイツ・・・」

ユイは遠い目をしながら鼻で笑つた。

そう、今から1週間前、オレの家にて・・・。

「ゴメンねゴメンね、毎度お世話になってますう、わたくし、道化師の中の道化師、宮、大地でございます」

宮さんそのキャラで、一体どこまで突き進むんだろ。

詩乃舞とマジブと宮さんとオレ、この4人でこゝしてオレの部屋に集うのは2回目。

でも、実は宮さんとマジブは、あれから、2人だけで毎日会っていたという。。。

マジブが帰った後、宮さんがこっそり教えてくれた。

さらに。。。

「実は。。。。、元旦に、マジブに付き合っただけって言われたんだよね。。。。」

唇を噛み締めながら、宮さんが熱く語り出した。

「マジですか？ それは凄くないですか。。。。で？」

「流石に相手は中学生だし、高校生になるまで待とうやって言ったんだけど、別にやましい事をするんじゃないんだし、自分らの心の中だけで思ってるならいいんじゃないかって。。。」

「ほう？。。。。で？」

「付き合ってるワケだよ。ガハハハハ。。。」

何か、悪い事してるみたいで後ろめたさのある、力ない笑い声を出す宮さんが痛々しい。

「海老型真誓と宮大地ですか……。オレはいいと思いますよ。でも、やっぱり相手は中学生ですからね、隠れて付き合わなきゃならないし、健全なカップルとして世間に認めてもらうには、もう少し時間は掛かると思いますよ。ま、琵琶神社なり、オレン家なりで会う分には問題ないですよ。遠慮せずオレン家使って下さいよ」

「ホント、申し訳ない」

「ま、いいじゃないですか。ちよつとくらい障害があつた方が燃えるってモンですよ。ところで、『オレがあげられるモンは、命くらいしか……。』的な言葉は送つたんですか？ AB型は、そんなストレートな表現が好きはなはずですよ」

「雫ちゃんに言ったセリフ？ あ、誤解ないよ」に言つとくけど、今は雫ちゃんに、命あげるつもりは無いよ」

「当たり前じゃないですかっ！」

今でも朝露さんに命あげられたら、そりゃ〜アンタ、立派な浮気者ですからね！

「それなんだけど……。オレがあげられるモンは命くらい……。って、最近、恐くて言えないんだよね。何だろ、今までは、愛した女にだったら、オマエの為にオレはいつでもこんな命くれてやら〜って気持ちでいっぱいだったんだけど……。最近そんな風

に思えなくなっただよ。逆に、オマエの為に、オレは生きる・・・
、むしろ、生きなきゃ、生きて守んなきゃ・・・って、思い始めた
んだよね」

・・・う、・・・宮さんが・・・、成長している。

人は、恋をして、大人になるんですね・・・。

「早く死にてえ、誰かオレをぶつ殺してくれ・・・って、いつも
思ってた。死ぬ事の方が勇気がある事で、死ぬ恐さが無い者こそ、
男じゃって思ってたんだけど、本当は生き抜く事の方がよっぽど
勇気があるし、大事な事なんだって気付いたんだよ。何度倒れても
起き上がり、ボロボロになろうが突き進む者こそ、男なんじゃねえ
のかなって・・・。倒れて傷ついてボロボロだからって、死を選
ぶのは勇気でも何でもねえよ・・・。」

「多分、誠さんとか聞いたら泣いて喜びそうなセリフじゃないです
か」

「あの人こそ男の中の男だよ。オレは、あの人みてえな強い男に
憧れてんだ・・・。」

「宮さんなら、誠さんに負けない力持ってますよ。でも、勝ち負け
なんて言っていると、誠さんに怒られそうですけどね」

「ガッハッハッハ、確かに」

・・・ってカンジで、宮さんとマジブは、本気で付き合い始めた

ってワケだ。

「なあ、ユイならマジブを間近で見てるから分かると思うけど、あのコぶつちやけどなんだ？ 宮さんを騙もてあそしてるとか、宮さんを弄もてあそんでるとか、浮気性とか・・・、ないよな？ 詩乃舞はマジブは純情だからそれは無いって言うてるんだが、マジブってAB型だろ？」

どうもAB型って何考えてるか分からないんだよなあ・・・。

「いくら寧とのアレがあつたからって、心配しすぎよ。宮さんだつてそこまでお人好しじゃないでしょよ？」

「あの人、フラレるの知ってて告白する人だぜ。場合によっては、騙されてるの知ってて付き合っちゃうみたいな一面ねえか、B型って・・・」

そう、目の前のユイしかり・・・？

ユイは、I k a r uと佐倉の関係を知っててギターを渡したのか・・・、はたまた全く知らなかったのか・・・？

ま、本当の所は知らないし、聞いても教えてくんねえくだろし、どうでもいゝが、B型ってさ、捻ひねくれてる所あるじゃん、本音と裏腹の言動や行動とつたりさ、無茶するじゃん・・・。

「大丈夫。アタシが保証する。真誓はまだ子供だし、何も知らない純情なコよ。でもあのコ、純粹過ぎて、先輩とか年上とか関係なく

堂々と意見するし、本音を出すのよ。だから、宮さんに言っといて、手を出すのは長く付き合ってからにしてね……って」

「その点は大丈夫だ。宮さん結婚するまで手は出さないって豪語してたし」

「そっか、そくだよね、あの人を見縊^{みくひ}つちゃダメよね。じゃ〜アタシから言っとくわ、真誓に。アンタ、宮さんに結婚するまで手を出しちゃダメよ……って」

「はっはっは、そりゃい〜や」

「真誓ってABなんだ〜。アタシ、ABって大好きなのよね〜」

佐倉もABだったんだけど……って言いかけたが、オレは喉仏の辺りで呑み込んだ。

「マジブ〜って、怪獣専らしいな」

「何よ、怪獣専って」

「デブ専とか言うじゃん」

「知らない」

「肥満嗜好者の呼称だよ。それみたいなモンで、マジブ〜は宮さんみたいな怪獣系が好みだそっだ」

「世の中上手く出来てるモンね」

「そうなんだよ。書き手や生産者がいれば、読者や消費者がいるように、世の中ピツタリ当てはまるように出来てるんだよな。毎年男女の生まれ比率が同比率ってのが証拠だよな。だからさ、オレは何々だから・・・って諦めちゃダメだよな。その、何々が好きな人だっているワケだから。デブ好みの人もいれば、怪獣好みの人もいる」

「じゃ、長須とか大橋とかに会わせないよ、にしなきゃ・・・ね。流石の真誓も長須を見たら目移りしちゃうカモ？」

「はっはっはっは」

「なあ、始業式も終わったってのに、ホールルーム始まるの遅くね？」

オツキーが心配そうにこっちを見る。

「そ、例えば、朝からリツキーの姿見てないわね」

ユイが教壇を見つめながら言った。

・・・と、その時、数学の竹中が教室に入ってきた。

「委員長、適当にホールルーム終わらせて、後帰っていいぞ。明日から普通に授業始まるからってだけ皆に伝えとけ」

へ？ リツキーは？

「先生、担任の岡村先生はどしたんですか？」

おっ、流石委員長、小倉が竹中に聞いた。

「力也先生は……、異動になった」

はうう？ リッキーが……、異動？！

オレは、教室を出た竹中の後を追い掛けた。

「せつ、先生っ！ リ、リッ……、力也先生が異動って、本当ですかっ？」

「ア？ どうしてオマエがそんな事気にする」

竹中はリッキーと同じでA型。

余計な詮索は不運の元。

リッキーがマジでいなくなっただんなら、これからコイツかナンバー2の大和が幅をきかせるはず。

「いえ、何でもありません……」

オレはそそくさと教室へ戻った。

「ユイ、ミノブさんに詳細を聞いておいてくれ」

保健室のミノブさんなら、有力な情報をくれるはず。

「OK、後で聞いとく」

リックキーが異動だと？

竜崎の話では、カンパの件の主犯格って線が濃いって話だったけど、やっぱりそれで間違いなかったって事か……。

オレは今まで犯罪者の下で授業を受けてたつてののか？

「代田に続き、どくなつてんだ、ウチの学校は……」

オツキーは溜息をついた。

代田は変態ヤロ〜だったが、リックキーは極悪人だ。

あのヤロオ〜、なぜ逮捕されない?!?!

第329話 リッキーの異動

放課後、ユイが保健室に行ってる間、オレは宮さんにメールを打った。

／／／／ 今日学校に来てるんですか？ ビックニュースが
リマス ／／／／

すぐに返信が来た。

／／／／ 長酢と大箸にこれからあてきます ／／／／

長酢？ 長須の事か？！ 大箸？ 大橋の事でいゝのかな？！ こ
れから会うつて事か？

／／／／ マジブも一緒ですか？ ／／／／

マジブも一緒だったらさ、ホラ、マジブも怪獣専だから、色々ね
。。。

／／／／ オレひとり。マジブ~~~~~
は巻き込みない ／／／／

どんだけブなんだよ。

巻き込みないって何だよ？ 巻き込みたくないって事かな？

／／／／ 何かあったんですか？ ／／／／

それから返信はまだ来ない・・・。

とうとう教室にはオレとオツキーの2人しかいなくなった。

ストーブの温もりも消え、だんだん肌寒くなってくる。

「遅いな、ユイ・・・。宮さんからの返信も遅い・・・」

「おっ、来たぞ、ジオン」

「お待たせ」

ユイが保健室から帰って来た。

「で・・・、どうだった・・・？」

「実はね・・・」

何と、リッキーは、石田町総合体育館の職員、トレーナーとして、異動になっただけらしい。

元々体育教師だったので、適任と言えばそうなるが、異動の理由が意外だった。

「パワハラ問題が浮上して、PTAの弾圧で飛ばされたって話。建前上はね……」

そこまでは一般的な噂で、こっからがミノブさん特有の裏情報。

「警察に事情徴収されたって話。それは、代田の盗撮の件とはまた別で、リックキー個人の何かについてなんだって……」

「その何かって……?」

「アタシが聞いたのはそこまでよ。ミノブさんも本当にそこまでしか分からないみたい。確かに後はリックキーしか分からない情報よね」

「そうか、サンキュ〜な」

「なあ〜、ジオン、やっぱり警察がKHJにガサ入れに入った時に、色々リックキーのアレが浮上したんだろ〜な」

「KHJの振込み発覚だろ? リックキーの口座に、ギャラクシーがカンパで集めた金を振り込んでたってヤツ……」

「でも、大元が本当にリックキーなら、ど〜して逮捕じゃないのかしら? それに、もしリックキーが大元なら、教師が生徒にカンパを回してたって、もっと公けおおやにならないかしら? そしたら学校の教師たちやミノブさんの耳に、情報が入らないワケないわよね?」

「確かに……。後は直接本人に聞くしかねえ〜か……」

「なあ〜ジオン、これ以上もういいだろ？ これより先に首突っ込むと、ロクな事ねえよ。この辺で止めとこうぜ」

「そうね。アタシがミノブさんにリッキーがいなくなった理由を聞くのは別に自然だけど、アンタが嗅ぎ回ってたら怪しいもんね。万が一、KHJと繋がりあるヤツなんかに目を付けられたらヤバイわよ」

そんなユイの言葉を聞いて、オレは真っ先にタカノブの顔を思い浮かべた。

いくらKHJがほぼ全滅したと言っても、まだボスの前田が逃走中なのは確かだ。

へたに目を付けられたら、それこそヤバイ。

今回の不祥事で、系列のヤクザ組織から除外されたとは言うものの、前田のバックにはマエカン組が控えてるのは事実。

それに、前田の下にはギャラクシーとコスモもいる。

気を付けねえと・・・な。

そんなオレたちの不安は、やはり間違いではなかった・・・。

／／／／／ 芝と秋がガガ、やられた、オレと長酢と大箸はダイジ
ヨブ、病院、オーケー牧場 ／／／／／

オレは解読不能なメールをユイとオツキーにすぐ見せた。

「電話した方が早くね？」

オツキーが眉毛を八の字にしながら言う。

「だよな？」

ブルルルルル　ブルルルルル

『ハイ、宮ですが』

「宮さん、オレ、ジオンです」

『オウ、亀ちゃん元気？』

「柴と秋鹿がやられたって？　病院って何ですか？　何かあったんですか？！」

『あゝ、そうそう、実は・・・』

宮さんの口から衝撃的な事実が語られた。

何と、ギャラクシーをすんなり抜けたと思われた柴と秋鹿だったが、コスモの残党に闇討ちされて入院を余儀なくされたらしい。

宮さん、長須、大橋の元番長の3人は、状況を確認する為に柴と秋鹿が入院してる病院に足を運んだという。

「コスモの残党って、コスモって解散したんですか?!」

『ウン、したした。今年一番のニュースだよ。アレ? 言ってなかったっけ……?』

「今年になってから今まで、詩乃舞とかマジブ絡みの平和な日常話しかしてなかったじゃないですか……」

『ガツハツハツハ、そうだっけ? コスモ、解散したよ。でも、その内の3強って呼ばれてた猛者がいるんだけど、そいつらが前田をかくま匿ってるって噂だ。その3人に、柴と秋鹿はやられたそうだ』

「宮さん……、念の為、気を付けて下さいよ。仲村たちは大丈夫なんですか?」

『長須、仲村って大丈夫? あ……、そう。大丈夫だって。亀ちゃんも気を付けてね』

「ハイ……、あ、そういえば、リッキーが異動になりましたよ。そう、逮捕じゃなくて、異動」

『その辺も含めて、まだ何とも言えねえ……つてのが実情かな』

「分かりました。とにかく、へたな探りはお互いナシって事で……では……」

「……で、仲村たちは大丈夫なのか?」

オツキーが心配そうな面持ちで聞いてきた。

「そもそも仲村とか宮さんたちが狙われるワケねえ〜んだよ。柴と秋鹿は族を抜ける時の、けじめでボコられただけなんだよ。オレらがKHJとかコスモの報復にビビるのは単なる被害妄想なんだよ」「

それがオレの率直な本音。

「でも、念の為、警戒する必要があるわね」

ユイは不安そうな表情を見せた。

確かにオレたちは、もう2度と開催される事は無いと思われる、KHJ主催の間の大会で名前も顔も売れている。

もし、前田が自暴自棄に陥って、皆殺し的な発想を抱いたら、オレたちも狙いの対象になりかねない。

・・・つつ〜か、何で早く捕まらねえ〜んだよ。

これじゃ〜、オチオチ出歩けねえ〜じゃねえ〜か。

第330話 AB型とB型が上手く行く方法

その日、部屋のベッドで寝転がってマンガを読んでいると、隣の部屋から笑い声が聞こえてきた。

大方、いつもの詩乃舞とマジブくだろ。

へ？ マジブく？！ ……って、事は…。

ブッッ ブッッ

ケータイのバイブが鳴った。

案の定、おいでなすった。

／／／／ 亀ちゃん、遊び行っていいかい？ ／／／／

人に頼み事する時だけ、しっかりメール打てんのな。

ピンポーン

早っ！

「宮さん、いい加減学校来ましょよ」

「ゴメンゴメン、明日から行くよ」

「ホントですか？」

宮さんが部屋に入って間もなく、こつちもおいでなすった。

「宮先輩っ、こんにちは。あっ、ジオン先輩、お久しぶりです」

オレはついでかよっ！

マジブは、ツインテールを靡^{なび}かせて、可愛らしい笑顔を見せる。

それを見て、屈託無い笑顔を見せる宮さん。

人ん家勝手に遊び場にすんなって言おうとしたが、そんな2人を見てると、つい許してしまう。

詩乃舞もオレの顔を見て苦笑いだ。

どっせもう少しでマジブも高校生だ。

そしたら堂々と付き合えるモンな・・・、もう少しの辛抱か・・・、オレも詩乃舞も・・・。

「マジブ、宮さん学校来るようにキツク言ってよ。もう、新学期がスタートしてから1週間も休んでるんだぜ」

「マジで忙しかつたんだって。長須に会ったり、大橋に会ったり、柴と秋鹿に会ったり、仲村にも会ったよ」

「何か言っていました？ 仲村・・・」

「前田が捕まるまでは、大人しくしてろってな・・・。出来れば、学校行くなって・・・」

「そうやって口実作ってるんでしょ。リッキーもいないんだし、学校行きましょよ。単位無くなりますよ」

何かオレ、竜崎のポスト引き継いだみたいだな、まるで。

「アタシ、来年武蔵行きますんで、ヨロシクです」

マジブ〜がオレにペコリと頭を下げた。

「え？ 武蔵に来んの？ そっか、そろそろ受験だもんね」

「私も武蔵に決めただ。一緒に行こうね、マジブ〜」

詩乃舞も武蔵に来んのか。

ま、進学するなら無難な所かもな。

「マジブ〜も詩乃舞ちゃんも武蔵に来るのか？ オレのいない武蔵に〜？ じゃ〜、オレ、も〜学校通う必要ないじゃん」

「はい？ ど〜ツッコミを入れればい〜んですか、宮さん?!」

「宮先輩っ、大学行って下さい、です。そしたらアタシもその大学行くんで。1年間くらいは一緒に通えるかもです」

「大学う〜？ それは考えてなかったなあ〜。だ、大学う〜？ イモなら好きだけど、勉強はなあ〜」

「それがイヤなら、ちゃんと卒業して下さい。その前に、しっかり進路を決めて下さいです」

「は……、はい……」

厳しい彼女だ。

でも、お陰で宮さん、道を外さなくて済むかもね……。

「マジで大学受けてみればいいんじゃないんですか？ 推薦はもうムリでしょ〜けど、一般でなら、現役高校生なんだし、受験資格は十分ありますよ。もしかしたら、まぐれで受かっちゃうかももしれないし」

「博打すんの？」

「万が一ダメでも、浪人して、チャレンジって手もありますよ。ホラ、何度倒れても這い上がる、宮さんらしい。あ〜、いいかも、大学。それ、い〜かも」

「口〜ニン？」

「場合によっては、マジブくと4年間、一緒に通えるかもしれないよ」

「も、ジオン先輩、宮先輩に変な事吹き込まないで下さい。宮先輩も、真に受けちゃダメです」

「口〱ニンになれば、マジブくと4年も同じ大学に通えるの？ 口〱ニン・・・、口〱ニンか」

宮さんは天井を眺めて、何やら空想に浸っている。

「ハイ宮さん、変な想像はそこら辺でオシマイ。冗談です、冗談。宮さんが大学なんか受かるはずないですから」

「何イ〜?!」

やべつ、B型を刺激した?!

「人間やって出来ない事はないっ！ オレは今から大学を目指す！ 立派な口〱ニンになって、マジブくと4年間、大学に通うっ!!」

宮さんが高らかに吠えた。

「宮さん、一先ず落ち着いて。立派な浪人になろうとか、マジブくと4年間一緒に大学通うとか、そんな計画ムリヤリ立てなくていいですから、自然に生きていきましょよ、自然に」

「いつもの亀ちゃんらしくねえぞ？ いつもだったら、志を高く持って一緒に突き進みましょうとかってポジティブなセリフ吐くの

に、今日はどうした？」

「いや、どうしたもこゝしたもないですよ」

参ったな……。

「お兄ちゃん、マジブ〜がね、宮先輩との相性を聞きたがつてたよ」

おっ、ナイスタイミングで話の切り替え！ 流石オレの妹、気転が利くね〜。

「アタシ、A B型じゃないですか〜？ 宮先輩はB型なんですけど〜、血液型的に、相性はど〜なんですか……？」

マジブ〜が可愛らしく首を傾げた。

「よく聞いてくれた。フフフツ、何を隠そ〜オレ様は、血液型にか
けちゃ〜天下無敵のマニユアル男。血液型に関しては、オレの右に
出る者はいない！ ……みたいな、そんなオレ様の態度をとる人
って嫌いでしょ？」

「はい、どっちかって言うと……、嫌いです」

「私も、苦手」

マジブ〜と詩乃舞は大きく頷く。

「その点、この道化……、もとい、宮大地って人は、そりゃ〜腰

が低くて謙虚。それでいて偽善者が嫌いで、人には正面から正直にぶつかるタイプ。自分にも嘘はつかないし、ハッキリ言って、バカ正直」

宮さんは、照れ笑いしながら大きく頷く。

「社交辞令やお世辞が嫌いなABは、ストレートな表現をして、常に飾らないB型に好感を持つ」

オレの言葉に頷くマジブと詩乃舞。

「B型は、AB型の突飛な発想や考え方も容易に汲めるので、知的な関係を育めれば最高のカップルだよ。ただ、おバカなカップルには、中々なれない。最初はいいけど、徐々に冷めるってカンジ？なので、相性はいいけど、意外と長続きしないのがB型とAB型カップルの特徴なんだよね」

あれ？マジブと宮さんが深刻な顔をして、詩乃舞は苦笑いしているぞ？オレ、何か余計な事、言った？！

突然の沈黙・・・、そして・・・、しばらく不穏な空気が漂った・・・。

「さすが亀ちゃん、いつも、言い辛い事、ズバッと言ってくれるね。そっなんだよ、オレもさ、そこを懸念してたんだよね・・・」

宮さんがいつになく真面目な顔で語る。

「アタシも、宮先輩の面白さは大好きなんですけど、最近何か、だんだんムリしてテンション上げてるよくな気がしてたんです。アタシは、常に一定のテンションを保ってたいので、出来れば、バカ話ばかりじゃなく、真面目な話もしたいし……」

同じく真面目な表情で語るマジブ。

「ゴメンよ、マジブ。最初、大ウケしてたからさ、何か、お笑いキャラでずつと行かなきゃならないよくな強迫観念に駆られてさ、自分を見失ってたんだよね。アレ？ オレ、最近なんか変だぞ？ ・ ・ ・ っと思ってたんだけど、タイミングが掴めなくて、ズルズルとバカキャラ演じちゃってさ。でも、亀ちゃんのお陰で、あ、オレ、自然でいゝのかな？ っと思えた」

「宮先輩、アタシは、自分のペースを乱されるのが嫌いなんです。ペースを乱されると、つい、距離を置いちゃうっていうか……。なので、無理してアタシを笑わせようとか思わないで欲しいんです。アタシは笑いたい時に笑うし、宮先輩にもそ〜であって欲しいし……」

「マジブ……」

「宮、先輩」

「オイオイオイオイ、そこ〜っ！ 場を弁わかえろ、場を〜〜！！」

「亀ちゃん、失いかけてたモノを、こんなに早く気付かせてくれて、ホントありがとう」

宮さんが超真面目な顔でオレに頭を下げる。

「ジオン先輩、アタシも感謝でいっぱいです。やっぱりアタシが思った通り、いや、それ以上にジオン先輩は賢い人です。本気で尊敬します」

マジブくがツインテールを靡なびかせた。

え？ なぜか2人に感謝されてるし・・・。

オレ、そんな立派な事、言っただけ？

第331話 君への贈り物

「B型は基本的にアマノジャクだから、からかい合って楽しく笑い合うのが性に合うんだけど、A型は基本的に感情を表に出すのが苦手だし、言葉を使つての表現も上手くないから、やっぱりお互いに自然体が一番だよな。そんな中でも、知的さを忘れないで」

「じゃあ、やっぱりオレは、大学を目指すべき・・・？」

オレは宮さんの言葉を無視して血液型アドバイスを続けた。

「でも、A型は、本当は優しい心の持ち主なんですよ。だから、ペースを乱されると疲れちゃうの。笑ってあげたくても笑えなかったりして、上手く表現出来ない自分にイライラしたり・・・」

マジブくと詩乃舞は何度も頷く。

「あと、A型は、しつこく誘われるのが苦手だよな。人に意見を押し付けられたり、自分の考えにケチをつけられるのも嫌い。あと、些細な事を気にする男も嫌い。自分がネガティブだから」

「そうそう、ホントそ〜だよな」

「ウン」

マジブくと詩乃舞は顔を合わせて笑っている。

「人情深い、浪花節的B型に対し、ドライで情が薄いAB型だけど、しっかり話し合いが出来る関係を最初に作っちゃえば、お互いに束縛もなく、自然で理想的なカップルになれると思うよ」

宮さんも、目を閉じ、腕を組んで大きく頷く。

「そして、ここが大事。B型はAB型の考えを理解出来る事が出来るし、何と、手玉にもとれる。逆に、AB型はB型の考えを理解しにくいし、むしろ扱いにくい。なので、宮さんが先輩で、マジブくが後輩、この関係は実は大正解なの。年もそれなりに離れてるので、尚、良い。常に宮さんがリードし、マジブくを包み込むように全部を守るの。そして、マジブくは全てをゆだねて、思いっきり甘えるの。それが最高の相性を生むと、オレは思う」

パチ パチ パチ パチ

3人は惜しめない拍手をくれた。

「お兄ちゃん、凄くいい」

「ジオン先輩、ホント凄いです。思わず聞き入っちゃって、メモ取るの忘れちゃいました」

マジブくは小さな舌を出して笑った。

「亀ちゃん、つまり、オレは自然でいいって事？」

「そうですね、宮さんは常に自然体。だって、マジブくを守ってあげたいって、自然に思ってるワケですよ？ 別に意識もせず」

「ウン。まあ〜ね・・・」

「逆にマジブくは、ちょっとだけ頑張って甘えてみて。最初は照れくさいかもしれないけど、それに慣れちゃえば、マジブくも後からかなりラク出来ると思うよ。ホラ、相手はおだてれば木にも登っちゃう人だから・・・」

「ハイ、頑張ってみます」

マジブくは満面の笑みではにかんだ。

宮さんもはにかむ。

・・・宮さんアンタは、はにかまなくてえ〜わ！！

しばらく4人でゲームなどで盛り上がり、やがてマジブくの門限の時間が訪れた。

玄関で、いつものように手を振る宮さんが、柄にもなく顔を赤らめながら語り出した。

「オレ、不器用だから上手く言えねえ〜かもしんねえ〜けど、正直な今の気持ち・・・、言う。マジブくの為に・・・、オレは死ねない。だから、ハッキリ言って、オレにはマジブくにあげられるモン

は一つもない。でも、これだけは言える。オレは、マジブの為に・・・生きる。オレは死なない。絶対、死なない。爆弾落とされよゝが、槍でメッタ刺しにされよゝが、絶対、死なない。生きて、生き抜いて、マジブの為に、これから沢山のプレゼントを贈る」

宮さんが、途切れ途切れだが、上手に言い切った。

素晴らしいメッセージだ。

オレも、感動して涙が出そうだ・・・。

「Your presence is often the best present.」

マジブはそう言い残して、クールにその場を去った。

「え？ 何・・・？ どうしたの・・・??」

相変わらずな英語のメッセージに、宮さんは目を丸くして不安そうな表情を浮かべる。

「詩乃舞、通訳！」

「宮先輩が居る事が、アタシにとって、最高のプレゼントだよ・・・、みたいなカンジかな？」

「でっへ・・・」

声に出すな、宮さんっ！ 鼻の下伸びてるし！ あと、ヨダレ玄関に垂らさないでっ！！

「いつもゴメンな、詩乃舞・・・」

宮さんが帰った後、オレは詩乃舞に一応謝つといた。

元々宮さんを家に呼んだのオレだし、あの2人が付き合ってるの公認してんのオレだからな。

「ううん、いいよ全然。私も嬉しいし、お兄ちゃんも嬉しいでしょ？」

「まゝね。宮さんが今まで苦労してきたの知ってるからさ、あんなに幸せそうで、楽しそうな宮さん見ると、こっちまで幸せな気分になれるしな」

「私も一緒」

ん？ 何か含みのある雰囲気だな・・・。

「マジブ、昔何かあったの？」

「あつ、いや・・・、別に・・・、何も」

「嘘がヘタだな、詩乃舞は。兄ちゃん、誰にも言わねえって。オレを信じる」

「あのね・・・、実は・・・。」

第332話 マジブの過去

「・・・マジブは、中1の時イジメられっ子だったの」

で、出たよ・・・、イジメ。

そ〜いう子、引き寄せるモンなのかな・・・？ オレたち・・・。

何か陰かげのあるコだな・・・って思っではいたんだ。

元ヤンキー？ いや、違う・・・、でも、この凜りんとした佇たたずまいは何
だろ？・・・ってずっと思っただ。

誠さんの所で巫女さんなんかやってるし、普通のコじゃないのかも
って思っただけど・・・。

「どんなイジメ？」

「悪質だよ。カンペンの中の物全部捨てられたり、下駄箱くだばこに毎日ゴ
ミを入れられたり、机とか教科書に落書きされたり・・・。一番可
哀想あはれだったのが、1年間みんなに口聞いてもらえなかったことかな
・・・」

涙が出るね・・・。

オレもテストの度にえんぴつの芯折られたりしたけどさ、そこまで悪質じゃなかった……。

「詩乃舞は話し掛けてあげてたのか？」

「……………」

「本当は、話し掛けたかったんだけど、イジメっ子の仕返しが恐くて出来なかった……？」

「……………ウン」

詩乃舞は涙を浮かべながら頷く。

「しよゝがねえゝよ。そゝやって人は成長するんだ。でも、これからは、逃げずに立ち向かえるだろ？ あの時のような、悔しい思いはしたくないって、思えるだろ？」

「ウン」

詩乃舞は笑顔と一緒に涙の雫を溢した。

「そつか……。マジブゝ、苦労したんだな……」

オレには、その辛さ、苦しみ、手に取るように分かるよ、マジブゝ。

それに、オレだけじゃない、君には、オレ以上に苦しみを越えてきた人が付いてるし、心強いユイだって付いてる。

もう、大丈夫だ……。

「でも、どうやってそのイジメから逃れたんだ？ 何か、きっかけがあったんだろ……？」

「ウン。中2の初めに、転校生が来たのね。そのコがマジブ〜を助けてくれたの。イジメっ子たちを、コテンパンにして」

「へ〜、いるんだな、正義の味方って……」

「実はマジブ〜もね、中学に入学と同時に遠くから引越して来たんだけど、偶然にもそのコと小学校が一緒だったんだって」

「へ〜、そりゃ〜奇遇だ……」

「それだけじゃなくって、小学校の時は、マジブ〜とそのコは、凄く仲良い親友同士だったんだって」

「じゃ〜、かつての親友を助ける為に遠くからやって来た、まさに正義の味方ってヤツじゃないか」

「そうなの。偶然って、凄いよね〜」

偶然じゃなくて、必然です……って、マジブ〜なら言いそ〜だけ
ど。

「じゃ〜、今でもそのコとマジブ〜は親友なんだろ？ ……って事は、詩乃舞とも仲良いんだ」

「・・・ウウン」

詩乃舞は首を振った。

「え？ どうして・・・」

「そのコ、中2の半ばくらいから、ヤンキーたちと行動するようになって・・・、マジブとは疎遠になっちゃって・・・。今ではもう、一言も喋らないし、擦れ違っても挨拶もないの・・・」

淋しいな、何ちゅく別れ方してんだよ。

せつかく親友だったのに、今では擦れ違っても挨拶もないって・・・。

そりゃ、酷い話だ・・・。

「マジブは頑張ったんだよ。何度も話し掛けたし・・・。でも、そのコの方から無視するよになっちゃって・・・」

竜崎じゃないが、乙女心は難しいなあ。

特に思春期ってのは、女の子同士だったら、そーいうの多いのかもな。

「ちなみにさ、そのコの血液型って分かる？ もし分かるんだったらさ、オレなりにアドバイス出来るかもよ」

「そ〜だね。ウン、マジブ〜に聞いてみるよ。ちょっと、待ってて」
そう言っつて詩乃舞はマジブ〜のケータイに電話を入れた。

「分かった。A型だつて」

A型があ〜。

A型のヤンキーがあ〜。

基本的にA型は周囲に併せがちだから、このままだと筋金入りのヤンキーになる可能性は高い。

かと言つて、そう簡単に友人との距離を引き離せるもんでもないし・
・・・。

オレが困つた顔をしていると、

「でもね、そのコ、別にマジブ〜に何かするワケでもないし、前にそのコがイジメっ子をやつつけてるから、それからマジブ〜が誰かにイジメられる事もないのね。だから、無理してそのコと仲直りしなくてもいいとは思うんだけど・・・」

詩乃舞が言つた。

「A型は本当は臆病者なんだよ。嫌われまいとして、つい心に壁を作っちゃうんだ。だからさ、自分だつたらこんな風に話し掛けられ

たら嬉しいなっと思っ言葉を掛けてやるといいかもよ。プライドが高いいからさ、A型は。だから、弱音や本音も人に洩らさないんだ。諦めずに話し掛けてやれば、そのうち心を開くかもしれないねえ〜ぞ・
・って、マジブ〜に言っというて「

「ウン、ありがとう」

「でも、A型は、自分はしつこいくせに、人にしつこく迫られるのが嫌いだから、ダメだと思ったらムリはするなよ……と」

「分かった。言っとくね。ありがとう〜、お兄ちゃん」

「ど〜いたしました」

「……そうかあ〜、マジブ〜、イジメられっ子だったんだ。

ますます喧嘩の強い宮さんが頼りになるじゃん。

最近あの人、いない所でも株上がってんのな……。

第333話 侵食

翌々日、朝っぱらから、とんでもないニュースが耳に入った。

「何々？ 宮さんがバイトを始めたあ〜〜？ しかも、工事現場でえ〜〜〜?!」

まさかあの人、結婚資金とか貯めてるワケじゃねえ〜だろ〜な・・・。

「婚約指輪でも買うのかな？」

オツキーも想定するのは同じ所か・・・。

「いつから始めたか分かるか？」

「昨日みたいよ」

「だろ〜な。一昨日は全くそんな素振りおこといはなかった。夜までオレの家に居たし・・・」

「あつ、でもね、ジオンには内緒ねって言ってた、マジブ〜が」

その内緒話をオレに話すユイ。

「マジブ〜には話せて何でオレには言えねえ〜んだよ、宮さん!」
オレは学校が終わると同時に、宮さんが働いているという工事現場に走った。

住宅地の下水道工事現場で、バックホーが土をすくった後、スコップで細かい土をすくっている宮さんを発見。

オレはしばらく様子を見た。

ヘルメットの下に巻いたタオルで汗を拭い、目を血走らせて、懸命に働く宮さんがそこにいた。

学校サボって何やってんだよ、宮さんっ!!

やがて周りのオツさんたちは一服タイムで現場を離れたが、宮さんだけは一人残ってセメントを練っていた。

セメントの元に土と水を入れ、スコップで練り合わせる作業に没頭している宮さんに、オレは容赦なく話し掛けた。

「何やってんですか?」

「.....」

宮さんは、オレの声が耳に入っていないのだろうか? それとも、オレの声が聞こえないフリをしているのだろうか?

「宮さん、ジオンですよ。亀ちゃんですよ。宮さん!」

「……………」

宮さんは、まるで人形のように、同じ作業だけを繰り返している。

「宮さん……んっ!」

「聞こえてるよ。何？ オレは今、忙しいんだよ!」

かなりご立腹のようだが、オレは何か宮さんを怒らせるような事をしたのだろうか……?

心当たりは全くないが……。

「まさか……、マジブにフラれたワケじゃ……………」

「……………」

宮さんの目が、一瞬見開いた。

「フラれたんですか?!」

「……………」

宮さんは首を横に振った。

「まさか……、早くも婚約指輪を……」

「……んなワケねえくだろ。頼むから、あっち行ってくれよ。一人にさせてくんねえくか？ 心の整理が出来たら話すから」

息絶え絶えの虫のような声で、そう呟く宮さん。

そこで引き返すオレだと思ってるのかな？

「何があつたのかわかりませんが、今まで積み上げてきたモン、一気にぶっ壊しちゃう所が宮さんの悪いクセだとオレは思いますよ。そこら辺のヤツらだったら、せつかく築いてきた絆も、今の宮さんのような態度で崩れちゃってるかもしれない。でも、オレたちの絆は、残念ながら、そう簡単には崩れない。一度ぶっ壊れてるんでね、免疫がついてんのかもしれないですね」

「ゴメンよ。そっとしておいてくんねえくか？ 疲れてんだ……」

「分かりました。じゃ、行きますよ。宮さんの気持ち、よく分かりました。オレも男です。その代わり、オレは宮さんを待ちませんから。オレは先に進みますんで、あしからず……。後から何か言われても、オレ、遠くに行つて聞いて聞こえないかもしれない。後から助けて言われても、遠くに行つてるかもしれないんで……。じゃっ……」

「冷てえくな。相変わらず、容赦ねえくな……。亀ちゃんは……」

「人一倍熱いの知ってるくせに……」

「オレの事、分かってくれんのかい……？ オレにも、甘えさせ
てくれんのかい……？」

宮さんは、目を細めて土を見つめながら、小さな声で呟いた。

「何、竜崎の心の声みたいなさ言ってるんですか。いつから宮さんは
服を着るようになったんですか？ しかも厚着」

「マジブ〜と付き合ってからかな……。ガハハ、何か、ただの男
になっちまったな、オレ。泣く子も黙る総番長とまで言われたオレ
が、今じゃ〜ここまで落ちぶれた……」

「守るモンが出来たら弱くなるんじゃないやなくて、強くなるんですよ、
人は……。まだ、その強さの使い方を分かってないだけなんです
よ。本当は備わってるのに、使い方知らないだけ。もしかして、
その強さにも気付いてないんじゃない……？」

「オレは弱いよ。とことん……、弱い」

「やっぱり。ど〜しちまったんですか、宮さん。腐っても鯛。落ち
ぶれたって、宮さんは宮さんですよ。オレでよければ話して下さい。
それとも、目の前にいるオレは、宮さんの頼りにならない、ただの
不良だとしても……？」

遠くに見える、川の向こうの工場地帯の明かりが灯り出す。

長い煙突からのモクモクとした煙は、相変わらずどす黒く、白い雲

を灰色に変えていた。

「実は……、前田に脅されてんだ……」

「前田……?!」

逃走中の、前田丈……か?!

「ヤツはオレの一番弱い所を突いてきた……」

宮さんは大粒の涙を溢した。

「ま……、まさか……」

「真誓^{まじか}を狙^{ねら}ってる。中学のヤンキーらに命令し、いつでも真誓を狙えるようにしてるんだ」

マジブ^{まじぶ}が……、狙われた……?!

「オレが、浅はかだったんだ。自分で自分の墓穴を掘ったんだ。まさか、真誓の学校にまで、前田が侵食してたなんてな……。それを知らず、オレは……」

「な、何て、脅されてんですか?!」

「海老型真誓を傷物にしくなかつたら、10日以内に逃走資金、100万円と、逃走用の車を用意しろ……。と。万が一警察に

垂れ込んだり、仲間とかにチクツたら、真誓の命の保証はないって．．．」

オレに話した、今、この時点でもう、マジブの命の保証はないってか？！

オレが他言しないの分かってるから、宮さんは話した．．．って解釈していいのかな？

ご希望通り、オレはこの事実を誰にも話しませんよ。

ここだけの秘密にしましょう。

その代わり．．．．．。

「協力しますよ」

「バイトしてくれんのかい？ 車はアニキの借りれば何とかなるんだが、金だけは中々集まらなくてな。ゴメンよ．．．、必ずこの借りは．．．．．」

「はい？ 違いますよ。前田をぶっ潰しに行きましょうよ、一緒に」

「そ、そしたら．．．、ま、真誓が．．．」

．．．．．たく、こんな時のB型は、前しか見てないから、困る！

「マジブには、ユイと誠さんが付いています。ユイにはミケコも付

いてる。そのバツクにや、長須も大橋剛太も、野牛勢や吉岡勢、みんな付いてるじゃないですか。敵は前田とコスモの3強、それと、タカノブくらいでしょ？ こっちにだって、それくらいと戦える戦力はいくらでもありますよ！ 何を躊躇してんですか？ マジブを守るんじゃないかったですか？ 生きるんじゃないかったですか？！」

「簡単じゃねえ〜ぞ。オレはいい。オレはど〜なってもいいが、他のヤツらの命が・・・」

「命張って、この身を削って、オレたちは生きてるんです。毎日、毎日、生きてる。誰かを守る？ そんな当たり前の事出来ないで、生きてるって言えるんですか？！」

「だから、簡単じゃねえ〜って！」

「生きるのだって、簡単じゃねえ〜んですよ！！」

それから宮さんは沈黙を続けていたが、やがてまた、セメントを練り始めた。

「・・・だから、簡単じゃねえ〜んだよ」

そんな事をブツブツと言いながら・・・。

「まだ、9日あるんですよね？ それまで、考えましょ〜。時間使って、考えましょ〜」

「その間、金集めた方が早いぞ、きつと。アイツとやるより、アイツ逃がした方が、犠牲もないし、手っ取り早いぞ、きつと」

「悪を、おめおめと逃がすんですか?!」

「だから、簡単じゃねえ〜んだよ。正義の味方も、善を貫くのも、沢山の犠牲を伴う。オレはもう、さんざん傷付き過ぎた。これ以上誰も、傷付けたくねえ〜んだよ。亀ちゃん・・・、オレはもう・・・、疲れたんだよ・・・。」

何、竜崎みてえ〜な事言つてんだよ、宮さん!!

「オレは諦めませんよっ! 待ってますから! 宮さんが立ち上がるの、待ってますから!!」

「オレは、もう・・・、いいよ・・・。」

宮さんは、力なく囁いた。

下水道工事のダンプは、それから7時間も動きっぱなしだった。

オレは宮さんが帰路に就いたのを確認してから、家路に就いた。

ユイじゃないが、宮さんばかりに辛い思いはさせないぞ・・・。

ちつくしよ~~~~、前田あ~~~~！

前田、丈~~~~っ！！

絶対に、絶対に許さねえ~~~~っ！！！！

第334話 アイイカカツオタコタラコ

前田に脅されてるといふ、とんでもない宮さんの衝撃的事実を耳にしたその日の晩、今度はセンサーシヨナルな電話がオレを悩ませた。

『ゴメンね、いきなり・・・』

何と、電話の主は去年学校を退学した佐倉愛。

決して綺麗とは言わないが、尾を引かない別れ方をしたはずなのに、今更一体何の用だっただけ？

「何かあったの・・・？」

オレは不安を押し殺しながら電話の趣旨を訊いた。

『あのね、旦那がどうしてもジオン君に会いたいわって。会って話しがしたいって言うから・・・』

旦那？ 旦那って、I k a r イカル удар？！ オレは話しする事などない！

・・・と、思ったが、

「いいよ。どうすればいいの？」

口が勝手に……。

『明日日曜日で学校お休みでしょ？ 朝露栗ちゃんが働いてる喫茶店分かる？ そこで会わない?!』

「分かった……」

いつの間にかオレはOKしていた。

佐倉はオレを忘れられず、Ikaruに胸中を語ったのかもしれない……。

佐倉 「ゴメンねIkaru。私、貴方よりジオン君の方が好きなの。私、貴方と別れて亀鶴愛として生きたいの」

Ikaru 「あい分かった。そうか、だったらオレは、新たな嫁をユイにする」

佐倉 「それ良いわね。そうすれば、みんな丸く治まるモンね。私とジオン君は両思い、貴方とユイも、両思い。私たちが別れる事で、みんなが幸せになれるんだわ」

Ikaru 「問題は、お腹の子だな。ジオン君、大丈夫かな？」

佐倉 「彼は優しいわ。貴方の方からも頼んでちょうだい。ちゃんと詫びて筋を通せば、ジオン君はO型で寛大だから、きっと大丈夫だよ」

I k a r U 「はっはっは、嬉しいなったら嬉しいなっ。みんな幸せ嬉しいなっ」

佐倉 「ウフフ……。明日が楽しみね〜」

……。ってなワケ、ねえよな。

一体全体、オレに何の用なんだ……。?! I k a r U がオレに、会いたい……。?

オレはその事を誰に相談も出来ないまま、不安な一夜を過ごした。

翌日、予定時間の5分前、待ち合わせ場所のメイドカフェに到着。

チリンチリン

「いらっしゃいニヤ〜」

お久しぶりの、ネコ耳着ぐるみ登場。

日曜日という事もあり、相変わらずこの店は活気がある。

店内にはカップルだけじゃなく、何と家族連れなんかもいて、すっかりファミリーレストラン化している。

「あれ〜、ジオン先輩じゃないですかあ〜。どしたんですかあ〜、わざわざ私に会いに来てくれたんですかあ〜?」

バイト中の朝露さんが、トレイを抱えてやってきた。

相変わらずメイド姿がお似合いだ。

「佐倉がさ、ここでオレと会いたいって言ってきてさ。あつ、ちなみに佐倉さ、年末に学校やめたんだ」

「本人に聞きました。Do the byのIkaruさんと結婚したんですよね？先週ここで偶然お会いして、話を聞いてビックリしましたあ」

「へ、佐倉、ここに来た事あるんだ」

「ハイ、先週、Do the byのメンバーたちと、ここで結婚記念パーティーしたんですよ」

「あつ、そっなの？へ……」

メイドカフェでやったのかよっ！

「ご注文は？」

「じゃ、アイスコーヒー」

「一番まともそっなヤツ。」

「愛す珈琲ですなえ。かしこまりましたあ」

何かイヤな予感……。

……と、その時!!

「お久しぶり。あつ、明けましておめでとう……、だよねっ?」

佐倉だ!

な、何か、2週間ぶりくらいなのに、ずっと会ってなかったような新鮮さがある。

それに、雰囲気も大人っぽくなって、より魅力的な女性になっている。

「どうも、はじめまして、D o t h e b y の I k a r U で
す」

いかにも高そうなジャケットに身を包み、いかした靴音を鳴らしながら、イケメン I k a r U が登場。

「こちらが亀鶴ジオン君。そして、こっちが I k a r U」

佐倉がお互いを紹介する。

「ジオンです」

ちよっとふてくされたカンジだったかな?

オレは緊張を隠しながら挨拶をした。

「ジオン君、ほんと、スマンー!!」

はい？

何と、I k a r Uがテーブルに頭をぶつける勢いで、オレに深々と頭を下げた。

な、何だっただ、いきなり……。

「妻が、愛が……」

そこまで大きな声だったI k a r Uだが、店内の注目を浴びてる事に気付き、恥ずかしそうに黙り込んで席に着いた。

同時に佐倉もI k a r Uの隣に座る。

かつて大好きで憧れてた佐倉が、結婚して妊娠して旦那と一緒にオレの目の前に座っている。

一体どんな拷問なんだよ!!

「ジオン君、ホント、ありがとう。妻のご無礼、ホント、すまない」

I k a r Uは尚も頭を下げた。

「一体、何の事ですか・・・？」

「ご注文は何にいたしましたしよ～・・・かつ、ご主人様方～っ！！」

颯爽さつそうと現れた朝露さんは、オレの言葉をかき消しながら、メニューをテーブルに広げた。

「栗ちゃん、この間はお世話になりました」

「いえいえ、その後、お腹の方は順調ですか？」

「ウン。これ見て見て」

佐倉はカバンから、写真を取り出した。

「へ～、今つて3Dで見れるんですね」

お腹の赤ちゃんの、リアルな立体写真だ。

佐倉とI k a r Uの、愛の子・・・か・・・。

「男の子？ 女の子？」

朝露さんが興味津々だ。

「まだ分からないよ」

「名前は決めたんですか？」

「男だったら、カツオ。女だったら、タラコ」

佐倉が笑顔いっぱい言った。

「へ、男の子なら、タコカツオ。女の子なら、タコタラコですかあ。可愛い名前ですねえ」

朝露さんは、何の躊躇ためらいもなく言った。

「タコ？」

「何ボケなんですか、ジオン先輩。旧姓佐倉さんの、新しい苗字じゃないですかあ」

タコ？

「言っ
て
な
か
つ
た
よ
ね、
確
か
？
わ
た
く
し
愛
は、
蛸たこ鳥いかる賊いかる瑠いかると、
1月
1日、
正
式
に
結
婚
し
ま
し
た」

が、元日ですかっ……、ははは。

苗字がタコで、名前がイカですか……、ははは。

佐倉、タコアイになったのね……、そうですか……、タコですか……。

「それで、子供の名前はどっちが・・・」

何か恐縮だったが、オレは一応聞いてみた。

「2人で考えたの」

「二晩悩んだよな」

マジかよっ！ 二晩悩んでカツオとタラコかよっ！！

「ご注文は？」

「じゃ〜、私〜、この、どんだケーキとコーヒーセット」

誕生日のホールケーキ並のカステラだぞ、それ。

「オレは〜、この一番高いヤツね」

そ、それは、オレが伝説を残した・・・、メイドが全部食べさせてくれるっていう、確か2800円もする『愛してマスカットパフェ』では・・・?!

く、食ってもらおうじゃねえ〜かよ・・・、へへん、佐倉の前で恥をかきやがれ。

「で、佐倉の無礼って・・・」

朝露さんが去った後、オレはさっきの続きを促した。^{つな}が

「学園祭の時の・・・」

I k a r Uの口から、とんでもない言葉が飛び出した。

第335話 岡村少年と蛸少年

佐倉は、学園祭の時の事件の全てを、Ikaru Uに話したのだ。
った。

Ikaru Uへの想いとユイへの嫉妬から生まれた憎しみが、ユイの仲間のオレたちの出店への八つ当たりと化し、とんでもない結果を招いてしまった、あの悲惨な事件を、Ikaru Uに全て語ったと言うのだ。

自分が犯人で、自分が全て悪いのだと……。

オレは、全てをIkaru Uに白状したと聞き、佐倉の本気を感じた。

佐倉は、本気でIkaru Uを愛そうとしているし、本気で家庭を築こうとしてるんだ……。

そして、一連の話を聞き、原因は自分であると理解し、罪を認めたIkaru Uは、オレへ詫びを入れたいと言いだしたと言う。

それで、こうしてオレに頭を下げているワケだ。

オレは、額をテーブルに付けるIkaru Uを見て、Ikaru Uにも本気を感じた。

軟派系B型ではあるが、人一倍プライドの高そうな男がこうしてオレに頭を下げている事実。

コイツも佐倉を本気で愛そうとしてるし、本気で家庭を築こうとしてるんだ。

「頭を上げて下さい。あと、竜崎と宮さんにも謝りたいと言ってますが、あの2人には話さなくていいと思います。機会があれば、オレの方から言っときますから。忘れかけた事件をわざわざ穿り返して、傷口を開かなくてもいいと思います」

竜崎だって、宮さんだって、犯人が佐倉だったなんて知ったらショックを受けるし、オレにまで哀れむ。

余計な心配させるくらいなら、何も知らないまま忘れてもらった方がいい。

「じゃ〜、ユイにも言わない方がいいの？」

佐倉が眉を八の字にして言った。

「当たり前だよ」

オレは声を大にした。

「そうか・・・、本当にスマナイね、ジオン君・・・」

申し訳なさそうな表情で、涙を浮かべる I k a r U。
オイオイ、オレの中ではオマエ、相当な悪人だったのに、オレの中
でキャラ変わっちゃうだろうが……。

「そ〜いえばさ、リックイー異動になったんでしょ？」

佐倉が話題を変えた。

「そ〜そ〜、佐倉にまで情報が入ってたんだ……」

「ウン、えつとね……、I k a r Uのね……」

しり込みして言葉を切り出せない佐倉。

「いいよ、言つて……」

I k a r Uが呼びかけた。

「リックイーの息子さんが、I k a r Uの同級生なの」

前に、テルの告別式の日、テルの親父さんから聞いて、リックイーに
息子がいるのは知っていたが、リックイーの息子と I k a r Uが
同級生だったのは知らなかった……。

「I k a r Uさんは確か、オレらの2コ上ですよね？ ……
つて事は、リックイーの息子も2コ上だったんだ」

「ジオン君、リックイーに息子さんがいるって、知ってたの？」

「前にチロツと耳にして知ってたよ。でも、そんなに言い辛い事でもねえくだろ？ 何か他所よそに聞かれちゃいけない事でもあるのか？」

「ウ・・・、ウン」

佐倉は急に目を逸らした。

「ちよつとヤバイ話なんだよ。今からオレが話す事は、オレらと年代で地元のヤツなら誰でも知ってる有名な話だ。でも、恐らく当事者たちは、みんな口を閉ざすだろうな・・・」

I k a r Uが真剣な表情で言った。

な、何だよ、お、脅かすなよ・・・。

命に関わるような話なのか？！

「マジヤバイ奴らの話はオレもたまに聞くんで、大丈夫ですよ」

強がるオレ。

「オレと岡村は、小学校低学年からずっと野球やってたんだ。でもさ、中学1年のある日に、同じ野球仲間の男と岡村が口論になっちまってさ、オレは必死で仲裁に入って喧嘩を止めたんだ。でも、そ

の時その相手の男が椅子を振り回して大暴れしちまって、結局大問題。その男はそれから学校来なくなつた。風の噂で転校してたつて知つたのは、それから2年後くらいだ」

I k a r Uが中学時代の思い出話を語り出した。

「中学3年のある日、他校との対抗試合で、転校した例の男に2年ぶりに再会したんだ。男は執念深いヘビのようなヤツで、また岡村に絡んできたんだ。オレはまた、必死に止めたんだ。でも、それが男を刺激したのか分からないが、男は持つてた金属バットで岡村の頭を……」

I k a r Uは顔をしかめ、佐倉は耳を塞いだ。

金属バットつて……。

オレはその時、KHJのボスこと、前田丈の顔を思い浮かべていた。

「それから岡村は救急車ですぐに病院に運ばれた。一時はオレも覚悟を決めた。でも、オレが相手の男の態勢を多少崩せた事もあって、岡村の怪我は何とか軽症で済んだんだ。でも、その殺人行為に激怒した父親が、相手の男を訴えた」

「その岡村少年の父親つてのは、リッキーの事だよな？」

オレは佐倉に聞いた。

「ウン」

頷く佐倉。

「リックイーって、ずっと独身っていう噂なかった？」

「結婚もしてないし、奥さんもないみたい。でも、子供を男手一つで育ててみたいだよ」

へへ、苦労したんだな、アイツ……。

苦労して育てた一人息子のピンチに、親父が出てって激怒したってワケか……。

「結局、男は他の細かい容疑も罪に加わって、少年院に2年入れられた。2年後、オレは武蔵の2年だったし、岡村は高専の2年。一方、少年院から出てきた男は、中学に復学して中学3年からのやり直し。オレたちも危険は遠のいたと思っていた……」

「まさか……」

「男は復讐を忘れていなかった。岡村の居場所を探し当て、10人ほどの中学生たちと高専に乗り込んだその男は、持っていた金属バットを教室で振り上げた。中学生が高専に、しかも大勢で授業中に乗り込むなんて普通考えられない。岡村の周りのヤツらも、教師も一瞬恐怖でたじろいだ。逃げる間もなく岡村は、男が振りかざした金属バットで頭を殴られ……」

I k a r Uは唇を噛み締めた。

10人ほどの中学生……。

金属バット……。

「重体……？」

「そう、でも、意識不明のまま意識は戻らず、そのまま今に至る……」

意識不明の……、重体のまま……、今も尚……、意識が戻らない？

「もしや……、岡村少年をやった男って……、石田中に……」

声にならない声を振り絞り、オレはIkaruに訊ねた。

「少年院を出た後、復学した中学校は、確か石田中。その後少年鑑別所に入ったらしいが、その後の消息は分からない……」

間違いない……、アイツだ……。

そして、アイツと一緒に乗り込んだのは、アイツらだ……。

「そいつって……、腐ったみかんって……、言われてませんでしたか……？」

オレは口の渴きを抑えながら、必死に訊ねた。

「良く知ってるね。もしかして、ジオン君……、石田中……」

「……………」

オレは無意識で首を横に振っていた。

「前田丈……、確かに有名だったモンな。あれだけ悪さをすりゃ、名前も売れるよな……。今頃ヤクザにでもなつて、刑務所にも入つてんじゃねえのか？」

I k a r Uの口から決定打が出された。

間違いない……。リックイーの息子、岡村少年を金属バットで殴り、意識不明の重体にさせた前田丈。

そいつが今、宮さんを脅す、オレの敵……………。

第336話 キツパリスツパリサツパリ

事件から2年以上の歳月が経った今も、岡村少年の意識は戻らない。

オレは、前田の凍りつくような暴拳を耳にし、今まで以上にすくみ上がった。

同時に、石田中での忘れられない恐怖も湧き出す。

年少上がりの前田がやってきた石田中。

オレは当時、まさか前田が自分の2コ上だとはこれっぽっちも思わなかった。

ただ、尖^{とが}った目と、決して笑わない無表情な顔つきは、オレが今まで対峙してきたどんな不良よりも異質な感じがしたのは覚えている。

石田中のトップだったオレに興味は示さず、ただ黙々と自分の配下を増やし続けた前田には、やがて10人も不良たちがついた。

しかも、そいつらは皆、オレに縁^{ゆかり}のあるヤツらばかり。

前田の配下に下った10人が学校から姿を消したのと同時期、前田が岡村少年を意識不明の重体にさせ、少年鑑別所に入れられた事実

を耳にしたが、ウチの学校の不良たちも前田と一緒に高専に乗り込んでたなんて、当時は知る由もなかった。

犯行後はすぐ警察が駆けつけ、その場にいた全員が捕まったが、石田中の不良10人は、その日のうちに釈放された。

惨劇の日々が始まったのは、その2ヶ月後である。

約2ヶ月姿を消していた10人が、一斉に揃って姿を現した。

授業が終わったと同時にトイレに投げ込まれたオレは、便器に顔を突っ込まれ、クソまみれにされ、さらに土下座を強要され、頭が割れるほど額を床に打ちつけられた。

石田中で、のうのうと踏ん返り返ってたオレへの復讐である。

唇は半分削げ落ち、鼻の骨は折れ、体中の傷と痣は50を越えた。

次の日からも凄惨なリンチは続いたが、4日目にオレは、ふてぶてしくも木刀を持って登校した。

が、すぐにオレの木刀は折られた。

石を食わされ、教科書を全て燃やされ、頭も燃やされ、身も心も真っ白な灰になった。

高台の墓地でのリンチの最中、自殺を考えたオレだったが、断崖の絶壁から飛び降りようとした矢先、今までのリンチの返し波が訪れ、力なくその場に倒れ落ちた。

「喧嘩は終わり！」

そんな言葉を吐いたのは、やがてコスモ入りを果たした中島というヤツだった。

総勢10人による、4日間に渡るリンチが終わりを告げた瞬間だった。

オレはリンチだと思っていたが、中島はそれを喧嘩と言った。

オレは、身も心もズタボロだったが、自尊心を失わずに済んだのだ。……。

あの時、あの10人を触発させ、極悪な不良に仕立て上げた腐ったみかん、前田丈。

宮さんが、前田の逃走に力を貸すか、戦うかの決断をしなければならぬXデーまであと8日。

ここにきて、数々の点と点が線となり、その導火線が前田へと繋が

る。オレも、いつまでも避けては通れない。

因縁の前田丈。

アイツと決着を着ける時が、近いうちに来る……。

勝つか、負けるか・・・、戦うか、逃げるか・・・、判断しなければならぬ時が、もうすぐ訪れる・・・。

宮さんには、戦いを提唱したオレだったが・・・、ここにきてオレは・・・、戦う以前に、あまりにも強大な敵だった事に、今更ながら気付かされたのだった。

「お待たせしました。ジオン先輩が愛す珈琲、愛先輩がどんだケーキとコーヒーセット、I k a r U先輩が愛してマスカットパフェです」

そう言って朝露さんは、佐倉の前にどんだケーキとコーヒーセットを置き、テーブルからすぐに離れた。

その後ろから、トレーにアイスコーヒーを乗せた、メイド姿が良く似合う女の子が現れた。

「ご主人様あゝ、あゝんしてえ」

甘い声でオレに口を開けるよう指示する女の子。

一瞬あつけにとられた瞬間、女の子はアイスコーヒーのストローをオレの口に差し込んだ。

ゴキユ　ゴキユ

無理矢理？　アイスコーヒーを飲まされるオレ。

「じゅっくりどござ〜」

女の子は、オレに一口だけコーヒーを飲ませ、行ってしまった。

その直後、ドデカイ愛してマスカットパフェをトレーに乗せた、太めのオバサン？ もとい、メイドさんが現れた。

年齢は一見40代後半にも見えなくはないが、もしかするともう少し若いのかもしれない。

オバサン、もとい、メイドさんは、佐倉をどかしてIkaruの隣に座った。

押し出された佐倉は仕方なくオレの隣に座る。

タジタジのIkaruは、何か言いたそうにしていたが、口を開ける度パフェを口に入れられた。

「す、凄いサービスね・・・」

ちよっぴり引き気味の佐倉。

「な〜、佐倉、Ikaruとは上手くやっていけそっ?」

「ウン、とりあえず・・・」

「そっか。なら、良かった。そっだ、佐倉はAB型で、Ikaru

UはB型だったよな」

A B型とB型って言ったら、マジブ〜と宮さんの関係と一緒だ。

オレからのアドバイスとしては……。

「I k a r Uはね、私より2コも年上だし、頭良くてね、頼りになるんだ。だからね、私、どんどん甘えちゃおうって、思ってるんだ」

佐倉が楽しそうに笑った。

そうか、オレが言おうとした事、言われちゃったな。

佐倉の幸せそうな笑顔を見る限り、大丈夫そうだな。

「……じゃっ、オレ、そろそろ行くわ」

「え？ もう行っちゃうの？」

「話って、そんなモンだろ？」

「ウ、ウン……、そ〜だけど……」

佐倉が淋しそうな表情でオレを見た。

男女に友情はない？ そんな常識、オレが覆^{くつがえ}してやるよ・・・って、
ずっと思ってた。

でも、所詮、他人事^{ひたひ}だったんだ。

竜崎の言葉を思い出す。

『お互いに別れて傷ついて間もないのに、手を取り合って笑い者に
なれ？』

今なら、アイツの言葉の意味が良く分かる。

・・・だよな、ムリだわ、やっぱり。

オレにもムリだ。

オレも辛いし、無いとは思っけど、万が一、佐倉がオレに惚れちま
ったら I k a r U に迷惑掛けるだろ？

それに、オレだって男だ。

いつ何時心変わりして、I k a r U を蹴落として、佐倉に再ア
タックするか分からねえ。

そ〜いう意味でも、お互いの秩序を守る為に、別れたらキツパリス
ツパリサツパリ終わりにするのが賢明なんだね。

歴史が証明してるんだ。

男女に友情はない……。

ま、一度恋愛感情を持った男女の話だけど……ね。

「じゃ〜な」

「ウン、ジオン君、ありがとう……」

「ブボ、ボボボ、ブ〜」

オレはメイドカフェを後にした。

さようなら、佐倉……。

お幸せに……。

第337話 愛のムチ

宮さんが働く工事現場を覗くと、もう夜10時だというのに、宮さんはまだ汗を流していた。

「宮さん、差し入れ」

休憩時間、オレはたった一人で離れた場所でタバコを吸う宮さんに、温かい缶コーヒートを差し出した。

「悪いくね・・・」

相変わらずかつての覇気は微塵もなく、宮さんは溜息交じりであんな垂れている。

「今日、佐倉に会ってきました。アイツ、すっかり変わっちゃまって・・・。大人になったって言うか、母親らしくなっちゃったって言うか・・・。きっと、母親として生きる覚悟を持ったからだと思っんです・・・」

「そうか・・・。実は・・・、オレの所にも・・・、ナツオが来た・・・」

夏男？ 深雪みゆきさんの旦那？！

深雪さんは、中学時代の宮さんの元彼女で、宮さんの親友である夏男と結婚した。

「何か、あつたんですか・・・？」

「子供が産まれたそうさ。女の子だってよ。ナツオのヤツ、嬉しそうに泣いてたよ」

「産まれたんですね。そっか、良かったじゃないですか。女の子があゝ・・・」

「ガハハ、オレもさ・・・、つられて、ちよっぴりウルツときたよ。ガハハ・・・、オレらしくねえやな・・・」

いや、十分宮さんらしくけど・・・。

その後の言葉が続かなかった。

前田の話を出そうにも、戦う意志より恐怖が増してる今のオレには、宮さんに掛ける言葉が思いつかない。

・・・と、その時。

「宮先輩、お疲れ様です。・・・ん？ アレ？ アレしゝえ？」

突然現れたのは、マジブだった。

「マジブ〜」

「ジオン先輩」

素っ頓狂な声を出すオレに、マジブ〜は優しい笑みをくれた。

「こ、こんな時間に大丈夫？」

時計を見ると、11時近い。

「えへっ、親に内緒で出てきちゃった。だって、宮先輩が心配なんだモン」

小さな舌を出し、マジブ〜は笑った。

マジブ〜は、自分の首に巻いていたマフラーを取り、それを宮さんの首に巻いた。

「アタシが作ったんです。昨夜、生まれて初めて徹夜しちゃいました」

て、手作りマフラー？ さぞ、暖かそうだぜ！！

「I・m with you・always・・・」

「マジブ〜、それって、ど〜いいう意味？」

「アタシがついてる。いつも」

マジブはニッコリ微笑んだ。

・・・瞬間。

「何時だと思ってんだ！ ふざけんなっ・・・」

ペチン

途中まで本気だったが、寸前で力を抜いた、宮さんの張り手が炸裂した。

目を丸くして、おののくマジブ。

「・・・」

マジブは涙を浮かべて立ち尽くした。

確かに、今の宮さんの張り手は怖い。

何よりも、愛の込もった愛のムチが一番痛い。

マジブは暴力の苦手なAB型、おまけに中学生。

一方、暴力渦巻く修羅場の中でトップを張って生きてきた男の覇気。

さぞ、恐かったに違いない。

「マジブ、宮さんは、マジブを憎くて叩いたんじゃないからね。宮さんは、人一倍女性に対する暴力には反対する人なんだ。そんな宮さんが、マジブを叩いたのには、深い深い意味があるんだよ。マジブも心が痛かったと思うけど、宮さんはもっともっと痛いんだよ」

オレはすぐにフォローを入れた。

「アタシだって、そんなの百も承知ですよ！ 宮先輩ばかりズルイです！ 学校休んでまで働いてる理由言ってくれないし、アタシに夜出歩くなとか、神社の帰りは寄り道するなとか……、自分勝手過ぎます！！」

そう言ってマジブは、その場を走り去った。

「ゴメン、亀ちゃん。よろしく頼む」

「分かりました」

宮さんの心意を受け取ったオレは、すぐにマジブを追った。

流石にこんな夜分のマジブの一人歩きは許可できない。

マジブは、団地の小さな公園のブランコに座った。

悴む^{かじか}手に息を吹き掛け、夜空の月を眺めるマジブ。

「さつきは痛かった？」

「ウウン。全然、痛くないですよ。宮先輩、途中で力抜きましたモン。どくせなら、本気で殴れば良かったんです。そくすればアタシだって、こんなに嫌な気分にならずに済んだのに」

「はっはっは、宮さんが本気で殴ったら、マジブく、冥王星まで吹っ飛ばぞ」

「からかわないで下さい」

「ははは、ゴメンゴメン。でもさ、宮さんは良いヤツだぜ。あくやっつて働いてるのにもさ、ちゃんと理由があるんだよ。今は言えないだけでさ、きつと、マジブくも納得できるよくに、必ず理由を教えしてくれるよ」

「そんな理由、納得できるワケないじゃないですか！ ジオン先輩は理由知ってるんでしょ？ だから平気でいられるんですよ。どくせアタシは子供ですよ。ユイ先輩も、どくせ宮先輩が働いてる理由、知ってアタシに黙ってるんです。大人は皆、ズルイです」

大人って言われても……。

まく、中3から見たら、高2は立派な大人に見えるかもしれないけど……。

「オレたちはマジブくを子供扱いなんてしてないよ。それに、ユイだって、ホントに宮さんが働いてる理由なんて知らないと思うよ」

「嘘ですから」

「いやマジで。オレらってさ、仲間なんだよ。オレと、ユイト、宮さんと・・・、あと、竜崎ってヤツもいるんだけど、4人は仲間なんだ。でもさ、そんな仲間内でもさ、言えない事ってあるんだよ。時にはそいつで揉めるけど、そいつが原因で絆が崩れたりするけどさ、いつか和解できると思うんだ。上手く言えないけど、仲間を信頼できるからこそ、隠し事も出来るっていう・・・」

何か説得力に欠けるな・・・。

竜崎との問題も未解決なだけに・・・。

「何を言ってるのか分かりません」

マジブは頬を膨らました。

「・・・だよ。ははは」

「どうして宮先輩は、学校休んで働いてるんですか？ 朝から晩まで、毎日ですよ？ しかも、アタシに理由を教えてくださいないんですよ？ 心配するな、そのうち教えるって言われて納得出来ます？ 宮先輩、働き過ぎです。過労死しないって、言い切れますか？ アタシに宮先輩を見殺しにしろって言っんですか？」

一気にまくし立てるマジブは、相当ストレスが溜まってるに見える。

オレは真実を言うべきか・・・、言わないべきか……………。

……………言わないべき、だよな。

「オレも知らないんだ」

「嘘です」

「いや、ホント……………」

「ジオン先輩だけには言ったけど、後は誰にも言っていないって、宮先輩言っていましたモン」

宮さあ……………ん……………。

「いや……………、それは宮さん流のギャグっていうか……………」

「残念ですけど、もうアタシは騙せません。ジオン先輩は、アタシとの大事なモノを失いましたから。信用ってヤツです」

痛い……………。

む、胸が……………、痛い……………。

「ゴメンよマジブ、分かってくれよ……………」

「分かりません」

意外と頑固なんだな、A B型って・・・。

飾らず、本音で・・・か。

「分かったよ。そんなに知りたいなら教えてやるよ。その代わり、覚悟・・・、しろよな」

第338話 星に願いを

マンモス団地付近の小さな公園。

月明かりに照らされたオレとマジブは、公園の端のベンチに腰掛けた。

「本当に大丈夫なの？ 時間・・・」

「ハイ。アタシの家って、両親共働きなんです。お父さんの帰りはいつも2時を過ぎるし、お母さんは工場の夜勤で朝まで帰って来ませんから」

「へー、でも、門限は確か、夜の7時だよね」

「お母さんが出勤する時間は、アタシが寝静まった頃ですから」

「じゃー、こーして出歩くのは初めてじゃないんだ・・・」

「初めてですよ。今だってアタシ、罪悪感でいっぱいなんですからね」

「じゃー、もう帰るよ・・・」

「ダメです。言っつて約束したんですからね。ジオン先輩が全てを

語り終えるまで、たとえ2時を過ぎようと、アタシは家には帰りません！」

「兄弟は……？」

「アタシ一人っ子です」

「じゃ〜尚更帰ろ〜よ。もしお父さんかお母さんが帰って来たら、搜索願い出されるよ！」

「その前にアタシのケータイが鳴りますよ」

……抜け目が無いや。

「詩乃舞に聞いたけど、マジブ〜は昔、イジメられっ子だったんだってね」

「しのぶ〜、そんな事言っただんですか？ ふ〜ん。そ〜ですよ、アタシ、イジメられっ子でしたけど、それが何か？」

マジブ〜はふて腐れた表情であつちを向いた。

「実は、オレも、宮さんも……、マジブ〜と同じ、イジメられっ子だったんだ……」

「ホ、ホントですか？」

マジブ〜は目の色を変えて振り向いた。

「オレはさ、どっちかって言うと、暴力系のイジメでさ、マジブ〜が受けてたイジメとは異なるかもしれないんだけど……」

「どんなイジメを受けたんですか？」

「悪質なのは、テスト近くになると、カンペンの中のえんぴつの芯、全部折られたり……」

「アタシ、カンペンの中の物、全部捨てられた事ありますよ。ゴミ箱に！」

「じゃ〜、オレのはまだマシかもね。だってさ、えんぴつの芯は転がってたから、その小さなミリ単位の芯だけどさ、それで字が書けたから。マジブ〜はどうしたの？」

「ゴミ箱から拾って、使いましたよ」

「先生は気付かなかったの？」

「多分。でも、気付いても、知らないフリしてたんじゃないかな……って思います」

「周りにイジメられてるって、オレは気付かなくなかったかな。何て言うか、自分がイジメられてるって、認めたくなかったのかもしない」

「アタシは逆に、最初から皆知ってましたから。だから、アタシ、イジメられっ子なんだ……っていう自覚はすぐにありましたよ」

「親には相談したの？」

「言えませんでした。やっぱり、親は最終手段で、その前に自己解決しなきゃ・・・って、ずっと考えてました」

「出来たの？」

「ウウン。アタシが悪いのかな・・・？って最初思ってたんですけど、どう考えても自分の落ち度が見付らなくて。結局、自己解決も何もないまま、一人ぼっちにも慣れちゃって、このままでもいいって思ってた。早く卒業したいな、卒業して、前住んでた所に帰りたいって、毎日そればかり思ってたから」

「そうか、マジブは、中学と同時に引越して来たんだもんね。あっちは楽しかった？」

「ハイ。友達いっぱいいたし、仲の良い親友も・・・」

そこまで言うと、マジブは少しか俯うつむいた。

「今だって、いるじゃん。詩乃舞っていう、親友がさ」

「さっき、ジオン先輩言っていましたけど、相手を信頼してるから、隠し事も許せる・・・みたいな。でも、アタシは、親友だったら隠し事して欲しくないって思います。それに、隠し事は、誰にも言うて欲しくない・・・」

「そっだね。その通りだと思うよ。だからさ、多分マジブも、イ

ジメられてた過去の話、詩乃舞に言ってほしくなかったと思うの。詩乃舞もさ、絶対誰にも言わないでねっていう条件でさ、オレに言ったワケ。でもさ、結果的に、オレはこくして内緒って言われた話をマジブくにしちゃってるんだけど、確かにそこには矛盾があると思うんだ。でもさ、オレはどくして隠し事をこくして言えるかって言ったらさ、詩乃舞もマジブくも、信頼し合ってるの知ってるし、オレも2人の事を信頼してるの。だから、言えるんだよ」

「ちよつと、難しいです」

「じゃくさ、マジブくが誰にも話したくなかった過去をさ、オレに話した詩乃舞の事、どく思う？ ム力つく？ 裏切られたって、思う？」

「そこまでは思いませんけど、口が軽いなぐって、思つかもです」

「じゃく、オレ以外には言ってたなかったら？」

「それなら、許せます」

「どくして？」

「だって、しのぶくとジオン先輩は兄弟だから・・・」

「兄貴が公おみやげにしないって分かってるし、信頼できるから話したんだな・・・って思うよね。それに、ある意味、詩乃舞がオレに教えてくれたからこそ、今のオレたちの会話がある。この世に偶然はなく・・・」

「・・・全て、必然」

マジブは小さな声で呟いた。

「誰にも言えなかった辛い過去なんだけど、こゝして分かり合える者同士で語り合つとさ、少しだけ、傷が癒えないかい？」

「癒える……です」

マジブは薄っすらと涙を浮かべた。

「きつとそのうちさ、時が来たら、宮さんの昔話、教えてもらえるかもよ。でもさ、宮さんがどゝしても話したいのに言い辛くて言えない話なら、誰か伝つてでマジブの耳に入るかもしれない。でもそれは、宮さんが望んでる事かもしれないよね。つまりさ、仲間って、一つの絆で皆が繋がってるんだよね。マジブもさ、イジメられてたつていう昔話、いつか宮さんに語る日が来るかもしれない。オレはマジブの過去を少しだけ知ってるけど、マジブが言い辛そうだからって、それを宮さんに話そうとは思わない。なぜなら、マジブが自分の口でいつか話したいはずだって、思うから……」

「ハイ。いつか……、自分で話したいです……」

「多分、宮さんも同じだと思うんだ。だからオレは、宮さんの過去をマジブに語るつもりはないよ。宮さんが自分の口で語りたいて思ってるの、オレには分かるから……」

「そうですね。アタシも、宮先輩の口から聞きたいです」

マジブは小さな涙の粒を一つだけ地面に落とした。

「仲間って、兄弟と同じだと思うんだ。オレが言ってる意味、分かる？」

「ハイ。今になって、何となく分かってきました……。仲間同士、隠し事は、あるのもないのも同じ事。でも、言っただけで欲しくない事は決して言わない。逆に、言っても差し支えないって思ったら、信頼出来る仲間同士なら話すかもしれない……。それも絆の内の一つだし、それがある意味絆の輪……。？ そんなカンジですか？」

「ウン、オレより分かってんじゃない」

「そんな事ありません」

「じゃ〜、宮さんがどうしてマジブ〜に内緒で働いてるか、言うよ」

「もう、いいです。宮先輩の口から聞きたくなりました」

「ウン」

その後オレは、マジブ〜の住んでるマンションまで、責任を持ってマジブ〜を送り届けた。

別れ際、玄関先で、マジブ〜がいつも宮さんに贈る英語のメッセージを、オレにもくれた。

「May lucky star shine on you……」

、ジオン先輩に、幸せの星が輝きますよ〜に……」

そう言い残し、マジブはドアを閉めた。

親切だよなあ〜、マジブ〜、ちゃんと通訳してくれたよ……。

……オレも、勉強しねえ〜とな。

帰り道、何気なく夜空を見ると、瞬く星にまぎれて流れ星が輝いた。流れ星に願いを唱えると、願いは叶う……、そんな言葉が頭を過ぎる。

「さ、佐倉と……」

とっさなモンで、オレは佐倉の名前を出していた……。

「……I k a r Uよ、幸せに……」

そんな願いを口に出すオレ。

……ま、え〜〜わ。

第339話 VS リッキー

宮さん決断の日まで、あと残り7日。

散々悩んだ結果、オレはリッキーに会いに行く事に決めた。

「ジオン、ホントに行くのか？ 一種の賭けだぞ？ オレは絶対止めた方がいいと思うんだけど・・・」

ビクついたオツキーがオレを引き止める。

「ジオン、アタシもオススメ出来ないわ。万が一、リッキーがカンパの件の首謀者だったら、アンタ生きて還れないわよ」

ユイもオツキーに合わせる様にオレを脅す。

「オレの意志は変わらない。このままウヤマヤのままじゃ、オレはいつまで経っても前に進めないんだ」

それがオレの本音だ。

昨日、メイドカフェで佐倉とIkaruに会った時、Ikaruから聞いた衝撃の事実。

リックキーの一人息子の岡村少年は、2年以上歳月が経った今でも意識不明のまま、病院で臥^ふせられている。

原因は前田の暴行だ。

もし、その事実が本当ならば、リックキーが前田と協同でカンパを回し、金を集めているなど有り得ない。

オレは、I k a r U の証言を信じる。

そして、リックキーから真実を聞き出し、オレはその先に進むんだ。

今のままだったら、いつまでも前には進めない。

リックキーが敵か味方か・・・、そんな事でいつまでも足踏みしてるワケにはいかないんだ、オレは！

「本気で行くんなら、オレもついて行くぞ」

「アタシも行くわ」

オツキーとユイも、オレについて来る構えだ。

「勝手にしろ。その代わりに、リックキーに会うのはオレだけだ。2人は外で待機していて欲しい」

「分かった」

「分かったわ」

オレたちは学校を出ると、そのまま石田町総合体育館に歩を進めた。

夕方、オレたちは目的地へと到着。

「じゃ〜、行つて来る」

「何かあつたらすぐ、オレのケータイに連絡入れるよな」

心配性のA型は、こゝいう時はホントしつこい。

「分かつてるって」

「アンタがもしリッキーに齧られてアンタが口を塞がれても、アンタの嘘くらい簡単に見破れるんだからね」

世話焼きのB型も、こゝいう時はマジうるさい。

「じゃ〜な」

中に入ると、受付には誰も居なかったので、オレはそのまま中に入った。

体育館では、どこかの生徒たちがバスケットボールで汗を流していた。

さらに、体育館の壇上では、どこかの吹奏楽部が楽器の練習をしている。

そんな生徒たちを余所よそに、体育館の端でモップ掛けをする赤ジャージがいた。

「力也……、先生。オレです……、亀鶴ジオンです」

オレは躊躇ためらわずに声を掛けた。

一瞬オレを見て完全に動きを止めたリックキーだったが、すぐに目線を床に移して、さっきまでの作業に戻った。

A型に対して無礼講なのは百も承知だ。

人間関係に距離を置き、壁を作るA型にとって、オレのように、人様の家に土足で上がり込む無礼者は遺憾にしか感じない。

そんなの覚悟の上だし、何よりオレにはリックキーのご機嫌をとって時間の余裕はない。

A型の心を開かせるには、とても7日じゃ足りやしない……。

「先生、アンタに聞きたい事がある」

オレは遠慮せずにリックキーのテリトリーに足を踏み入れた。

リックキーは警戒するようにオレをジト目で見、手にしていたモップを縦にしたまま動きを止めた。

「いつも先生は、オレを注意する時、オマエらヤンキーは……つて、『ら』を含めてたのはオレも気になってた。オレに対してだけじゃなく、オツキーが銀髪にしてきた日もオマエらつて言ってたよな。オレはあの時、確信した。アンタは、オレたちヤンキー全てに対して、怒りを抱いてるんだ……つてな。アンタが執拗にヤンキーを敵に回すのは、性格なんかじゃなく、必要悪を演じてるだけなんだつてのもな……」

自分の心を覗かれたり、引き出されるのが何よりも嫌いなA型。

リックキーは、目を吊り上げて睨む。

「それが決定的になったのは、昨日、アンタの息子さんの話を聞いた時だ」

オレが息子と言った瞬間、リックキーは大きく目を見開いた。

「アンタのよく知る、前田丈……。オレの憎き、仇だ……」

「フン。貴様……。何を言い出すかと思えば、そんな事をわざわざ言いに来たのか……？」

「アンタにハツタリが効かねえのは十分に把握している。だからこそ、こゝしてオレは、正々堂々とアンタと面と向かって対峙している。オレは、もしかすると敵かもしれぬアンタの前に、こうし

て裸一貫で向かい合ってる。命懸けなんだよ、オレも。そんなだけ今は、切羽詰ってるんだ。そこん所だけ、汲んでくれねえか？ オレは本音以外、話すつもりはねえ〜って事だけ、理解してもらえりゃ、それでいい……」

「分かった。話を聞こうか……。ついて来い……」

リックキーはそう言って、オレに背を向けて歩き出した。

敵か味方が分からないヤツに背中を向けるって事は、少なくともオレを敵じゃないって判断してくれたって事か？

ふ〜っ、一先ず前進かな……？

職員部の部屋に入ったリックキーは、スーツに着替えて出てきた。

てつきり、この部屋で話をするのかと思ったら、外に出るの??

「せ、先生、い、一体、どこに……？」

ちよっぴり不安だ。

「病院だ。オレの息子に会わせたい……」

え？ ええ〜えっ？ そ、そこまでオレに心を許してくれたのか？ A型は基本寂しがり屋って言うけど、そんなに寂しかったのか？ それとも、よっほどオレの男気に惚れたの?!

いや待て、これは買かもしれない・・・。

「先生、白鳥ユイと沖田良雄も一緒に行っていていいですか？」

「・・・」

リックキーは黙って頷いた。

第340話 昏睡

「あつ、どうも……。明けましておめでとついでいます……。」

緊張気味に、オツキーは挨拶をする。

「げ、元気ですか……。？」

ユイも引き攣った笑顔で声を掛ける。

オレたちは、終始ムスツとした表情で黙り込むリックキーに、車に乗るよう促された。

オツキーは助手席に、オレとユイは後部座席に座った。

リックキーは無言のまま、車を走らせる。

「どうしてアタシまで行かなきゃならないのよ！ 一体どこに連れてかれるワケ？ ホントにこの人、敵じゃないの？」

ユイがオレの耳元で囁いた。

「大丈夫だ。行けば分かる」

オレも小声でユイに返す。

「行けば分かるって、天国にでも行けば分かるって意味？」

尚もユイはオレの耳元で囁く。

「だから……、言ってなかったけど、リックイーには息子がいて、その息子は……、I k a r Uと同級生で……」

「I k a r Uですって？ はあ？？」

「だから……、後で話す」

「ちょ……、ちょっと、はあ？ どうしてI k a r Uが絡んでるのよー!!」

とうとうユイの声が大きくなってきた。

「後で話すって言うてんだろ？ 今は説明してる暇はない！」

「オイ、静かにしろよ!!」

とうとう振り返ったオツキーに怒られた。

相変わらずリックイーは無言でハンドルを握る。

着いた病院は、石田町で一番デカイ、石田総合病院だった。

「アタシの姉貴が働いてる病院だわ」

ユイが咳く。

「ユ、ユイの、アネキ？」

ユイに姉ちゃんがいるってのは知ってたが、病院に勤めてるってのは初耳だ。

「脳神経外科で看護婦やってるのよ」

「マジかよ……」

……って事は、もしかすると……

月曜の夕方だけあり、ホールには沢山の人がいた。

オレたちは、エレベーターで7階までやってきた。

そのままリツキーの後をついて歩く。

ナースステーションまで来た辺りで、ユイが声をあげた。

「姉貴」

「ユイ」

ユイのお姉さんは、ユイと同じストレートの黒髪で、長い髪を束ねて三つ編にしていた。

小学1年くらいの時、一度だけ見た事あるよ〜な記憶はあるが、定かではない。

ユイとお姉さんは、10歳も年が離れているらしく、学校などで顔を合わす事もなかったので、オレとユイのお姉さんは今まで全く関わる接点がなかったのだ。

「ユイの姉ちゃん、白衣の天使・・・」

オッキーが目をキラつかせ、憧れの瞳孔でユイのお姉さんを仰ぎ見る。

「どうも、はじめまして、亀鶴ジオンです」

「ユイからたまに話し聞くよ。ユイは生意気だけど、根は良いコだからさ、これからも仲良くしてやってね」

ユイに負けず劣らずハスキー声で、威風堂々とした雰囲気と、不逞ふていの輩やからを寄せ付けけない威圧感、もしかしたらユイより勝ってるかもしれない。

「ねえ〜姉貴、岡村っていう患者さん・・・いる?」

ユイが小声でお姉さんに聞いた。

「あ〜、植物状態の岡村君の事?」

「植物状態？」

ユイが突拍子もない声をあげた。

「丁度、面会が可能な時間帯だ」

そう言ってリッキーは、オレたちを個室へと案内した。

ベッドには、『岡村』と書かれた名札が貼ってある。

目を閉じた少年は、今にも目を覚ましそうなほど、安らかな寝顔だ。

「オマエらと同じ年のまま、コイツの時は止まっている……」

せんえんせい
遷延性意識障害。

俗に言う、植物状態。

回復の見込みは、ゼロに近いという……。

「コイツは、正義感が強過ぎたのかもしれない。オレは、コイツをこんな目に遭わせた男を憎んではいるが、世の中のヤンキーたち全部を憎んでいるワケではない。オレは、生徒たちに痛い思いをさせたくない……って思ってるだけだ。だからオレは、自分の命を懸けてでも、調子に乗ってるヤツらを注意してきた。あんまり調子に乗っていると、痛い目見るぞ……、中には手加減の無い無法者もい

るのだから……と……」

リッキーはそう言って、花瓶の水をかえに行った。

「マジかよ……」

オツキーは言葉もなく俯うつむく。

「もう、2年以上……、もうすぐ3年になるわね。その間、このコのお父さんは、毎日欠かさず病院に顔を出してるわ。朝と夜の2回、毎日欠かさずね」

ユイのお姉さんは、岡村少年の布団を掛け直しながら言った。

「姉貴……、どこにか、このコを治す方法はないの？」

ユイが訊いた。

「巨額の治療費が掛かるけど、治療法がないワケではないよ。でもさ、一千万円なんて金額、いくら公務員でもなかなか出せるモンじゃないでしょ？」

「一千万?!」

オレたちは息を呑んだ。

一千万って……、そりゃ〜酷い。

「それで回復するなら安くない？ 借金して、何とかならないモンなの？」

「でもさ、回復の可能性は50%にも満たないの。だから、そう簡単に出来るモンじゃないのよ」

ユイのお姉さんはそう言うと、嘆息をもらした。

オレは病室を出て、真っ直ぐリッキーのもとへ向かった。

リッキーは洗面所で、花瓶の水を交換していた。

「先生、単刀直入に聞きます。先生は、どうして異動になったんですか?!」

第341話 極寒

KHJのガサ入れから、KHJが振り込んでいた口座と、リックの口座が一致する事が判明し、リックは警察から事情徴収された。

リックは、約1年前から謎の振込み人から毎月入金がある事に付き、すでにその旨は裁判所に相談していた。

ただ、個人情報絡む事もあり、中々思うように振込み人の解明までには辿り着けないでいた。

そんな矢先の警察からの事情徴収である。

ホストクラブや暴走族など寝耳に水のリックは、調べに対し、「勝手に振り込まれてたんだ」、「オレは何も知らない」と、容疑を否認。

結果、リックの無罪は証明されたものの、学校、PTA側から異動通知がなされたという。

PTAに対して常々口うるさかったリック。

口座振込み事件に便乗して、PTAのリック追い出し作戦は、まんまと成功した。

リックは、まさに被害者だったのである。

「これはオレの想像でしかないんですが、前田丈が罪滅ぼしの為に先生の通帳に慰謝料を振り込んでいた・・・とは考えられませんか？」

「仮にそうだとしても、私の通帳の口座番号や口座名、私の個人情報盗んだ罪は許せん。その上、息子と私への、最高の侮辱でもある」

「金などいらぬ・・・、命を返せ・・・って意味ですか？ オレは、このまま振り込みをさせとけばいいと思いますよ。そんで、お金が溜まったら、息子さんを最新の治療法で助けてやればいいんですよ」

「汚い金で息子を治せと・・・？」

「背に腹はかえられない・・・」

オレはその言葉を出すのに、胸に大きな苦痛を感じた。

オレやオツキー、テルまでをも悩ませていたカンパ。

それが、実は岡村少年を助ける為だったとしたら・・・？

そう考えると、オレはカンパを完全否定は出来なかった。

「オレにもプライドがある」

リックキーはそう言っつて、背を向けた。

リックキー、アンタも不器用な人間なんですね……。

悪に屈するくらいなら、命を捨てても構わない。

そんな古臭い頭では、この世知辛い世の中、苦労しますぜ。

……何て偉そうな事言える立場じゃないんですけどね。

オレもアンタと同類だから……。

オレたちは、病院を出た所でリックキーと別れた。

「……言葉もないわ」

I k a r Uから聞いた、岡村少年と、リックキーから聞いた話を一通り説明すると、ユイは大きな溜息をついた。

「KHJのボス、前田丈……。前田のオヤジはマエカン組の組長で、その人はジオンの親父さんの姉さんの元旦那。つまり、前田丈は、ジオンの従兄弟いとこかもしれない……ってワケか……」

オツキーが苦い表情で言った。

オレは、中学時代の因縁のある、前田丈との関連性を2人に話した。
宮さんが脅されてる件は、もちろん伏せて……。

「でも、これでハッキリしたじゃない。アンタは益々これ以上の探りは入れるべきじゃないって。ハッキリ言って今回の探索も、ホントに無謀で愚かな行為なんだからね！」

ユイに怒られた。

「そうだぞ、ジオン。もう、ホントにこれ以上は勘弁してくれよ。今度何か仕出かしても、オレらはこれ以上協力は出来ないからな」

オッキーもここぞとばかり説教をかます。

勝手について来たくせに……と、歯の裏辺りまで出かけたが、オレは寸前で止めといた。

リックイーは首謀者でも黒幕でも何でもない、被害者に過ぎなかった……。

しかも悲惨な被害者だ……。

これで目的はハッキリした。

最初から最後まで、敵は一人、前田丈……、アイツが全ての黒幕

だ。

その日の晩、いつものように宮さんが働く工事現場に向かった。

そこでは、ヘトヘトになって、足を引きずりながら働く宮さんの姿があった。

「宮さん、いい加減休みましょよ。マジで死んだらシャレにならないですよ」

「このまま死ねたら本望だ・・・」

・・・つたく、B型は心と裏腹な事を言うんだから。

「何寝言言ってんですか。マジブの為にオレは生きるって、そう言ってたじゃないですか?!」

宮さんの休憩時間、オレは、昨日マジブをしっかり送り届けたこと、今日、ユイとオツキーと3人で、リックに会ってきた事を話した。

「恐らく、この間の織川戦で、宮さんが殴られた金属バッドがありましたけど、あのバッドでリックの息子さんはやられたんですよ。そんな凶器を肌身離さず持ち歩き、仕舞いにや仲間引き継いだりして、あのヤロオは愉悦に浸ってたんですよ。とことん卑劣で血も涙もない、根っからの極悪人なんだ」

オレは前田を完全なる悪と言い切る事で、自分を奮い立たせているのかもしれない・・・と思った。

さらに、前田の暴挙を宮さんの耳に入れる事で、宮さんに奮起してもらいたいという願望もあつたに違いない。

しかし、宮さんはオレの心とは裏腹に、立ち上がるうという気配は全くない。

「マジでどうしちゃったんですか、宮さん。いつもだったら、いい加減立ち上がってるじゃないですか。あと、1週間できつたんですよ？ お金だって、100万集めるのは所詮ムリですから」

「いざとなったらオツキーがいる」

み、宮さん……。

「まさか、そこまで落ちぶれてるとは思いませんでしたよ。オレはずっと、宮さんを見縊^{みくび}るつもりはなかった。でも、今の言葉は聞き捨てならないですよ。いざとなったらオツキーに金を借りればいって……、宮さん、それこそ、それを言ったら御仕舞いでしょよ……」

哀しいですよ、宮さん。

哀しすぎて、涙も出ませんよ。

「疲れてるんでしょ？ 疲れてるんですよね？ 宮さん……」

……と、その時、宮さんの口からとんでもない言葉が飛び出した。

「どくして竜ちゃんが、あんな事を言ってたか、やっとその意味が分かったよ。ホント……、ウゼエくな、亀ちゃんて……」

宮さんが冷たい目、冷たい口調で言い放った。

竜崎以上の極寒な言葉に、オレは一瞬で全身が凍りついた。

でも、オレは竜崎の時に言われた『ウザイ』ですでに、愚弄に耐える免疫が出来てるのかもしれない。

オレは倒れかけたが、すぐに態勢を整えた。

「宮さん……、それ言つてて、辛くないんですか……？」

「辛れよ。だからこそ、自分の心を傷付けてでも、亀ちゃん追い払ってんだよ」

宮さんは地面を睨み付けながら言った。

「助けましょ〜よ。マジブ〜を、助けましょ〜よ。オレも一緒に命懸けますよ。あの前田のクソヤロ〜を一緒にぶっ潰して、マジブ〜を解放してあげましょ〜よ」

「亀ちゃん・・・、ど〜して亀ちゃんは、人の女の為に、命懸けれんだよ？ どこの世界に、そんなバカな男がいるんだよ?!」

「ここに居ますよ、ここに、目の前に！ ど〜してって？ 野暮ですよ、野暮！ 宮さんの仲間だからでしょ？ 宮さんが選んだ親友だからでしょ？ 宮さんがバカだから、バカが選んだ親友もバカなんですよ!!!」

「残念だけど、オレは戦うつもりは無い。オレの意志は変わらねえ〜よ・・・」

宮さんはそう言って、工事現場に戻って行った。

オレは最期まで諦めませんよ。

ウザイ男で結構ですよ。

オレは、アンタが立ち上がるまで、絶対諦めないので・・・。

第342話 涙

宮さん決断まで残り6日。

その日の晩、いつもの宮さんの工事現場で事件は起こった。

休憩時間を利用して、いつものようにオレと宮さんが会話をしている時だった。

中学生と思しき少年が一人、少女が三人、こっちを見て話をしている。

「見ろよ、あれが海老型の男だよネ・・・」

中肉中背で、見るからに喧嘩っ早そうな不細工顔の少年が、アゴを突き出して宮さんを睨んだ。

「ふうん。元、総番長・・・。確かに半端ないオーラ持ってるね・・・」

制服の下にパーカーを着込み、フードを被った女が腕を組みながら言った。

「遷^{レイ}サマ、宮の隣の男って、どっかで見えた事ないですか？」

フードの女の隣の、背の低い女が言った。

「亀兄でしょ？ 神社で会ったじゃん」

フードの女の隣の、もう一人の悪そうな女が言った。

言葉もない……。

あれはまさしく元旦、琵琶神社でオレとユイに絡んできた女たち。

底冷えする恐怖すら感じさせるフードの女の気迫に押され、オレとユイはテンションダウンしたのを覚えている。

あの時は年齢不詳だったが、あの制服を見る限り、石田中だと一目で分かる。

しかも、胸の赤いバッジは3年生の証拠。

あの男も、フードの女を含めた3人の女たちも、詩乃舞やマジブの同級生だと判断できる。

「……………」

宮さんは、タバコを銜^{くわ}えて顔を顰^{しか}めた。

オレは息苦しさを感じた。

一瞬で脳裏を掠めるのは、暴悪な前田の顔だ。

逃走中の前田は、マジブと引き換えに、逃走資金と車を用意するよう宮さんを脅した。

その人質とも言えるマジブを包囲してるのが、マジブの同級生たち。

・・・って、事は、アイツらこそ、オレたちの憎き敵？！

どうする？　へたにアイツらを刺激するのは危険か？！

それとも、ここでアイツらを叩きのめして、マジブを解放するか？！

究極の選択だ！！

「あいつらは、石田中のヤンキーですよ」

「だろ？な。・・・って事は、真誓を包囲してんの、アイツらかな」

宮さんもピーンときたようだ。

「究極の選択ですね。ここでアイツらを叩きのめすか、無視するか・・・」

オレは宮さんに選択を委ねた。

「ぶっ殺してくっか……」

即答？ マジかよ、宮さん？ や、やるのかよ？！

とつとつ重い腰上げんのか？ とつとつ立ち上がるのか？！

よっしや〜っ、とことん付き合っぜー！

「……つてのは冗談だよ」

宮さんは虚ろな目で小さな笑みを浮かべた。

はあ？ 冗談？！

「み、宮さん、チャンスですよ。せつかく目の前に、マジブを狙ってる敵がいるつてのに、おめおめと逃がすんですか？！」

「亀ちゃん、焦りは禁物だよ。オレたちの早合点でさ、アイツら全然関係ないヤツらかもしれないねえ〜だろ？ 一般堅気に手え出したらオレら、ただの腐れ外道だろ。現にヤツらが前田の手下だったとしても、アイツらやった時点で真誓の危険がさらに増すに決まってるじゃん」

「た、確かに……」

……そ〜かもしれないけど、何か違う。

何か、そんなの今までの宮さんじゃねえ〜!!

「ほ、ホントにどうしちまったんですか？ 宮さん?! アンタ、マジで腑抜けになっちまったのか？ 今までだったらなりふり構わず暴れまくって、力で解決してきたじゃないですか?! そんな、空っぽの頭使って考えようとする宮さんなんて、宮さんじゃないですよ!!」

オレは感情に任せて思った事をそのまま言った。

「フン、確かにそ〜だな。オレは腑抜けかもしんねえ〜。でもさ、これも経験で学んだんだよ。言っただろ？ オレはもう、誰も傷付けたくねえ〜って。傷付くのはオレだけで十分なのにさ、オレが暴れると、みんなも傷付けちまうんだ。考えてもみるよ、亀ちゃん。オレがアイツらぶん殴ってよ〜、マジブ〜守ったって悦楽に浸っても、アイツらの復讐の矛先がマジブ〜や詩乃舞ちゃん、亀ちゃんやユイちゃんに向くだけだろ？ それだけじゃなく、竜ちゃんとか雫ちゃんとか関係ねえ〜ヤツまで前田やコスモ、ギャラクシーに狙われるかもしれないねえ〜んだ。根絶やしに出来るモンならとつくにやっつけろ」

「じゃ〜、宮さんの闘争心が無くなったワケじゃ・・・」

「木っ端微塵の・・・、バラバラにしてやりてえ〜よ・・・、ホントはさ・・・。でもなあ〜・・・、簡単じゃねえ〜んだ。フツ・・・、オレは堪えてんだよ、ホントは・・・」

そう言っただけ宮さんは不気味に笑った。

ふと宮さんのコブシを見ると、血だらけでボロボロなのに気が付いた。

宮さんは・・・、腑抜けなんかじゃなかったんだ・・・。

宮さんは宮さんなりに、戦ってたんだ・・・。

「安心しましたよ、宮さん。やっぱり宮さんは宮さんですよ。腐っても宮さんだ。・・・つつつか、最初から腐ってなんかいなかった。宮さんはずっと、戦い続けてたんですね。最後に一つだけ言わせて下さい・・・」

「・・・」

宮さんは、黙ってオレの目を見た。

「一人で戦つてると思ったら、大間違いだ。水くせえくにも程がある。自分だけ命張るだあ？ 誰も傷付けたくねえくだあ？ 宮さんのそんな自己中心的な考えが、どんだけ仲間を傷付けてるか分かってんですか?!」

「・・・」

宮さんはオレに鋭い眼光を見せた。

今にもオレの胸倉を掴んで、オレを八つ裂きにしような眼光。

みんなでコツコツ積み上げた積み木を、この人は一気にぶっ壊す。

いつも、そくやっつてぶっ壊してきたんだろ？ 目の前の幸せを・・・、そくやっつてぶっ壊してきたんだ。

自分が犠牲になる事で、いつもそくやっつて、みんなを丸く治めてきたんだ。

自分が悪者になる事で、自分が笑い者になる事で・・・。

「死んでねえくじゃないっすか？ 宮さんの目えく、今でもギラギラしてるじゃないですか？！ 何が放つておいてくれた、何が人の女の為にどくしてオマエは命が張れるんだ・・・だよ。自分が一番辛いくせに、自分が一番悪を許せないくせに・・・、自分が一番平和を望んでるくせに・・・、自分が一番笑いたいくせに・・・、自分が一番悔しいくせにっ！！ アンタはどくしていつもいつも・・・」

オレの瞳からは、自然に幾つもの涙が零れた。

溢れて溢れて止まらない。

まるで、水道の蛇口が壊れたかのように、オレの瞳からは涙が溢れてきた。

今まで溜まっていた辛かったモンが、一気に溢れてきたようなカンジだ。

「ゴメンな、亀ちゃん……」

宮さんは、そう言って唇を噛み締めた。

「宮さん……」

「辛くて、辛くて……、見失ってた……。大切なモン、見失ってたよ。そっだよな……、オレ、持ってるんだよな、凄え〜強え〜、大切なモン」

「当たり前じゃないですか」

「まだ、あるかな？」

「ありますよ、ここに……!!」

第343話 告発か否か

オレと宮さんがガツシリ握手した頃には、すでにフードの女たちの姿はなかった。

明日の夕方、オッキーの家で話し合うことを約束し、オレは工事現場を後にした。

また一歩前進した。

全く目の前が真っ暗で何も見えなかったオレたちの未来に、ほんの少しだけ光明が見えた瞬間だった。

ついに、宮さんが立ち上がった。

そして、オレたちは歩き出す。

翌日、学校が終わると同時に、オレは走って家に帰った。

急いで着替え、出掛ける準備をしていると、詩乃舞が部屋に入ってきた。

「どうしたの？ そんなに慌てて・・・」

「あゝ、久しぶりに宮さんが休みなんだ。一分一秒も無駄にしたく

なくてな」

「それホント？ だったらマジブ〜に教えなきゃ・・・」

「あっ、ダメダメ」

「ど〜してよ〜」

「今日は大人の話し合いなんだ。ゴメンな」

「ぶ〜」

詩乃舞は頬を膨らませて部屋を出て行った。

まずはオレたちだけで話し合って、真相を詩乃舞やマジブ〜に話しかどうかはそれからだ。

マジブ〜が人質になってるなんて知ったらきつと、中学生の2人には精神的に耐えられない。

べ〜べべべべ

ナンバーはね上げ、チャンバー付きのオレの原チャリ、『ポンタスーパードEOデオ』に跨り、オレは思い切りエンジンを吹かした。

オツキーの部屋に到着した時には、すでにユイも宮さんも到着して

いて、すでに暖房の効いた部屋のコタツで語らっていた。

「ザツと聞いたわ。大変な事になってるわね」

ユイがみかんの皮を剥きながら、難しそうな顔をする。

「今まで黙っててゴメンな。色々あって・・・」

オレはユイとオツキーに、黙ってた事を詫びた。

「オレの心の整理がつかなかったからだよ。全部オレのせいだ。亀ちゃん、ホント、辛い思いさせてすまなかった・・・」

宮さんはそう言って頭を下げた。

「いやいやいや、一番辛いのは宮さんですから」

マジ恐縮。

「しよ〜がねえ〜だろ、前代未聞の大事事件なんだから。ま、とりあえず飲んで」

そう言ってオツキーは、ココアをオレたちの前に置いた。

大事件？ 事件・・・、そうか、これは事件なんだ、犯罪なんだ。

「ど〜して今まで気が付かなかったんだ？ 早速、警察に通報しな

きや・・・」

事件という一語を聞いて、オレは焦燥感に襲われた。

「そうよね、一応、警察には知らせた方がいいかもね」

ユイもオレの意見に同調する。

「待ってくれ。オレは・・・、前田に直接脅されてんだ。万が一、警察に垂れ込んだら、その時点でマジブの命の保証は無いつて・・・」

宮さんは真剣な眼差しを向ける。

「うん・・・、そこなんだよなあ。確かに、前田は容赦なく刺し違えるだろうな・・・」

「ジオンの言う通り、オレも危険な気がする・・・」

オツキーは腕を組みながら座った。

「でも、こゝという事件って結構あるんじゃないかしら？ 百戦錬磨の警察なら、こゝという時の対処法を知ってるんじゃないの？」

「ユイの言う事も満更じゃないとは思っけど、あの丸暴担当の、警察官局長の息子の竜崎ですら、親に事件を黙ってたんだぞ。それを考えると、警察は頼りになるけど、人質の命までは守れないかもし

れないって思う・・・」

警察に告発するのは簡単だ。

それに、犯罪を知ってて、犯人の居所の情報を掴んでるのに、それを通報しないのは犯人隠匿にもつながる・・・。

でも・・・。

その時オレは、『宿命の戦い』の大会終了後、竜崎と口論した時の事を思い出した。

『こつちこそ、スミマセンでした。仲村さんたちを止めたのも、みんなを救いたかっただけっす。リッキーが逮捕されたら、アイツは通報したヤツと必ず刺し違えようとするっす。情報はKHJから筒抜けなら、きつとジオンさんや宮さんが狙われるっす。それだけは避けたかった・・・』と言って、哀しい顔を見せた竜崎。

そんな竜崎にオレは、『オマエの優しさ、身に沁みてるよ。でもさ、ダメなモンはダメだろ。竜崎の行動は法的には裁かれないけど、通報しようとしてる人を止めたりすんのはオレは罪だと思っぜ・・・』と、冷たく言い放った。

・・・が、皮肉なモンで、今になって竜崎の気持ち痛いほど分かる。

竜崎と同じ立場に立った時、アイツの痛み、苦しみが手に取るように良く分かる。

罪なのは知ってるけど、犯人隠匿になるのかもしれないけど……
、人質の事を思うと……………。

警察が信用できねえ〜ワケじゃねえ〜。

でも、この世知辛い世の中、自分の身は自分で守らなきゃならねえ
〜時もあるんだ。

警察に相談したら、警察が前田の配下を根絶やしにしてくれるなら
いい。

でも、実際はそんなの不可能だ。

オレたちのスタンスは、犠牲者を一人も出さない。

まず、警察に通報した時点で、それは不可能に変わる。

運良く犠牲者を出さずに前田の逮捕に成功しても、前田の意志を引
き継ぐ者が、報復でマジブ〜を狙う事は十分考えられる。

やはり……、宮さんが何度も考えを駆け巡らせて出した答えが、
一番無難なのかもしれない。

「オレ、100万くらいだったら何とかなるよ。F・R・S売れば
何とかなる!!」
フォール・リード・スミス

オッキーが食いしん坊のような口元で、ニッコリ微笑んだ。

オイ、F・R・Sの話題は内緒じゃ……?!

「何よそれ?! も、もしかして……」

ユイが目の色を変える。

第344話 ユイのギター

「あ〜っ、アタシのギター〜!!」

ユイはF・R・Sを見つけやるや、ギターに抱きついた。

「今はオレのギターなんだけど・・・」

たじたじのオツキー。

「これ、オツキー、アンタが買ったの？ あのギターショップのシヨウインドーに飾られてた、思いまわしきこのギター、一体いくらで買ったのよ?!」

「ひゃ、198万円・・・です」

オツキーが申し訳なさそうに言った。

「はあ〜〜? マジでえ〜〜?」

ユイは今にも卒倒しそうなほど驚いた。

「オマエ、ふざけるのにも限度があるだろ!!」

宮さんも青筋を立てて声を荒げた。

「スイマツセ〜ン!」

オツキーは平謝りをするが、目は笑っている。

「ま〜い〜わ。オツキーのお陰で〜してアタシの元に戻ってきたんだし」

「いやいやいや、それ違うから。それオレのギターだから」

「コレを売るのはアタシが許さないわ。コレを売るくらいなら・・・、そ〜ねえ〜、コレなんてど〜かしら? リサイクルショップに持ってっってみない?」

ユイは150インチの3DプラズマTVに触れながら言った。

「それ買ったばっかなんだけど・・・」

「じゃ〜、こっちのパソコンなんてど〜だ?」

オレは、オツキーの宝物でもある、数台の自作PCを指差した。

「オマエまで調子に乗るなよ、ジオン!」

オツキーがいい加減怒り出した。

「なあ〜、オツキー、もし、出せるとしたら、いくら出せる? ギ

ターは売らずにだ。あくまで、もしもの場合だ・・・」

オレは、皆が言い辛いであろう、シビアな話題をオツキーにふった。宮さんもすぐにオツキーの言葉に耳を傾ける。

「そうだな、ぶっちゃけ100万なら、下ろせばすぐ出せるよ」
オツキーはメガネをズラしながら言った。

凄えくな・・・。

「単刀直入に聞く。マジブを助ける為に、100万寄付できるか？」

オレはオツキーに訊いた。

「ちよつと・・・、寄付は・・・、ムリだな・・・」

「だよな。じゃ、必ず返すって約束で、一旦貸す事は可能か？」

「それは、そだよ。人の命が懸かってるんだ」

オツキーは唇を尖らせた。

人の命とか言っというて、寄付は拒んで貸すのはアリかよ?! 震災

とかで、被災者に義援金という名目で関心を惹ひいとして、結局金を貸すだけの金融機関みてえなヤツだな。

ま、え〜わ。

「勘違いして欲しくねえ〜が、オレは、オツキーから金は借りるつもりはねえ〜ぞ」

宮さんが眉間にシワを寄せながら言った。

分かってますよ!!

だから悩んでるんでしょ?!

「宮さん、前田から直接脅されたって話ですけど、それって、直接本人に会ったってワケじゃないんですよね？ 電話か何かですか？」

オレは宮さんに尋ねた。

「コスモの3強の1人に、明斧あけおのってヤツがいるんだが・・・」

明斧・・・？ その名前、どっかで・・・。

「もしかして、明斧太郎？」

オッキーが言った。

そうそう、太郎だ太郎。

あれ？ 何でオレ、その名前知ってんだろ？！

どうして名前を知ってたのか思い出せないでいると、

「その人って、うちらが1年の時の生徒会長でしょ？ 応援団の团长もやってたし、柔道部の主将もやってたわよね」

ユイが思い出させてくれた。

「そうそう、凄くデカイ奴だよな。あの柔道部の顧問の大和が手塩にかけて育てたっていう・・・」

オッキーが興奮気味に語る。

武蔵の生徒なら、アイツの顔と名前を知らないヤツはいないだろう。

ま、一目見ただけで大抵のヤツは震撼するね。

何たって、アイツの巨体は半端ねえから。

宮さん3人分はある。

そんな明斧太郎は、オレらが1年の時、3年だった生徒会長。

しかも応援団の団長でもあり、柔道部の主将。

さらに、コスモの3強の一人ときたもんだ。

「かつてオレは、明斧先輩……いや、あの明斧のヤロウに背骨をやられて柔道を断念したんだ……」

宮さんは悔しそうに歯がみながら、今まで語られなかった苦い過去を語り出した。

第345話 因縁の明斧（前書き）

第345話 因縁の明斧

『未来の横綱つてタイトルで、相撲やった宮さんが全国ネットのニュースで特集された事があるんすよ』ってのは竜崎談だが、宮さんはガキの頃から体格が良く、子供の頃は相撲が強かった。

中学になってから、宮さんは相撲から柔道に転向するのだが、この時に宮さんを触発したのは何を隠そう、明斧太郎だった。

当時、地元の小学生では負け無しだった宮さんに、TV局が用意した刺客が明斧少年だった。

稲田村の小学5年のチャンピオン、宮大地に挑戦するのは、岩田町の小学6年、明斧太郎。

それは、やらせ番組のやらせ企画で、村VS町の図式で窮鼠猫を噛む的発想で、最初から宮さんが勝つシナリオは出来ていたのだ。

TVカメラが回る中、土俵を囲んだ沢山の村人や小学生たちは、何も知らずに宮さんの応援を始める。

いよいよ、やらせ試合がスタートした。

「お手柔らかに・・・」

そう言つて、明斧少年はプクプクした顔を歪ませた。

「こちらこそ……」

大人たちに言われるがままセツティングされた勝敗に、宮さんは子供ながらに罪悪感いっぱいだった。

とりあえず、申し訳ない気持ちで、宮さんは明斧に作り笑いをしたのだ。

『はっけよい……』

行司ぎょうじが掛け声をかけた、その瞬間、宮さんは明斧の眼光が鋭く光つたのを見逃さなかった。

本気だ……！！

宮さんは直感でそう感じた。

『のこつた!!』

試合が始まると同時に、がっぷり四つに組み合った両雄。

つ、強い……。

宮さんは組んだ瞬間、明斧の力量を肌で感じる。

しかし……、結果は宮さんの圧勝。

明斧少年は頭を掻きながら土俵を下りた。

「嘘だ、嘘だよ、明斧君はわざと負けたんだ。本気でやったら、オレ、絶対負けてたよ」

宮さんは、辺り構わず喚わめいたが、そんな叫びは沢山の拍手でかき消されたのだった……。

それから一年半の月日が流れ、宮さんは中学に入学と同時に、柔道の道に足を踏み入れた。

相撲から柔道に転向したのには理由わけがあった。

かつて相撲で対決した明斧少年が、中学に入ってから柔道を始めたという噂を耳にしたからだ。

TVの為に、わざわざ遠くからやってきた猛者もさが、自分の為にわざと負けてくれた。

その悔しさが、宮さんをずっと苦しめていたのだ。

組み合った瞬間感じた敗北感。

試合で勝っても完敗だった。

宮さんは、いつか必ず明斧と正々堂々と勝負をし、本当の意味で勝利、リベンジしたいと願っていたのだ……。

やがて柔道にも磨きがかかり、いつしか宮さんは県大会にまで歩を進めていた。

その頃はすでに、国体優勝候補とまで謳われていた。

オリンピックの元金メダリストと練習したり、将来のオリンピック選手とまで謳われ、宮さんは数々の功績を残した。

……が、それも2年の半ばまでの話だった。

岩田中との対抗試合は、ついに主将对決での超決戦にもつれ込んだ。

その時、ついに宮さんは、明斧との運命の再会を果たす事になる。

目の前で対峙するのは、夢にまで見た対戦相手、宮さんはイヤでも興奮した。

宮さんは2年なので、万が一負けても来年があつたが、目の前の明斧には後がなく、負ければ引退、勝てば国体出場が掛かっている。

時は満ち、いよいよ国体出場の為のキップをかけた大一番が始まった。

試合は宮さんのペースで始まり、宮さん得意の払腰の「有効」の判

定に、明斧の「2回目の指導」が加わり、有利に試合は進んでいた。

・・・が、試合終了まで1分を切った時、

「大地君、ゴメン、負けてくんねえ〜か？」

耳元で囁く明斧。

宮さんはとっさの判断に迫られた。

かつて、TV局のやらせ企画で負けてくれた明斧。

あの時、明斧は全国ネットで恥を掻いた。

オレの為に…………。

今の明斧には後が無い。

勝てば国体、負ければ引退。

逆にオレは、負けても来年がある。

むしろ、今、国体に出るより、来年の方が、オレの力量もアップしてるし、色々と好都合かもしれない。

ここは、譲ってもいいかもしれない。

そうすれば、義理を果たせる！！

そう考えた宮さんは、

「明斧先輩、分かりました。オレ、力抜くんで、投げて下さい」

「そうか？ 悪いな、大地君」

「いえ、これで昔の借りを返せる」

そう言つて宮さんが力を抜いた瞬間だった。

「バカかオメエは！！」

明斧は、力を抜いた宮さんを一瞬で高く持ち上げ、そのまま裏投げを放った。

「ぐわあ~~~~っ！！」

畳に頭から落ちた宮さんは、後頭部を強打し、大きな悲鳴をあげた。

威力は強大だったが、低速での投げだった事もあり、「一本」には至らず、「技あり」の判定が下った。

「敵に情けをかけるとは、オメエはホントに失礼なヤツだな。オレが身をもつて教えてやるよ！！」

そう言って明斧は、大きくジャンプし、上から降ってきた。

うつ伏せ状態の宮さんに、ジャンピングボディアタックのような体勢で落ちてくる明斧。

ドスン

「ぎゃ~~~~っ!」

明斧の全体重を乗せた攻撃を、全身背面に直撃した宮さんは、その場で悶絶。

固技に移行した明斧は、容赦なく裸絞めで宮さんを締め上げる。

ピッ ピーーーーッ

笛の音が鳴り、試合は判定に持ち込まれた。

・・・が、宮さんは立てなかった。

結局試合は明斧の「優勢勝ち」で決着はついた。

宮さんはそのままタンカで運ばれ、病院に直行だった。

レントゲンの結果、背骨が湾曲。

さらに、左腕と右足、肋骨ろっこつ6本の骨折。

再起不能……。

柔道は断念せざるをえなかった……。

……が、誰を責められよう。

何もかも、自分の弱さ、自分の情けが生んだ産物。

悪いのはオレだ……。

敵に情けを掛けられる事ほど、侮辱的な事はない……。

確かに明斧が誘惑してきたのは事実だが、それは明斧がオレを試しただけかもしれない……。

どっちにしろ、オレが心も柔道も弱いのが、全ての原因。

これからは、敵に容赦しない……と誓うものの、時すでに遅し。

宮さんは自分を責めまくり、ついには柔道を離れ……、やがて……、修羅の道を歩き出す……。

第346話 濃い人生と薄っぺらい人生

「明斧は、悔しかったんだろ？な。年下で自分より弱いヤツに、敵地で、しかも大勢の前でわざと負け、さらには全国ネットで恥をかいたんだ」

宮さんがしみじみと語る。

「何よそいつ、何て卑劣ひれつなヤツなのかしら。だってズルくない？ 相手の弱みに付け込んで勝とうだなんてさ、だってそのまま試合を続けてたら、宮さん勝ってたかもしれないのよ。明斧の苦し紛れの作戦だわ」

ユイが目くじらを立てる。

「そんな作戦にまんまと引っ掛かったオレが悪い……」

宮さんは力なく言った。

「でも、明斧のお陰で、それから容赦なく敵を潰しまくったワケでしょ？ 喧嘩で……。ある意味、今の宮さんがあるのは明斧のお陰かも。その時の経験がなかったら、総番長までのし上がれなかったと思いますよ、オレは……」

柔道の道を失ったのは大きいけど、運命を大きく変えたのは確かだ。

その時、宮さんが勝ってたら、オレは宮さんに出会う事もなかったに違いない……。

「で、明斧はその後、国体に出場したの？」

ユイが宮さんに聞いた。

「1回戦で敗退しやがったよ。その時はホント悔しかったね。オレの魂背負って戦うくらいの気迫に期待してたんだけど、あのヤロ〜、試合前にタバコで停学なんぞ喰らいやがって、そのくせ先公に泣きついて、内密で試合に出させてもらってそのザマだ」

ホント、しょ〜もねえ〜ヤツだな、明斧。

「それからオレは、グレちまって喧嘩三昧。明斧は武蔵の柔道部で活躍してたのは皆知つての通りだよ。顧問の大和に愛され、主将をやり、応援団の団長に抜擢され、さらには生徒会長。栄光の道を進む明斧と、腐り果てた人生を歩む、宮大地ってワケだ……。ガッハッハッハ」

宮さんは大きく笑った。

「でも、結果的にそ〜とも言えないんじゃない？ 表面的には輝かしい高校生活だったみたいだけど、結局今では暴走族で、前田の犬なワケでしょ？ 宮さんはさ、沢山の人たちに愛されて、仲間もいて、彼女も出来て。今輝いてるのは宮さんじゃない？ 腐ってなんかないわよ、宮さんの人生。むしろ、輝いてるじゃない」

ユイが褒め称える。

「オレもユイと同意見ですよ。何か、今も昔も宮さんは変わらないんだな。って、何か、ちよっぴり安心したって言うか、嬉しくて笑っちゃうって言うか……」

「笑うな亀ちゃん」

すぐツッコむ宮さん。

「だって、どっちが面白かったって言ったら、宮さんの人生の方が面白いと思いますよ。将来の横綱、将来のオリンピック選手とまで謳われた男が、落ちる所まで落ちて、それでも這い蹲って立ち上がり、こゝして前を向いて歩いてるんですよ。明斧なんて、中途半端じゃないですか。まず、応援団と柔道部を掛け持つ所からして中途半端ですよ。その上、生徒会長って、どんだけ薄っぺらいんですか？！さらにはコスモ。オイオイ、じゃ〜オメ〜は生徒会長やりながら暴走族やってたのかよ、みたいな」

そう、まるで、ヤクザと政治家掛け持つ、みたいな。

「そう言われるとオレも複雑だね。素直に喜んでいくんだかよくないんだか。明斧がコスモってのは知ってたが、卒業してオレとは全く別の人生を歩んでるんだし、接点がなかったから、オレは存在すら気に掛けてなかった。そんな明斧が、またしてもオレの前に現れやがった。マジブ〜が帰ってから間もなく、オレも亀ちゃんの家を後にした直後だ……」

宮さんは、その日の事を語り出した。

『オレ、不器用だから上手く言えねえ〜かもしんねえ〜けど、正直な今の気持ち……、言う。マジブ〜の為に……、オレは死ねない』

思いもよらない宮さんの名言。

『Your presence is often the best present. (宮先輩が居る事が、アタシにとって、最高のプレゼントだよ)』

マジブ〜も、そんな温かいメッセージを残した。

そんな2人のラブラブっぷりを見せられ、オレと詩乃舞はちよつぷり妬やいたが、マジブ〜の過去の話を聞いたり、宮さんの哀しい過去を思い出したりして、今ある2人の幸せを心から喜べて、お世辞抜きで歓迎できた。

……その日である。

オレの家を出た宮さんは、いつものように住宅地を歩いていた。

マンモス団地付近の小さな公園。

マジブ〜が住んでるマンションの近くだ。

宮さんは、そこがマジブ〜の家の近くだと知ってたので、遠回りだったが、あえてその周辺を歩いて帰っていたのだ。

ストーカー？ いやいや、れっきとした優しさですから・・・。

宮さんは、公園に屯たむろしている輩やからを見て、そこを通った事を後悔した。

公園には、改造されたバイクが3台停めてあった。

ベンチに座る明斧太郎、その近くでウンコ座りする顔立ちの良い男。

まさにコスモの3強の内の2人だった。

その近くで、中学生と思しき少年が一人、宮さんを執拗に睨んでいた。

宮さんは、引き返すわけにもいかず、とりあえずタバコを吸いながらソツポを向いて足早に歩いた。

・・・が、

「よお、大地い！ オレだあ、明斧だあ」

第347話 コスモの3強登場

まさに、墓穴を掘った瞬間だった。

そこで引き返せばよかったものの、宮さんは公園の門を潜った。

「よお、明斧先輩じゃないですか。元気ですか」

笑顔を振り撒きながら、宮さんは明斧たちに近づいた。

柴と秋鹿に聞いて知っていた。

KHJのボスこと、前田を匿かくまってるのは、ここにいるヤツらだというのは知っていた。

だが、ここで逃げるのもおかしい。

むしろ、逃げることによってへたに目を付けられても困る。

ここは上手く誤魔化して、やり過ごすのが得策……。

そう考えた宮さんは、嫌な予感を押し殺して明斧たちに挨拶をした。

「アンタ、最近総番長辞めたんだろ？」

顔立ちの良い男が宮さんに訊ねた。

宮さんは、その男との面識はあり、コスモの3強の一人だというのは以前から知っていたので、年下だったが一目置いて頭を下げた。

もう一人の男が宮さんに近づいてきて、

「あゝ、初めまして、オレが石田中の仁沢にさわ光圀みつくにだよネ」

そう言っつて、不細工顔の男は手を差し出した。

「もしかして、君もコスモなの？」

宮さんは、中学生と思しき男の手を握りながら、そう尋ねた。

「フツゝさあゝ、こつちが名乗ってんだからさあゝ、そつちも名前くらい名乗るよネ」

「ほほゝ、オマエ度胸あるなあゝ、出世すんぞ」

そう言っつて宮さんは、思いっきり握った手に力を入れた。

「仁沢は恐いもの知らずなもんで、スマンな大地。コイツまだ中坊なんだけだよゝ、こゝ見えてもウチの3強の一人なんだわ」

明斧はそう言っつて、宮さんと仁沢の中を引き離した。

コイツがコスモの3強だ、ふざけやがって、礼儀つちゅーモンをオレが教え込んでやるか・・・と、頭に血が上った宮さんは、仁沢の襟首を掴もうとした。

その矢先、

「アンタ、宮って人だよネ？ オレは元々アンタを知ってたんだよネ。大会とか見てつから。アンタの仲間にさ、竜崎光一つつい人いるよネ？ オレの女が昔、あの男にストーカーされてんだよネ」

仁沢はいきり立った。

「ほほ、そいつは失礼したな。それから、オレの方も無作法な振る舞い、失礼したな。オレは武蔵で総番長やってた、宮大地」

宮さんはそう言って仁沢を睨んだ。

「ちょっと、その竜崎ってヤツにムカついてただけだよネ。ホント、それだけだよネ。もう、いいしネ、過ぎた事だし、別にオレはもう怒ってないしネ」

宮さんの一睨みにビビった仁沢は、目線を逸らしてペコペコと頭を上下させた。

「ホントにいいのか？ オマエ、竜崎ってヤツをぶっ殺すって言うてたる？」

明斧が仁沢の怒りに薪まきをくべる。

「仁沢君、昔っていつだ？ 君の彼女は、いつ、竜崎につけ回された？」

「いつって？ あゝ、去年の夏頃って言ってたよネ、ウン」

「ほほゝ、で、君はいつ頃からその女と付き合ってるんだ？」

「最近だよネ。あゝ、もういいじゃん、いつでもネ。根掘り葉掘り聞かないよネ、フツゝ。照れるしネ」

「その彼女、名前は何てゝんだ？ それだけ聞かせてくれや。オレの方から竜崎にはキツク言っとくからよゝ」

宮さんは、薄々何かを感付いてはいたが、念の為に仁沢に聞いた。

仁沢は案の定、とんでもない名前を口にした。

「朝露雫、アンタの仲間だよネ。．．．って事は、オレもアンタの仲間入り？ なんてネ。．．．もう、いいよネ？」

「フツ．．．、そゝか．．．。色々聞いちゃまって、悪かったな、仁沢君．．．」

「別に気にしてないし、オレの方も挨拶省けたしネ。ホラ、彼女がネ、仲間たちに自分らの事紹介したいって言ってたからね、そのう

ちマジで挨拶しないとって思ってたんだよネ」

仁沢はそう言っつて、タバコを吸い始めた。

・・・と、その時、誰かのケータイが鳴った。

「はい、明斧ですが。あゝ、ボス、どうしました？ え、今？ あゝ、タカノブはここにはいないですよ。・・・中島と、オレと、仁沢と、宮大地。・・・そう、織川とやった宮大地。・・・え？ ハイ。・・・大地、前田さん。・・・」

明斧はケータイを宮さんに手渡した。

震える手を片手で押さえながら、宮さんは電話を耳にした。

『久しぶりだね、宮大地君。その後、調子はどうだい？』

「ボチボチですかね・・・」

『クッククックク・・・、どこのどいつか知らないけどさ、やってくれたね・・・』

「何の事ですか？」

『すつとぼけるの上手いな、宮大地君』

「ちゝ、何の事やら？」

『オマエの差し金じゃねえの？ 後さ、心当たりねえんだよ。ケ〜サツに垂れ込んだの、オメエ〜なんだろ？ 織川は自分の事以外自供しなかつたって話だぞ？ って事は、他に垂れ込んだヤツがいるって事だろ。オメエ〜なんだろ？ 正直に言えよ、宮大地』

「サツパリですな〜？」

『……………つぎけんじゃねエー……ゾ、クオラア……ツ！ ア……ン？ オイ、コラ、テメエ……、コノヤロウ！ オレがテメエの女の情報つくらい持ってネーとも思ってたのかクオのヤロア……ツ……！』

「……………」

『仁沢ア……ツツ、仁沢……ツ……！』

「オラ、ボスが呼んでっぞ！ クソがつ……！」

宮さんはケータイを仁沢に投げつけた。

「ハイ、何すか？ ボス。……………あ〜、そうっす、間違いないっすよ、海老型真誓で……………ハイ。オレはクラス違っすけど、知ってますよ。ネコのクラスですよネ……………あ〜、何度も一緒にいる所見てるしネ、海老型が自分から暴露ってますよネ、最近男できたっつて。間違いないですよネ……………いっすよ、ハイ……………あ〜、宮さんにな変わって言うてるよネ……………」

仁沢からケータイを受け取った宮さんは、

「オイ、コラ、てめえ、何を企んでやがる、アアア~~~~ン?!」

『オイオイ、そんな口聞いていいのかよ、宮大地君。クツクツクツク……、海老型真誓か……』

「真誓が何だっただクソヤロオーーーーッ!」

第348話 マジヤバイ奴出す

「そんな・・・、じゃ、雫はその中学生と付き合ってるってワケ？ 詩乃舞ちゃんや、真誓と同級生の仁沢ってヤツと？ 偶然って凄いわね・・・」

ユイが驚きの声をあげる。

「偶然なんかじゃねえ。それも前田の差し金だ。あのヤロウが、オレの仲間の雫ちゃんに目を付け、仁沢を雫ちゃんの元に送り込みに決まってる」

宮さんは怒りを露あらわにした。

本人に直接聞いてみない事には分からないが、その線は有力だ。

「確かに・・・。分かったわ、アタシ、雫に聞いてみるわ。でも、あのコ、そこまで詳しく教えてくれるかしら？ もし雫が前田と繋がってたらアウトよね・・・」

ユイは朝露さんを警戒し出した。

「ユイ、ここは、オレに任せてくれないか？ 朝露さんの本心を聞き出すのは慣れてる」

「慣れてるですって?」

ユイが何やら疑いの目をオレに向ける。

「いや、何つくか、ホラ、血液型にかけてはオレの右に出る者はいないだろ?!」

「ユイちゃん、ここは亀ちゃんに任せてみよう。亀ちゃん、栗ちゃんの方は、ヨロシク頼む」

宮さんはそう言って、オレの前にコブシを突き出す。

「任せて下さい」

宮さんのコブシに自分のコブシを押し当てた。

「さて、これからどうするか・・・、だな」

オッキーが大きな溜息をついた。

ネガティブはネガティブな発想しか生まない。

こゝいう時こそ、ポジティブであるべきだ。

「大丈夫だ。オレらがこゝして集ったんだ。必ず打開策はある」

「ジオンは相変わらず楽天的だなあ」

オツキーは羨うらやましそうな目でオレの顔を見る。

「昨日、工事現場で見た、あの中学生の男、アイツが仁沢で間違いないですよね？」

コスモの3強の1人。

「そ〜だね。アイツで間違いない」

宮さんは頷いた。

オレは、フードの女の子の話題を出すか出すまいか迷ったが、結局出さなかった。

ユイを不安にさせたくなかったし、何より自分が不安になりたくなかった。

あんなヤツにマジブ〜が狙われてると思うと、それこそネガティブになる。

「何とかありません。絶対、何か方法はあるはずだ・・・」

とりあえず、ハツタリをかますオレ。

だが、それから先、オレたちの会話は続かなかった……。

まずは、手掛かりは一つ、朝露さんと仁沢の関係だ。

そこから、打開策のヒントが生まれるはず……。

漠然とだが、オレはそんな風に感じていた。

翌日、宮さん決断まで残り4日。

放課後、校門付近でとんでもないヤツに出くわした。

「てめえ〜、亀じゃねえ〜か?! こゝ、ここで会ったが百年目ってかあ〜?」

貴船だ。

よりによって、ど〜してコイツと鉢合わせなきゃならねえ〜んだよ。

それに、オレに話し掛けてくんناよ。

「フン、オレはてめえ〜に用はねえ〜よ。急いでるんだ、じゃ〜な・
」

コイツのせいで停学になったりしたが、もう、そんな事はど〜でもいい。

オレは今、忙しいんだ。

こんなヤツを相手にしてる暇はねえ。

オレはこれから、メイドカフェで、愛してマスカットパフェを食べなきゃならねえんだよ……。

「オイ待てヨソ。亀、オマエさんがオレっちに用がなくても、オレっちがオマエさんに用があるんだヨソ」

貴船は飛行機が飛び回るような動きを、体を使ってジャスチャーしている。

「オレはねえ〜って言ってんだよ」

構ってらんねえ〜、マジで無視だ。

オレは貴船を無視して校門を出た。

「タカノブ、今年になつてから学校来てないんだけどさ〜、オマエさん、何か知ってるアルか〜？」

「知らねえ〜よ。ど〜してオレがオメエ〜のダチの事知ってたんだよ。常識的に、オレよりオメエ〜の方が分かるだろ〜が」

バカかコイツは……、ってというか、バカだよな、コイツ。

いい加減、放つとこ。

「柴、怪我して入院してるんだワン。もしかして、それってオマエさんの仕業かワン？」

「あのなあ、オレはマジで忙しいんだよ。頼むからオレに付き纏まとうな!!」

ダメだ、ダメだ、どうもコイツのペースに狂わされる。

コイツのボケに、つい反応しちまうからいけねえんだよな、きつと。。。

よしっ、完全無視だ、完全無視!!

「オイ、待てよ。もしもし。。。もしもし亀よ、亀ちゃんよ。。。何だよ無視かよ？ いいの？ あ。。。無視？ シカトすんのね。いよ、別に。シカトこけば？ そっちがその気なら。。。」

貴船が何か言ってるが、無視だ、無視!!

「いいよ。。。だ。オマエの、だ、い嫌いなヤツら出してやるう。こくなつたらあ、オレっちの最終兵器。。。マジヤバイ奴出す!!」

貴船が吠える。

・・・たく、ツッコミ甲斐のあるヤツだぜ。

「頼むから放っておいてくんねえ？ オレ、マジ忙しいの」

「石田中のOBたち、覚えてる？ 前田丈、アイツと一緒にさ、高専のヤツやりに行った10人いたジャン。オレはさ、それには参加してなかったんだけどさ、アイツらにさ、亀ってポッコボコにされてたジャン。オレっちが知らないとも思ってた？ オレっちが、忘れてるとでも思ってた？？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「出すから、アイツら。覚悟しといてね〜ん」

第349話 小西、現る

校門付近で貴船に絡まれた。

貴船は、石田町の時、オレを苦しめたヤツらを出すと言ってきた。

オレが一番恐れてた事だ。

「言いてえゝ事は・・・、それだけか・・・・・・？」

オレが、貴船の鼻っ柱にチョーパンをぶち込む勢いで、貴船に問いただすと、

「覚えてろ〜〜〜〜イ」

貴船は一目散に逃げ出した。

・・・つちつきしよゝ、何なんだ、アイツは。

絶対アイツ、頭オカシイから。

中学の時のヤツらは、どゝしてあんなヤロゝをアタマにしたんだ？
バカだからバカ殿的存在として、お遊びで祭り上げてたのかな？

ま、どうせハッターだろうし、どうでもいいや。

オレは今、それどころじゃねえんだ、マジで。

第3公園の前を通り掛った時だった。

「オイ、亀鶴ジオン!!」

公園の中央で、改造バイクに跨った男に呼び止められた。

今日は厄日か・・・?!

・・・つ、こ・・・、小西っ?!

とんでもないヤツがいる。

小学生の頃から暴れん坊で、中1ではクラスのイジメっ子として猛威を奮った小西にし勉つとむ。

その頃、正義感の塊りだったオレは、イジメっ子の小西の魔の手から、弱いものを守る為、小西とタイマンで勝負した。

小西はかなりの強敵だったが、やっとの思いで東村ひがしむら、中田なかた、典山のりやまの3人をイジメから救った。

皮肉にも、イジメから救った3人に、オレはイジメられるハメになるのだが、それは中3の半ばくらいからの話だ。

オレがシャバ僧になってからも、小西はヤンキーロードを突っ走り続け、ついには中学卒業と同時にコスモ入りを果たした。

武闘派揃いの石田中のヤンキーの中でも、一際ひときわ硬派なヤンキーだった小西。

オレが恐れる中学時代のヤンキーの内一人なのは間違いない。

中学卒業から、あれから一度も顔を見た事がなかったのに……。

どうして、今更……?!

……ま、まさか？

オレはさっきの貴船の言葉を思い出した。

『こゝなつたらあゝ、オレっちの最終兵器……、マジヤバイ奴出す!! 石田中のOBたち、覚えてる? 前田丈、アイツと一緒にさゝ、高専のヤツやりに行った10人いたジャン。オレはさ、それには参加してなかったんだけどさゝ、アイツらにさゝ、亀つてポッコボコにされてたジャン。オレっちが知らないとも思ってた? オレっちが、忘れてるとでも思ってた? 出すから、アイツら。覚悟しといてね〜ん』

まさか、こんなに早く、貴船に呼び出されたってのか?!

ヴァー ヴァヴァ ヴァー ヴァヴァ ヴァー ヴァヴァヴァー

アクセルミュージックを鳴らす小西。

「よ、よオ」

流石に無視するワケにはいかない。

オレはとりあえず挨拶だけした。

「中島、オマエの事探してんぞ。気を付けるよな」

小西はそう言って、ニッコリと笑った。

中島なかじま悟さとする。

小5でオレは中島に泣かされた事があったが、小6でリベンジに成功。

オレが他校の生徒や高学年と揉めてる時も、何気に気に掛けてくれた。

4日間に渡り、10人からリンチを受けた時も、『喧嘩は終わり!』

と言って、最後にオレを解放してくれたのも中島だった。

中島は、中学卒業と同時に、小西と共にコスモ入りを果たした。

「確か、小西つて、コスモに入ったんだよね？」

オレは意を決して話し掛けた。

早くこの場から離れたい一心で、無意識で話し掛けていた。

とりあえず世間話でここを切り抜けねば、オレに明日はない……。

「最近辞めたけどな」

辞めた？

「解散……したのか？」

コスモが解散したのは知ってたが、オレは何も知らないフリをして聞いた。

「まあ〜な。でも、中島はまだ残ってるぜ。アイツ、コスモの3強だから。中島、超強え〜ぞ、マジで」

はあ？ 中島がコスモの3強だとオ〜〜？！

じゃ、宮さんがマンモス団地付近の公園で会ったヤンキーってのは……、中島だったのか？ 確か宮さん、以前から知ってた……。

そ、それに、強って事は……、前田を匿かくまってるヤツの一人……。

しかも、そんな中島がオレを探してる……だ……？！

第350話 強力助っ人、小西？！

「前田丈、覚えてるか？」

小西がぶつきら棒に、とんでもない名前を出した。

覚えてるも何も、今一番旬なクソヤロオ〜じゃねえ〜か……。

「……………」

オレは黙って頷いた。

前田を呼び捨てって事は、小西はホントにコスモを抜けたのか……？

「ギャラクシーのタカノブがさ、亀鶴の事狙ってた時あったんだけどさ……………」

いや、狙ってたも何も、オレら『王者VS挑戦者』の大会のセミファイナルで戦ってるし……。

「あの時、前田が止めたんだぜ。亀鶴には絶対手を出すなって……な。それがさ、今になって、あの前田が『亀鶴、やっていいぞ』って……………」

小西が長い歯茎を見せながら、ニツカリと笑った。

「オ、オレを狙ってんの？ どうして?!」

「さあ〜な。オレはコスモ離れてっから分からねえ〜けど、オマエがマツポにチクったと思っただんじゃねえ〜の？ なあ〜、まさかとは思っが、マツポに垂れ込んだのって、オマエなの？」

何気に探り入れてんのか？

「オレがチクるワケねえ〜だろ。前田の恐さはオレだって知ってるよ……」

……って言って切り抜けた方が無難だな。

「だよな。悪い〜事は言わねえ〜よ、前田と絡むのだけは止めとけ。あの人、ハンパねえ〜キレ者だから」

小西はオレに助言をくれた。

「サンキュ〜。オレも同感だ。前田って、頭良いよ、マジで……」

一連の流れを整理すると、全部前田に結びつく。

精巧で緻密な作戦で翻弄ほんろうし、今まで散々オレを虐しいたげてくれた。

前田は、このオレを出し抜いた。

敵として天晴あっぱれなヤツだ。

「多分今回は、頭使ってねえよ、前田は……。ただ、自暴自棄になって、闇雲に手当たり次第ぶっ壊そうとしてるだけだ。マエカン組も系列の組織から村八分にされ、組長も死の淵を彷徨ってる。さらには己に逮捕状が出てる時きたもんだ」

「マエカン組の組長って、前田丈のオヤジ、前田カンジ、……？」

「良く知ってるな。そう、前田カンジ。アイツ、昔は羽振りが良かったけど、最近では衰退して落ちぶれちまってるな。原因はシャブだよ。株式会社のKHJも、マエカン組もそう、シャブで潰れたんだ。釜桐のホストクラブを管轄してた、あのデカイ組織が、いとも簡単に潰れたのは、アタマが腐ってたからだよ」

「……って事は、マエカン組の組長は、シャブ漬けだったって事？」

「廃人だよ……。それに、死にそうだって話だ。でも、皮肉な事に、誰も見舞いにすら行きゃしねえ……。」

「ちなみにどこにいるんだ、前田カンジは……」

「石田町総合病院じゃねえかな？」

親切にも教えてくれた小西。

そんなトコだろうと思ったぜ。

息子の暴力沙汰で入院してる、被害者の病院に入院。

偶然なのか、故意なのか・・・、分かんねえし、どくでもいゝが・・・、何か気に食わねえな・・・。

さんざんかぶいた前田丈、今じゃく落ちる所まで落っこちて、さらには自暴自棄になって頭も回らず、警察に垂れ込んだと思われるヤツを手当たり次第にぶっ潰すってか？

フン、オレには手を出さなって言ってみたり、やっぱりやれって言ってみたり、益々気に食わねえくヤツだ。

「シャブ売ってたのは間違いねえくんだろ？ KHJは・・・？
織川宏次朗ってヤツ、知ってる？ 笹商のトップだった・・・」

真相を聞くチャンスだ。

「知ってるよ。アマのチャンプだったヤツだろ？ 可哀想だよな、
アイツ。前田に改造されたんだよな、確か。えくつと、何だっけな・・・、み、み、皆川？ 宮川？」

「宮大地！」

「そう、そいつを懲こらしめるだか何だか言って、前田がムキにな

って改造したんだよ。改造って言っても、シャブ最初安く売ってさんざん遊ばせて、結局後から高く売りつけてたから、金が目当てだったのかもしんねえ〜けどな」

それだけ分かれば十分だ。

つまりは織川は前田に送り込まれた刺客だったって事さえ分かれば十分だ。

「どうして前田は宮大地を狙ってたのか、分かる？」

オレが一番知りたい真相を訊ねた。

「オレ、その宮ってヤツ、名前くらいしか知らねえ〜し……」

「そうか、サンキュ〜……」

残念だったな、結局真相は、前田本人にしか分からないってか……。

「……つつ〜事で、中島とかタカノブとかが、オマエ狙ってるから、気を付けた方がいいぜ」

「わざわざオレに教えにきてくれたのかよ？」

「はあ？ たまたま出くわしたから教えてやっただけだよ。オレは別に、オマエの味方でも敵でもねえ〜し、ましてや前田の味方でも敵でもねえ〜しな」

小西は眉間にシワを寄せた。

ホッ……。

その言葉がオレをどれだけ安らげてくれる事か……。

ひゃ~~~~っ、恐かったあ~~~~。

小便チビるトコだったあ~~~~。

目の前の小西が敵じゃないって分かっただけで、メツチャメチャテ
ンション上がるんだけど……。

何か、凄くパワーが増すんだけど……。

何か……、気持ちいい~~~~っ!!

「タカノブってさ、この学校シメてんの？」

話を急に変えた小西が変な事を聞いてきた。

「さ、さあ〜な……」

自分の話題を避ける意味でも、オレは何も知らないフリをして首を
傾かしげた。

「やっちゃえよ。あのヤロ〜やるなら今がチャンスだぜ？ 何なら、

手伝っちゃおうか?!

とんでもない事になってきた・・・。

第351話 コスモの内輪話

元コスモの小西が、タカノブを倒すのを手伝ってくれるだ〜〜
?!

オレは青天の霹靂へきれきのような展開にドギマギした。

「ど、ど〜して?」

理由を知りたい。

ど〜してオレなんかに、元コスモの小西が協力してくれるんだ?
まさか、オレの男気に惚ほれ込んで・・・?!

「タカノブって、ギャラクシーの総長候補って言われてたんだけど、
実力で成り上がったんじゃないんだよ、アイツは。前田の気まぐれ
なんだ。そのくせコスモに挨拶もなくてよ〜、陰で、いつかコスモ
よりデカイ族にするんだとか何とか言ってるよ〜・・・」

小西は愚痴り始めた。

ま、つまりは前田の直属の子分だったタカノブに嫉妬してムカつい
てたワケね・・・。

「そ〜か、ま、気持ちはありがたいけど、オレは自分のケツは自分で拭きてえ〜し・・・」

オレは丁重に小西の助太刀を断った。

「そ〜してくれ。オレは余計なモンに巻き込まれるのはゴメンだ。オレは一匹狼だから・・・」

はあ？ 何だよそれ！ だったら初めから、いかにもらしい事言っ
なよな〜！！

「ど〜してタカノブはギャラクシーに残ったの？ 他のメンバーは散ったんだろ？ コスモの3強と同じ理由なの？」

「同じ理由って？」

「コスモの3強って前田を匿かくまってるんだろ？ やっぱりタカノブも前田と一緒にいるのか？」

「良く知ってるなあ〜？ ……ってか、前田も中島たちも、終わりだな。亀鶴にまで知られてるよ〜じゃ、隠れてられるのも時間の問題じゃね？」

あれ？ オレってば、何か余計な事言っただかな？！

「両親が幼い頃離婚して、母親に育てられたけど、母親は男の所ばかりに入り浸びたり。そんなタカノブを、親代わりに面倒見てくれたのが前田丈。タカノブが今でも前田の下を離れないのは、昔世話

になった義理があるからだ……って、オレのダチが言ってた」
なるほどな……。

アイツが前田を慕う理由はそれが……。

哀れなヤツだな。

『王者VS挑戦者』のセミファイナル、『王者、亀鶴ジオンVS挑戦者、高城伸之』。

心待ちにしていたオレとの決戦だったのに、大衆の面前で、わざと敗れたタカノブ。

その理由は、前田から、『亀鶴には絶対手を出すな』って言われたから。

今度は、『亀鶴、やっていいぞ』との指示。

やるなって言われたらやらない、やれって言われたらやる、まるで手駒の人生だな……。

「オレらの学校に、前田からのカンパが回ってきてただけど、それって何か知ってる？ 理由とか……」

カンパの件も、コスモ目線でどんなだったのか知っておきたい。

「理由までは分かんねえけど、オレらも払わせられてたぜ。族の

会費、月5千円な。ここの学校の、全部やられてたんだろ？」

「オレは武蔵に回ってたって事しか知らないけど……」

「吉岡も野牛も払ってたはずだぜ」

やっぱり……、だから前田は大会でギャラクシーが暴走した時、吉岡や野牛と良好な関係を保つ為に、ギャラクシーを叱しかり付けたりしてたのか。

やっと前田の矛盾した行動の意味が分かった……。

最初はギャラクシーをけしかけて宮さんを狙ったが、宮さんに野牛と吉岡が加勢しちゃったもんだから、こりゃ資金集めに支障が出るぞ……ってなワケで、ギャラクシーを煽あおったのはオレじゃないよ……的にシラをきったワケか……。

そうか、顔には出さなかったが、長須も大橋もオレと一緒に、カンパの悔しさ堪えてたんだな……。

「小西、コスモの3強でさ、ニサワとかってヤツ、知ってるか？
確か、中坊……」

「仁沢光圀みづくに？ あゝ、知ってるよ」

「どんなヤツ？」

「一言で言えば、凄え〜生意気なヤツ」

そんな気がする……。

「コスモの中では、レッドタイガーって呼ばれてたな」

レッドタイガー？ なんのこっちゃ……?!

「小学校の時、タイガーマスクを被ってプロレスを観戦した時があつて、その時にタイガーってあだ名を付けられたって……、本人が言ってたな」

「なるほど。じゃ〜、レッドの由来は？」

「分かんねえ〜けど、そいつメツチャ熱いやツなんだよ。とにかく暑苦しくて、ウザいんだ。いっつも燃えてっから、レッドなんじゃねえ〜の？」

ウザイ？ 聞き捨てならねえ〜……なんちつて。

へ〜、レッドタイガーねえ〜……。

ウチのブルードラゴンといい勝負しそ〜じゃん……なんてな。

「そいつの同級生で……、フード被った女つて……」

そこまで言いかけ、オレは、しまった……と、思った。

なぜか分からないが、聞いちゃいけない事を聞いたような気がした。

「さうな・・・」

小西はタバコに火をつけた。

ホッ・・・、知らないならいっや・・・。

「小西ってさ、A型？」

オレは話題を変えた。

・・・が、小西は血液型の話題には触れもせず、

「フード被った女って、安室あむろの事か？ ネコの事だろ」

あむろ・・・？

ネコ・・・？？

第352話 ネコ

「た、確か・・・、溲レイって呼ばれてたよ・・・」

オレは、またしても余計な事を口走ってると思いつつ、小西にフー
ドの女の事について聞いていた。

「彼女、天涯孤独で可哀想なコなんだよ。理由は分からねえけど、
一昨年おととしくらいからかな？ 仁沢がコスモ入りした辺りから、
ちよくちよく見るよくなったな。ネコには常に2人の側近が付い
てて、男連中は手出し出来ねえよよよになってたっけな。・・・
つつつかよオ、オマエさつきから何なの？ オマエ本当は、前田
の子分だったりしねえよな？」

「オイオイ、今更オレを疑ってどうする？ オレはただ、あのフー
ドの女が気になって・・・」

「だよな？ オマエと前田が裏で繋がってたら、マジビビるぜ。何
を信じていゝのか分からなくなっちゃう」

「ははは、大丈夫だよ、オレは、前田なんかとこれっぽっちも接点
はないから。それより小西こそ、後で帰ったら、オレが色々嗅ぎま
わってたとかって密告すんじゃないかねえよのか？」

「オレは孤独なロンリーウルフさ」

「A型は寂しがり屋だからな」

「オレはO型だよ!」

そうか、小西はO型か・・・。

まんまとオレの誘導尋問に引っ掛かってんのな・・・。

ここまでベラベラと喋るのは、A型かO型しか考えられない。

話の構成を練るのがへたなAB型や、話題がポンポン飛びまくるB型とは明らかに違うとは思ってた。

二者選択なら、今のやり方なら大概引っ掛かるってワケだ・・・。

O型なら、一匹狼ってのは嘘だな。

必ず仲間との繋がりはどっかにあるはず。

ただ、敵と味方との間にしっかり境界線を引くのもO型。

つまり、コスモ3強やタカノブを含め、前田の周囲のヤツとは繋がりを切ったから、そ〜という意味で一匹狼。

でも、元コスモの昔のダチとは繋がりはあるはず。

フードの女は前田の周囲のヤツらに含まれる……。

だから、小西は警戒したんだ。

要するに、オレがフードの女に関して、何らかの探りを入れても、本人や前田に洩れる事はない……。

— 先ず安心ってワケだ。

念の為、この辺で探りは止めといた方がいいかもな。

もう、十分過ぎるほど聞いたし……。

……と、思った矢先、

「ネコに惚ほれてんなら、止めといた方がいいぜ。彼女の心を開かせるのはムリだ。あそこまで閉ざされた扉をこじ開ける事は絶対不可能。それに、今は前田のお気に入りだし、近づけるワケねえよな。ま、あの前田ですら、ネコには近づけねえけどな」

閉ざされた扉？ 近づけない？

「そんなにフードの女の側近たちはガードが固いのか？」

「それもあるけど……」

「あるけど？」

「何だよ亀鶴、オマエやつぱり惚れてんのか？ 止めとけて・・・、あの女は誰も口説けねえよ・・・」

いや、惚れてるも何も・・・、前田のお気に入り到手えし出すワケねえし・・・、興味も何も、ただの敵の調査だよ。

万が一、あの女と戦う事になった時の為の、事前調査だ・・・。

「どくして誰も口説けねえんだ？ いくら何でも中3にもなれば、女の方だつて男くらい欲しくなるんじゃないか？ それが、修羅に生きるヤンキー少女なら尚更。天涯孤独つて、一体どこに住んでんの？」

「ネコは、施設のコだよ」

施設？ 児童養護施設のこと？ た、確か・・・、満18歳まで居れるんだっけな。

あの女は・・・、孤児だつたつてワケか・・・。

何となく、いや、かなり普通の女とは違うなあとは思っていたけど・・・。

「天涯孤独・・・か。じゃ、尚更愛に飢えてるんじゃないか・・・？」

「だろくな。だから、ピアノなんじゃねえの？」

ピアノ？ レズピアノのことか？！

「同性愛……?」

「そう、ネコは、恋愛的にも性的にも、男を寄せ付けないんだよ。分かったか？ あんなに可愛いのに、しかも、女に飢えてる野獣ばっかのコスモの連中が、今まで誰も彼女を口説けなかったワケ……」

「あ、ああ……、サ、サンキュー……」

「あゝあ、凄い落ち込みようだな。でも諦めんなよ、ネコはダメでも、彼女の側近の2人なら口説けると思うぞ」

「サンキュ」

フードの女、安室漣……、天涯孤独でレズビアン。

ネコ……か……。

第353話 ヤンキー10人分

「そーいえば、貴船は元気か？ 貴船もこの生徒なんだろう？」

小西はタバコの煙を大きく吐き出しながら、武蔵の校舎を指差した。

「さっきまでほざいてたよ。石田中の時のOB、10人を呼び出してやるってな……」

その10人の内の一人が目の前にいるが、オレは躊躇ためらわずに言った。

ここまで来れば、かつてのトラウマもクソもない。

目の前のハードルを飛び越えていくまで……だ。

「相変わらずハツタリだけで生きてるみてえだな、アイツは……」

相変わらず……？

「なあ、小西、野暮な質問かもしれねえけど、どうして貴船は石田中のトップだったんだ？」

「はあ？ いつ、どこで、誰が？ 貴船がトップだあ？ それは有り得ねえさだろ、オメエさ。トップはオレだろ？！ あっ、オマエ、中島だと思ってたんだろ？ 怒らねえさからホントの事言え！」

「いや……、オレは別に……」

何さ？ 貴船は石田中のトップだったんじゃないかあさ？！
オレはてつきり……。

「あさ、アレか？ 昔、前田の復讐に付いてった事があったんだよ、オレたち……」

前田と石田中のヤンキー10人が、高専に乗り込んだ時の事か……？

「あの時、オレら全員パクられたんだけど、その時貴船の親が助けくれたんだよ。貴船の親って偉い人らしくて、鶴の一声でオレら釈放だよ。何でも政治家だのヤクザだのとも繋がりあるらしくてな。その時の恩があったから、みんなアイツの愚拳も大目に見てたんだよ」

なさんだよ……。

オイオイオイオイ、オレ、今の今まで、メツチャクチャ貴船にビビってたんだけど……。

じゃ、オレの睨にらんだ通り、貴船はバカでいいワケね？

ぐわあ~~~~っ、力が抜けてく~~~~。

オレの心は針を刺された風船のように一気に張り詰めた空気が抜け、シユワシユワと宙を舞った。

「オレさ、ぶつちやけ貴船に脅おどされてんのね、石田中の、あの10人を出すつて。それで、オレをまたあの時みたいにボコるつて・・・」

「あの時？ あ、喧嘩してた時の事か？ 亀鶴あの時凄え〜強かったもんな〜。10人掛かりでやっとだもんな〜」

は、はい〜？ な、何それ。

その記憶、何？！

オレは10人にリンチ食らってたんだけど・・・。

小西の中では喧嘩なの？ 1VS10の、喧嘩だったの？！

どんだけ強え〜んだよ、オレ！ どんだけ大きな食い違いなんだよ、オレたちの過去は・・・っ！！

「だ、大丈夫かな・・・、オレ・・・？」

「はあ？ もしかしてオマエ、ビビってんの？ 貴船のハツタリにビビってんの？」

「だって・・・、10人で来られたら・・・、さすがに・・・」

「あるワケねえくだろ。あの時の10人って、誰だ？ オレだろ、中島だろ、東村ひがしむら、中田なかた、典山のりやま・・・」

「やっぱり、ハツタリかな？」

「さくな。でも、最初にオレ、言っただろ？ 中島、亀鶴の事、探してるぞって。アイツ、超強いぜ。そこら辺のヤンキーの10人分くらいの強さ持ってたから、もしあのヤロくと喧嘩するなら、マジで覚悟しろよな・・・」

あう~~~~。

結局ピンチには変わらないのねえ~~~~？！

・・・と、その時！！

「ごっつめんねえく、マジでごっつめんねえ~~~~」

ちょっと太め・・・、いや、結構太め・・・、ぶつちやけかなりデカイ、オレ的にはあんまり可愛いとは思えない女子生徒が、ドスドスと地面と胸を揺らしながらやって来た。

「待った待った、待っちゃまった、よ〜ん」

小西はフラダンスのように、腰をくねらせて小躍りした。

「あれ？ 2年のジオンちゃん？」

この女性、オレを知ってるのか？

3年っぽいけど・・・。

「何だ、オマエら知り合い？」

小西がムツとする。

いやいや、初対面だし・・・、嫉妬されてもメツチャ困るし・・・。

「総番長の親友なのよね。ジオンちゃんは次の番長候補って言われてただけど、器じゃないからって断ったんでしょ？ どこまでもニヒルなんだからっ！」

はい？ ま、今更周りにどんな風に思われてよ〜が、別に気にしねえ〜けど・・・。

「そっか、亀鶴って、やっぱり凄え〜ヤツだったんだな。じゃ、ガンバレよ」

「バイビ〜」

デカイ女は小西の改造バイクに跨った。

ミシってなったよね、今、ミシって……。

「もうすぐ彼女卒業だろ、卒業式に、オレがバイクで彼女連れ去るんだ。それで東京行ってさ、成り上がってやるぜ」

小西はそう言っただけでアクセルを吹かした。

連れ去るって……、東京で、2人で暮らすって意味なのかな？
た、大変そうだな……。

「そっか……、ガ、ガンバレよ……」

それくらいしか掛ける言葉が見付らねえ……。

「オマエもな」

そう言っただけで小西は親指を立てた。

ヴァーヴァーヴァー　ヴァーヴァーヴァー　ヴァーヴァーヴァーヴァー

デカイ女を乗せた小西のバイクは、大きな爆音と共に、小さく消えた。

へ〜・・・、過去、つまり人生って、見る角度によって色々と変わるんだあ〜・・・。

人によって自分って、自分で思ってる自分とだいぶ違ったりするんだなあ〜・・・。

面白いね。

本当は、自分をこういう人間だって決め付ける事自体、おかしい事かもね。

そう考えると、自分の性格や心なんかが変化するのは自然なんだなって思えるなあ〜・・・。

人生、楽しいね。

第354話 パルチザン

貴船と揉めた直後、約2年ぶりに中学時代の因縁の小西との遭遇。

何とか事無きを得たが、オレの神経はもうボロボロだ。

中学時代のヤツらとの遭遇は、オレにとって強烈なトラウマでもある上、2年経った今でもデリケートな問題だけに、やたら神経を使う。

今はとても大事な時だけに、1分1秒も無駄にはしたくない。

でも、小西との偶然の再会は、今のオレにとっては非常に貴重な情報を得る事が出来た意味では、大変大きな功績ではある。

さて、気を取り直して朝露さんの下へ……。

駅前に到着した頃には、すっかり日は暮れていた。

願わくは、朝露さんが働いてるのを祈るだけ。

何せ、今日会う約束をしてるわけじゃないもんで……。

オレは今週2度目のメイドカフェへと足を踏み入れた。

チリン チリリリン

「いらっしゃいワン」

ワン？

何と、いつもはネコ耳着ぐるみなのだが、今日は犬耳着ぐるみだった。

「あれ？ ネコは？」

思わず聞いてしまうオレ。

「いつもの仔猫ちゃんは、洗濯だワン」

正直なヤツだ。

・・・つつくか、仔猫だったの？ あのデカイ着ぐるみ・・・。

「いらっしゃいませ〜、ジオン先輩っ、また来てくれたんですかあ〜、嬉しいですう〜」

オレを発見するや、朝露さんはすぐに駆けつけてくれた。

「良かった〜、休みだったらどうしよ〜かと思ったよ。ちょっと教えてもらいたい事があってね。とりあえず『愛してマスカットパフエ』1つね」

「かしこまりました」

朝露さんは軽快に厨房へ入っていった。

O型には、『聞きたい事がある』って言うより、『教えてもらいたい事がある』って言う方が、より好感を持たれる。

何せO型は教え好きだから。

さてと……、これからどうやって真相を聞き出すか……だな。

ユイがちょっとぴり警戒してたように、朝露さんと前田が裏で繋がってるという可能性もゼロではない。

もし繋がってたら、仁沢との関係を問いただした時点でアウト。

こっちはマジブ〜という人質をとられているから、迂闊うかつに動けないのが実情だ。

しかし、朝露さんが前田と裏で繋がってる事は、まず有り得ない。

問題はそこではなく、朝露さんが仁沢と本当に付き合ってるかどうかだ。

仁沢の話では、最近付き合い始めたらしい。

……って事は今年だろうか？

出会いはいつ、どこで、どうして……など、沢山の疑問が生まれる。

それともう一つ、竜崎が朝露さんに対してストーカー行為をしていたという仁沢の発言。

それが本当だとしたら、こりゃまた大問題だ。

オレが朝露さんにすり寄られ、色目で誘惑されそうになったのは、去年の11月中旬。

あの時は、『輝きを汚すな』って怒鳴ったりしたけど、最終的に『ありがとう』って言われたから、朝露さんがこの先わき道にそれる事はないと信じていたけど……。

宮さんは、朝露さんに仁沢を送り込んだのは前田だと言いつつ切った。

宮さんを執拗につけ狙う、前田の最後の画策の可能性は十分高いと思われる。

だとすると、朝露さんは何も知らずに仁沢に弄まれてあそばされている事になる。

人間性の欠片もない鬼畜たちの、下劣な行為だ。

もし、前田が駆け引きに長たける戦略家ならば、これから先、先手先手でこっちも手を打つ必要がある。

そして、どうこのピンチを潜り抜けるかが勝敗の鍵を握る。

宮さんが言い切ったように、仁沢が送り込まれた陰の刺客しからば、内側からオレたちの牙城を崩そうなどと、こりやまた大それた策略を練るもんだ。

前田丈……、敵ながら感心するほどの策士ぶりだ。

仁沢ラインで、漣と側近の2人が、詩乃舞とマジブを包囲し、オレたちは一気に王手をかけられる。

朝露さん、詩乃舞、マジブ、この3人が、いっぺんに人質になるワケだ。

絶体絶命……、というより、終わりだ。

「お待たせしましたあゝ」

相変わらずドデカイ愛してマスカットパフェを運んできた朝露さんは、テーブルの上に置くと同時にオレの隣に座った。

よしっ、先ずはフランクに切り出すか……。

「朝露さん、今、フリーかい？」

第355話 駆け引きと本音

オレは朝露さんに、『フリー』なのかどうかを尋ねた。

朝露さんにアタックしているとも取れるし、深い意味のない社交辞令的な会話とも取れる、いたってナチュラルな質問だ。

「えっと……私ですか？」

さあ、どう出る、朝露さん。

朝露さんは、ちよっぴり言いにくそうに顔を背けた。

「ジオン先輩は、どうなんですか?!」

「オレ? オレはフリーだよ、ウン」

そこはハッキリさせとかないといけないよな。

「光一君は、どうなんですかね？」

どうしてそっちに飛ぶんだよ?!

「どくだろね……」

あれから2ヶ月以上会ってねぇや……。

「あつ、アイスが溶けちゃいますね。はい、ア~~~~ン……」

「ウツ……、ウグ、ウグ……」

このままでは、逃げられてしまう。

何とかせねば……。

「はい、もう一口、ア~~~~ン」

「朝露さん、宮さんの事、ど〜思ってたの?!」

さあ〜、ど〜出る?

「宮先輩ですか? 宮先輩は大好きな先輩ですよ。でも、それは恋愛対象とかじゃなく、お友達としてですけどね。それに、宮先輩は新しい彼女が出来たじゃないですか」

朝露さんは、ちよっぴりアンニユイな表情を見せた。

よしっ、いいぞ、オレの手中に収まってくれた。

「え? ど〜して知ってるの?!」

オレは驚きの表情で朝露さんに聞いた。

『誰から聞いたの？』ではなく、『どうして知ってるの？』と聞く事で、朝露さんが答えるにあたり、反応に広がりを見せるはず。

「そ、それは・・・」

案の定、困ってる。

O型女性は基本オープンなのに、言いくいって事は、何かしら理由があるからだ。

じゃあ、なぜ言いくいのだろうか？ オレに知られたくないから。

つまり、彼氏は朝露さんに相応しくない相手の可能性が高いつてワケだ。

考えられるのは、竜崎とよりを戻したパターンと、仁沢と付き合ってるパターン。

さっき、『フリー』なのかをふったら、『光一君は、どうなんですかね？』と言っていた。

その言葉を思索しなくする限り、前者の可能性はゼロに近いと思われる。

ここは迷わず後者だ。

O型同士の男女関係では、どっちが主導権を握るかが鍵なのだが、オレと朝露さんの中ではそれはすでに決着済みで、オレが確実に主導権を握っている。

なので、オレが頼めば、まず断らないはずだ。

そして、友情や愛情など、情に弱い。

「オレたちは仲間だ。オレと朝露さんは、色んな苦難を共に乗り越えてきた戦友だ。オレたちの友情は本物だし、お互い強い信頼関係で結ばれてるって、オレは自信を持って言える。お願いだ、本音で頼むよ、朝露さん」

何か言ってて虚しくなるぜ……。

何が本音だ？ オレは全然本音じゃねえ〜じゃん。

朝露さんの顔色うかがって、駆け引きとかしちやって……、全然フェアじゃねえ〜し、何の説得力もねえ〜よな。

「……………」

朝露さんは黙り込む。

よっぽど言い辛いのかな？

「オレさ・・・、去年のクリスマススイブにさ、佐倉に告白しようと思ってたんだ。でも、佐倉に『好き』って言う前に、あえなく惨敗しちまった。まさか、自分が好きな人が、実は彼氏がいて、実は妊娠してて、実は学校を辞めようとして、実は結婚しようとしてたなんて知ったらさ、ハッキリ言っただけ泣きモンだよな」

「愛さん、ジオン先輩に、彼氏がいる事黙ってたんだ・・・」

「ウン。色々事情があつて言えなかつたと思うんだけど・・・って言うか、佐倉さ、妊娠してんの気付かなくて、それにIkaru Uとの仲は曖昧あいまいだったんだ。Ikaru Uはユイの事が好きでさ、佐倉はIkaru Uがずっと好きだったんだけど、いつまでも振り向いてくれないから、諦めかけてたんだ。そんな時にオレに付き合っただけ欲しいと言われたもんだから、佐倉もオレと付き合っただけ考えたみたいなんだ」

「え？　じゃ、一時は両想いだったの？」

「そこまでは分からない。でも、佐倉はオレとデートの約束をしてくれた。でもさ、運悪くさ、絶妙なタイミングで妊娠が発覚しちゃうんだよね。オレと佐倉の初デートの日はさ、佐倉が病院で妊娠が発覚してたし、クリスマススイブは佐倉が家族やIkaru Uと家族会議だよ。ホント、ついてねえって言うか、笑っちゃうよね」

「ジオン先輩に、そんな悲しい出来事があったなんて・・・。全然気付きませんでした。ジオン先輩、微塵みじんも悲しい姿見せないから・・・」

「そう？　寝込んでたの年末だったからね。ギックリ腰やつたり、血尿やつたり、結構ボロボロだったんだぜ」

「それでよく立ち直れましたね。私だったら、そんなに早く、笑い話に出来ませんよ」

「見本があつたからね。いつもオレの一步先に行く先輩がさ、先にお手本を見せてくれてたんだ。立ち上がり方のね」

「もしかして……、宮先輩ですか……?」

「ウン。自分が好きだった人が、実は親友と付き合ってた。しかも、内緒で。普通だったら親友に裏切られたって言って怒るよね。でも、彼は怒るところか、笑いながら仲間同士の絆きずなを繕つくるおうとしたんだ。フラレるの分かってて、あえて告白して、みんなの笑い者になり、自分が犠牲になる事によって、みんなの関係を保とうとしたんだ。自分が一番辛いくせに……」

「そうだったんですか……?」

「オレは、オレの後をついてくる後輩の為に、手本となる生きざま、見本となる背中を見せなきゃならないんだよね。だからさ、無様にいつまでも寝転がってはいられないんだよ。立ち上がって、歩き続けたいとね……」

「もしかして……、その後輩って、光一君……?」

「ウン。オレと宮さんが、今度何か問題を起こせば即退学なんちゅゝアホなペナルティ食らっちゃったじゃん。KHJのボスがさ、しつこく宮さんを襲ってきてさ、色々と企てるんだよね。でも、そんな悪の野望をさ、打ち砕こうとする正義の味方がいるワケ。でも、アイツは、そんな正義の味方と悪の間に割って入るんだよ。で、正

義の味方の攻撃を止めるの。一見悪を庇かばう不届き者だよ。でもさ、理由があつたんだ。オレと宮さんを退学にさせたくないっていう……」

「そんな事があつたんですか……」

朝露さんは、吃驚きつきょうしている。

「ゴメンね、何か……、語り過ぎちゃったね。教えて欲しいなんて言つといて、自分が色々教えちゃったね。人はさ、誰でも言い辛い話つてあるよね。本当は話したいんだけど、話しにくい。でもそれは、しよゝがない事だと思うんだ。だつてさ、自分の心の中でちゃんと整理出来てないのにさ、人に話して相手の人をも混乱させたくないもんね」

自分で言つてて、その通りだと頷くオレ。

「ですよ。流石ジオン先輩ですね。自己分析つて言つんですか？ ちゃんと出来てますもんね。ホントその通りだと思います。何かあつた時、それを飲み込んで消化するまで、人それぞれ掛かる時間は違いますもんね。そゝいう意味では、私は時間が掛かつちやうたイブかな？」

「どゝして時間が掛かるか分かる？」

「自分で解決しようとするからですよ」

「どゝして自分で解決しようとするか分かる？」

「どうしてですか？」

「殻に閉じこもってるからじゃない？ 全部脱いじゃえばいいじゃん。恥ずかしさやプライドなんか投げ捨ててさ、全部脱いじゃえば。そ〜すれば、飾らず本音で仲間と語り合えるじゃん。泣いたっていいじゃん、怒ったっていいじゃん、仲間だったら受け止めてくれるよ、きつと・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

朝露さんは、俯うつむいて黙り込んだ。

「マジで、ゴメンよ。あつ、ホラ、溶けちゃうから、食べようよ、それ。もう遅い時間だしさ、それ食ったら帰るから」

「謝らなきゃならないのは私です。素直じゃなくて、ごめんなさい。わたし、今、お付き合いしてる人がいるんです」

「オ、オレの、知ってる人・・・・・・・・？」

「多分知らない人です。でも、ジオン先輩の妹さんの、同級生で・・・」

きた・・・。

第356話 脚本家兼俳優（前書き）

第356話 脚本家兼俳優

「仁沢光圀……、レッドタイガー？」

「え？ どうして知ってるんですかあ……?!」

「コスモだよ、アイツ」

「どうしてそんな事まで、ジオン先輩が……」

「コレ……」

オレは両腕の根性焼きを朝露さんに見せた。

「今までオレと戦ってきたヤツらの墓標だよ。中学時代、オレは沢山のヤツらを傷つけてきた。だからオレは、相手の痛みを自分に刻み込んだんだ」

「……つつつのは建前で、ホントは自殺を思いとどまった数なんだけどね。」

「何ですかそれ。痛くなかったんですか？」

苦い顔をしてつけど、自分だってリストカットしてたくせに……。

「中学の時、オレが戦ってきたヤツらの中にはさ、コスモに入ったヤツもいるって事。そんなコスモの3強の一人、仁沢。そいつに最近彼女が出来たって事くらい情報はオレにだって入るよ・・・」
・・・ぶつちやけそんな情報入るワケねえけど。

朝露さんに根性焼き見せたり、昔、粹がってた話をしたり、暴走族のダチがいるってハツタリかましたり、自分は情報通だってほざいてみたり、どして嘘をついてまで、オレは強がるんだ？

オレは、嫉妬してるのか？！

「知ってて私に言わせようとしてたんですか？」

あれ？ そくくる？ 怒った？ 朝露さん、怒った？ オレがハツタリこいたり駆け引きばつかしてるから、怒ったの？！

「嘘、知らない。正直言うとき、宮さんが聞いたんだよね」

ダメだ、やっぱり嘘はダメだ。

正直に、飾らず、本音でいこう。

「み、宮先輩?!」

「そう、1週間前、宮さんが仁沢と初めて会った日、仁沢が朝露さんと付き合ってるって言ったらしいんだ。そのうち挨拶しなきゃと

思ってたから手間が省はぶけたって喜んでたそうだよ」

「そ、そくだったんですか。仁沢君も、言ってくればいいのに・・・」

やっぱり聞いてなかったのね？

「一つ引っ掛かる事があつてさ、朝露さんが、以前、竜崎にストーリーされてたつて。それで、仁沢は竜崎に対して怒りを露あらわにしてみたんだ。そこん所どくなのかなって・・・」

「光一君がストーリーカー？ 仁沢君がそんな事言ってたんですか？ 去年の夏の終わり頃、ちよつとだけ付き合つた事があるって話は、仁沢君にしましたけど、ストーリーカーだなんて、一言も言つてませんよ、私」

朝露さんは怒り心頭のご様子だ。

朝露さんは本音を語つてるとすると、仁沢が嘘をついていた事になる。

オレが考えられる、仁沢が宮さんに嘘をついた理由は二つ。

一つは、単純に、中学生でまだ幼い仁沢の、嫉妬からくる竜崎への怒り。

そんな怒りが生んだ、ただの妄想。

妄想を宮さんに語り、同情を欲したと同時に、竜崎を敵にする事で、宮さんに味方になってほしかった。

そしてもう一つは、ただ単に喧嘩の口実。

竜崎の名前を出しておく事で、のちの喧嘩の時に竜崎をおびき出せる。

前田たちの狙いは、あくまで逃走資金の調達だが、もし裏切られた時は確実に戦争になる。

そこまで視野に入れてるのは間違いない。

前田の中では竜崎戦も想定内のはず。

その時に対応させる手駒が、仁沢。

これはオレの中での仮説でしかないが、宮さんとの交渉が決裂した時の、前田の算段はおそらくこうだ。

宮さんVS明斧、オレVS中島、竜崎VS仁沢、ユイVS漣。

前田はすでに、その時に向けての布石ふせきは投じてるし、伏線ふくせんは敷いてある。

キレ者の前田を敵にするなら、こっちも先読みの先読みで対応しねえと、アイツと対峙する事すら出来ねえからな。

「付き合い始めたのは、いつ？」

「元旦……」

出たよ、偶然にも、宮さんとマジブ〜が付き合い始めた日と被ってるよ。

「馴なれ初そめは？」

「年末の大晦日おおみそかに、バイトの帰り道で凄く体の大きな人につけ回されたんです。宮先輩と付き合い合ってるのか、光一君と付き合い合ってるのか、ジオン先輩と付き合い合ってるのか……って、いきなり聞かれて。恐かったんで、正直に答えました、付き合い合ってる人はいない……って。そしたら、オレと付き合い合えて脅されて……」

ちよつと待つて？ 凄く体の大きな人つて……。

「ねえ〜、その男つてさ、明斧じゃね？ ホラ、生徒会長とか柔道部の主将とか、応援団の団長やつてたる？」

「え？ ウチの学校の生徒？ 違うと思います〜。無職っぽかったですよ。バイクに乗ってて、ワルそうなカンジで……」

あつ、朝露さんは学年的に知らねえ〜か。

でも、話聞くに、明斧くさくね？

「ゴメン、続けて・・・」

「そして、大声で助けを呼ぼうとしたんですけど、口を塞がれて。丁度場所に、ひと気のない公園の近くだったんで、今思うと計画的犯行だったと思うんです。公園に連れて来られた私は、乱暴されそうになったんです。時間も夜だったし、ひと気もなかったし、半ば諦あきらめ掛けた時、仁沢君が現れたんです。そして、その大男をあっと言う間にやつつけてくれて・・・」

自作自演か・・・？

「お礼をしたかったんで、その旨むね話したら、じゃあ、ケータイの番号を教えて欲しいって・・・。その晩電話がきて、次の日会う約束したんですよ。それで、元旦の日に、仁沢君の方から付き合っ
て欲しいって・・・。私は、じゃ、お友達から・・・って伝えま
した・・・。」

「それからどのくらいのペースで会ってるの？」

「2、3日に1回くらいのペースで会いますよ」

「ど、ど、ど・・・？」

「JJJJ・・・」

チリン チリーン

「いらっしゃいワン」

オレは嫌な予感がして後ろを振り向いた。

犬耳着ぐるみに案内され、仁沢光圀、そして、安室漣、漣の側近の2人。

石田中のヤンキー4人組が店内に入ってきた。

ピンチ……。

第357話 ビスマルクと果たし状

絶体絶命だ。

朝露さんに仁沢の事をもう少し聞き出そうと、ゆっくりと愛してマスカットパフェを食べてる最中に、仁沢たち石田中のヤンキー4人が店内にやってきた。

4人はオレの真後ろのテーブルに座った。

運良く朝露さんは気付いていない。

「へへ、面白そうな店じゃん」

「このベル鳴らすとメイドが来るんだぜ。画期的だよネ」

「ここに仁沢の彼女がいるんでしょ？ 早く会わせてよ」

「ねえ、澁サマ、一緒にこのケーキ食べませんか？」

そんな話し声が後ろから聞こえてくる。

隣に朝露さんがいなければ、絶好の情報入手ポイントになるんだが・
・・。

「噂をすれば、何とやら……ですね」

朝露さんはニツコリ微笑む。

ヤバイ、オレが見つかるのは時間の問題だ。

仁沢に嫉妬される上、即、前田に報告され、オレの居場所がバレる。

中島、タカノブが駆けつける可能性もあるし、コレが原因で、マジブーや詩乃舞に危険が及ぶ可能性だって考えられる。

何としてでも切り抜けねば……。

「シッ、朝露さん……、今、後ろに……、オレの好きな人がいるんだ。今はまだ、オレに告白する勇気はなくて。でも、そのうち告白したいと思ってるんだ」

オレは小声で囁ささやいた。

「そ、それ、ホントですか？ へ……」

朝露さんも、小声で反応。

「だからさ、お願いがあるんだ。こんな所で、メイドさんにパフェを食べさせてもらってる姿なんか見られたら、オレの面目めんぼく丸潰れだよな？」

「そ、そうですね〜」

「ここは何としても、後ろの彼女に会わずにここを去りたいんだ。このままこのテーブルにいたら、もし、後ろのコがトイレに行ったりした時、そこを通るからバレるでしょ？」

「そうですね。どうしましょ〜？」

「そこでお願ひがあるんだ。今から朝露さんさ、メイドさんたちを集めてさ、後ろのテーブルで何か・・・、そうだ、ジャンケン大会とか、ど〜かな？ メイドさんたちとジャンケンやって、勝敗の数で何かサービスするとか・・・。そのサービスの品の代金は、オレが前もって払っとくからさ」

そう言つてオレは、サイフから5千円を出し、テーブルに置いた。

「そ、そんなに？ お釣りは・・・」

「いらん。パフェ代プラス、サービス品代だ。後ろのコにオレからのプレゼントだ。後ろのコが喜んでくれるなら、安いモンだ」

「分かりました。じゃ〜、メイドさん集めてジャンケン大会やってみますね。きつと、その隙すきにバレずに帰れるはずですよ」

「よ、よろしく頼む・・・」

「ハイ。じゃ〜、お気をつけて・・・」

「待つて、最後に、約束して欲しい。仁沢にもそうだが、オレとここで今日会つて話した事実、話した内容は、絶対に内緒にして欲し

いんだ……」

「本気なんですね、そのコの事。分かりました、私とジオン先輩の、秘密にします。絶対話しませんよ、約束です」

「サ、サンキユ」

朝露さんは厨房に駆け足で戻ると、しばらくしてから10人ほどのメイドさんを引き連れて後ろのテーブルに向かった。

流石に後ろのテーブルだけじゃなく、店内中が盛り上がり、全く気付かれずに店内を出る事が出来た。

我ながら……、逃げ足だけは天下一品だ……。

何か、朝露さんに嘘ばかりついて、情けないけど……。

翌日、宮さん決断のXデーまで、ついに残り3日をきった。

Xデーは、1月21日、月曜日。

どんなカタチで前田に逃走資金と逃走用の車を渡すのか、今は前田の連絡待ちだ。

そこから本格的に綿密な作戦の練り始めとなる。

「そうか、やっぱりその2人は付き合ってたのか」

オツキーが溜息ためいきを吐いた。

昼休み、オレはオツキーとユイに、昨日の出来事を話した。

貴船に絡まれた事、小西から聞いた情報、そして、朝露さんと仁沢の関係などを2人に語ると、

「問題は、結局山積みね。雫と仁沢、問題は、雫が惚れてる可能性が高いつて事よね」

ユイも嘆息たんそく。

・・・と、その時、教室がザワめいた。

ん？ 誰かが教室に入って来たようだ。

どこの生徒だ？！

「亀鶴、コレ、高城さんから・・・」

確かコイツは修学旅行時のトーナメントで優勝したけど、結局タカノブにボコられた、2組の旗本はたもと。

旗本は、手紙のようなモノをオレの机の上に置くと、それだけ残して教室から出ていった。

オレはそれを手にとった瞬間、心臓を鷲掴わしづかみされたような衝撃を受けた。

なんとそれは、『果たし状』だった。

「は、果たし状？ 今時、そんなの申し出るヤツいるのかよ?!」

オツキーが驚嘆きょうたんの声をあげる。

「いるから、こゝして、オレの手元にコイツがあるんだろ」

「果たし合いって、お互いに命を懸けて闘うことよ？ 前回、大会でジオンに負けてるから、タカノブがリベンジしたがってるって事？ それとも、単純に前田の指示だから?!」

啞然あぜんとするユイ。

「ジオン、ム、ムシするんだよね？」

「もしやるなら、アタシも付いて行った方がいいわよね？」

オツキーとユイが、心配そうな面持ちを見せた。

果たし状……。

コイツを見る限り、ヤツは本気と見た。

タカノブは、オレとの決着戦を望んでるんだ。

もし、前田の指示でオレをぶっ潰したいだけなら、わざわざこんなマネはしない。

中島らとみんなで闇やみ討ちするはずだ。

「オレ一人で行くよ。それが、コイツへの礼儀だし、オレの流儀だ。・・・」

オレはその時、宮さんと明斧の関係と、オレとタカノブの関係をダブらせていた。

大衆の面前で恥を掻かいた明斧とタカノブ。

宮さんは敵に情けをかけて敗れた・・・。

『愚者ぐしやは経験に学び、賢者けんじやは歴史に学ぶ』ってのは、かつての偉人の言葉だ・・・。

前車の轍てつを踏むワケにはいかない。

絶対、タカノブに情けはかけねえ！！！！

決戦は今日、午後5時、場所は川田河川かせん、橋の下。

込み上げてくる恐怖と同時に、溢れ出る闘志を感じる。

とくに覚悟は出来てたさ。

決着をつけようか・・・、タカノブ！！

第358話 川田河川での戦い

意を決して向かった先は川田河川。

午後5時、決闘の相手は因縁のタカノブ。

『果たし状』なるものを受け取って、尻尾しっぽを巻いて逃げ出すワケにはいかない。

憎き前田の配下でもあるタカノブとの決着戦は、オレにとっても都合だ。

こうなりや切り込み役として、これから訪れるであろう超決戦の大舞台、その礎いしずえを築いてやる。

タカノブとの対戦は2度目。

前回はさんざん虐しいたげられた。

・・・が、それはオレもタカノブも、いわば前田に踊らされただけ。

今回は100パーセント、タカノブの意志。

・・・そう、信じている。

要らぬ心配をするオツキーとユイをどうにか撤まいて、オレは一人で決戦の地へやってきた。

場所を伏せたので、アイツらが顔を出す事はない。

2人に伏せたのは、何もオレの無様な姿を見せたくないって意味じゃない。

タカノブへのオレなりの礼儀なのだ。

タカノブは、おそらく1人でくる。

いや、絶対に1人でくる。

オレとのタイマンを望んでるのだ。

・・・そう、信じている。

タカノブ指定の橋の下は、人気ひとけのない場所で、まさに喧嘩をするには持って来いの場所だ。

銜くわえたタバコが小刻みに震える。

掌でのひらの汗はズボンで拭いても拭いても湧わいてくる。

『宿命の戦い』でのタカノブVS芒の一戦を思い出すと、オレがどれだけ意気込んでも、実力的に勝算は薄い。

もしかしたら完膚かんぷなきまでにコテンパンにやられるかもしれない。

・・・にもかかわらず、オレがこうして恐怖を押し殺してまでここにいられる理由は一つ、タカノブ戦を境に、何か先に進めそうな気がするからだ。

むしろ、タカノブ戦を避けては、これ以上先に進めないような気がする。

絶対、避けては通れない道なのは間違いない。

ならば、命を懸けて突き進むまでだ。

オレは、勝敗を越えた何かに期待していた・・・。

・・・が、そんなオレの期待も簡単に打ち碎かれる。

午後5時、予定通り姿を現したタカノブ。

5人の男を後ろに携たずさえて・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

タカノブは、オレを睨みながら不気味に口元だけ歪ませた。

その後ろで、タカノブの舎弟と思われる1組のヤンキー4人と、旗本が睨みをきかす。

「……タカノブの男気？ そんなモンに期待してたオレがバカだった？！」

したたかなAB型、タカノブを侮あなどつちやダメだよな……。

くっそお~~~~、オレはここでコイツらにリンチされ、川に捨てられるのか……?!」

「ひ、卑怯ひきょうじゃねえ〜か、何が果たし状だ。タ、タイマンじゃねえ〜のかよ?!」

声が震える。

「コイツらか？ フン、コイツらは審判だよ」

旗本たちを親指で指差しながらタカノブが言った。

「し、審判だあ〜？ ふ、ふざけんなっ!」

「安心しろ、やるのはオレだけだ」

まさに一瞬だった。

気が付くとオレは大きく吹き飛んでいた。

胸に激痛が走る。

肺の辺りに血の味を感じた。

どうやらタカノブの高速な蹴りで吹っ飛ばされたようだ。

もし、今のが顔面だったと思うとゾッとする。

「……っざけんなよ!!」

オレは胸を押さえながら立ち上がった。

……瞬間、また同じタカノブの右足の蹴りを食らった。

何とか踏ん張ったが、オレの足は自分の意志とは無関係な方向に歩
き出す。

正面を向きながら、ヨロヨロと後退あかずさりしたオレは、そのま
ま川に尻餅をつき、後ろにバツタリ倒れてしまった。

大きめの石にゴツンと頭をぶつけ、全身がバシヤツと水に濡れた。

開き直ったかのように、冷たい川の浅瀬で大の字になったオレは、
曇り空を眺めながら溜息をついた。

・・・つたく、A B型はこれだ。

何をしてくつか全く予想が出来ねえ・・・。

どくしたモンか。

・・・と、その時、土手を歩く武蔵の生徒たちが視界に入った。

数として7人・・・、まさに長山たちだ。

確か長山は川田中出身。

この辺に住んでるのが、アイツら・・・？

「アレ？ 長山さん、あれって亀鶴ジオンじゃないっすか？」

長山の手下の村田が頓狂とんきょうな声を出す。

な、長山・・・、た・・・、助けて・・・なんて、口が裂けても言わねえ・・・、まさか見て見ぬフリはしねえ・・・。
アイツ、タカノブを嫌ってるはずだし、色々とおれをサポートするような行動とってんじゃないん。

遠くからこの光景見たらさ、明らかにおれがタカノブたちにやられてる図式だよな。

助けに来るよな、普通。

・・・つつか、別にあんなヤツらに助けてもらわなくなっちゃって別に構わねえ、んだけどさ、どうしてもオレを助けたいって言うんならしよ、がねえよな。

長山もO型、オレもO型、O型同士、ライバル同士の結束・・・つてカンジ？

・・・たく、長山とタツグを組むなんて背中が痒いぜ。

・・・ま、この際しよ、がねえか。

「亀だア~~~~？ はあ？ ・・・知らね。見えねえし！」

明らかにこっちをギロ目していた長山だったが、ソツポを向いて歩き出した。

それに合わせるように、長山の手下たちもこっちを見ないようにしながら早足で去っていった。

・・・ひ、ひとでなし。

「オラ、てめえ、いつまで寝てんだよ。やる気あんのかあ？ 高城さんがこうやってわざわざ出向いてくれてんだから、ちつとは期待に添えるよバカ。それともてめえ、何か勘違いしてたのか？ 高城さんはてめえにわざと負けたんだよ、この間。あまりに力の

差を感じて怖気付いちまったかあ〜?」

1組のヤンキーに頭を鷲掴わしづかみされた。

「放せよ、自分で立てるから」

オレはそいつの腕を振り解ほどきながら立ち上がった。

・・・と、その時!!

「よお〜、タカノブ! ど〜よ調子は」

銜えタバコで顰しかめっ面つらした野牛の学ランを着た野郎が、ヨ
タヨタとこつちにやって来る。

何でてめえ〜まで来んだよ、芒すすきみちるっ!!

第359話 慎重派VS突進派

「まだ始まったばかりだ」

「フン、手加減すんなよな、タカノブ。オレの時みてえくにやっちまえよ。コイツ、最近調子乗ってっから」

芒がタバコの煙を吐きながらニヤリと笑った。

『武蔵VS野牛』時の因縁の相手だった芒は、『宿命の戦い』時は打って変わり、オレの仇かたきを討つつみてえくなカンジで、『高城伸之VS芒みちる』戦をやったのけたが、試合後にタカノブに何かを吹き込まれて、またまたオレに矛先を向けやがった。

何つくか、芒の誤解による怒り？ ストレス？ 分かんねえけど、とにかく芒の矛先がオレに向いたのは事実。

大方、「亀鶴戦はわざと負けなきゃならなかった」的な、可哀想なタカノブの背景を知り、哀あわれなタカノブの肩を持ったんだろうよ。

オレ的には、「そこは前田に矛先を向けるべきじゃね？」って言うてやりたいが、何を言っても右耳から左耳へ流れるのがオチだろう。

そんな事を考えていると芒が、

「なあ〜タカノブ、KHJのボスってよく、ウチの長須や吉岡の大橋らと良好な関係を保とうとしてギャラクシーを叱しかりつけてたんだろ〜？ アイツらはボスのカモだから何となく分かるけどよく、何で亀鶴を庇かばう必要があつたんだ？ タカノブも柴もよお〜、あのボスの命令で亀鶴には手を出せなかつたんだろ？！ 何で？」

タカノブにぶつきら棒に聞いた。

よし、良いタイミングでオレが知りたかつた事を聞いてくれた。

そこんトコだけ感謝するぜ、芒。

「さあ〜な・・・」

オレを警戒しながら、タカノブが答えた。

くそ〜、オレの前だからって口を閉ざしやがった・・・。

「何でカンパの金もよこさねえ〜コイツを庇う必要があつたんだ？
そこの所が分かんねえ〜」

芒が尚もタカノブに訊く。

オレも分かんねえ〜。

答える、タカノブ。

「知らねえ〜って言ってんだろ〜が!！」

静かにしろ的態度でタカノブは芒を追い払った。

「オイ、おめえ〜ら知らねえ〜か？　ど〜してKHJのボスはタカノブにわざと負けるように命令したんだ?!！」

芒が聞いて回るが、1組のヤンキーや旗本たちは首を傾げるだけだった。

虚言や上辺だけの言葉など簡単に見透かすAB型。

コイツには真っ向から語り掛けるのが一番だ。

「オイ、タカノブ！　あの時、リング上で、オレにわざと負けたんだってな……。てめえ〜、偽りで生きてて辛くねえ〜のかよ……」

「声が震えてるぞ?。」

タカノブは鋭い目はそのまま、口元に笑みを浮かべながら言った。

いや、今はオレの声は震えちゃいねえ〜。

A B型の妄想入りの言葉にや惑わされねえぞ、オレは……。

「負けると言われりや負け、今度はやつちまえと言われてやるってか？ 前田に命令されりや、人殺しもやるってか?!」

「……………」

タカノブは眉間に大きなシワを寄せた。

「オイ、タカノブ、マジかよそれ。オマエ、KHJのボスに命令されて亀鶴やってんの?」

芒がしゃしゃり出てきた。

「……………」

タカノブは尚も黙り込む。

「悔くやしくねえのかよ！ いつまで偶像崇あがめてんだよタカノブ！ おめえには自分の意志がねえのかコラ！！ それに、オレはこゝして1人で来てやってんのに、てめえは6人も仲間連れてきやがって、何が果たし状だ！ 何が決闘だ！ 笑わせんじやねえよ」

「オイ、芒！ オマエがコイツの事、めんどくせえって言うた意味が分かったぜ。コイツ、ウゼエな……」

タカノブは目と鼻の間に沢山のシワを寄せて言った。

「ヒヤッハッハッハ・・・、だろ？ そいつ超ウゼエ〜んだよ！」
芒が笑う。

タカノブやら芒にまでウザイと言われるって事は、オレってホントにウザいんだな・・・。

ウザくて結構！ こ〜なりやとことんウザイ男を貫いてやらあ〜！！

「前田は今逃走中らしいな。KHJにガサ入れが入って、前田以外みんなパクられたそ〜じゃね〜か。おめえ〜はそんな前田を匿かくまってるのか?! だとしたらおめえ〜は立派な共犯だ、タカノブ！ 犯人隠匿罪ってヤツだ。てめえ〜いい加減、気付きやがれ！ おめえ〜が正義だと思つてたヤツは偽善者なんだよ！ おめえ〜が崇あがめてるものこそ悪なんだよ!!」

「うるせえ〜雑魚ざこが！ テメエ〜こそ、いつも長いモンに巻かれてんじゃねえ〜か！ 1年の時はテル、2年になつたら金髪の1年と悪の親玉、宮大地。こつちからしたらテメエ〜らこそ悪なんだよ！ 何自分を正当化してんだコラ！」

タカノブがいつになく激しい口調でまくし立てた。

テルだあ〜？ コイツ、テルなんか知らねえ〜みてえ〜な事、前に

言っただけど、本当はメツチャ意識してたんじゃないの？

「はあ？ おめえ、だったら何で1年の時、テルがトップ張ってるのに文句言わねえんだよ？！ あ、おめえの魂胆だっけ？ テルをトップにさせといて、面倒な事は全部テルに任せて、自分は高みの見物ってか？ そんな根性無しが今更テルに文句言ってるじゃねえよ！」

「テルってヤツは金払ってたんだよ。テメエは一銭も払ってねえ。だろ。そんなヤロウがデケエ口聞くんじゃねえよ」

「前田の言いなりになってるだけのヤツに、こっちだってデケエ口叩たたかれたくねえよ」

「何だとテメエ、コラ！・・・っざけんやよ！！」

タカノブは目を血走らせてオレの襟首を掴んだ。

常にクールなAB型がここまでムキになるって事は、かなりヤバいね。

キレるとマジで何を仕出かさか分からないのがAB型。

覚悟しねえとな・・・。

「オラ、タカノブ・・・、言いてえ事ねえのかよ」

「てっ、テメエこそ、最後の遺言はそれでいいのか？」

「オレはこんな所でくたばってらんねえんだよ!!」

バゴオーーッ

見事なまでのオレのチヨーパーンが炸裂!

タカノブは鼻を押さえて悶絶もんぜつした。

「……っで、テメツ!!」

タカノブの両手からドクドクと流れる鼻血は、ビタビタと地面の石を真っ赤に染めた。

第360話 1月18日(金)

気が付くとオレは、ゴツゴツした石の上で大の字になり、曇った夜空を眺めていた。

薄っすらと白い雪がポツラポツラと舞い降りてきて、冷たい頬をさらに刺激した。

体中が痛む。

オレはタカノブに負けた。

結果は惨敗だった。

結局、チョーパンでタカノブの鼻っ柱をぶっ潰したまでは良かったが、そこから先はタカノブの独壇場どくだんじょうだった。

しゃがみ込むタカノブを起き上がらせようとした矢先、足を払われたオレは態勢を崩した。

掴つかみ掛かってきたタカノブを一度は払いのけたが、すぐに押し倒され、川の浅瀬の石に後頭部と背中を強打してしまった。

その後、タカノブのパンチの連打を食らい、徐々にオレの戦意は喪失していった。

しかし、負けを認めたくなかったオレは、意地でもタカノブのパンチから逃れようと体をくねらせたが、それが徒あだとなり、徐々にオレの体は川の中流へと押しやられ、ついには顔が水の中に沈んでしまった。

息が出来なくては何も出来ない・・・、どこるか死んでしまう。

オレはとっさに手をクロスさせ、心の中で「ストゥゥゥップ」と叫んだ。

ズルズルと足を引っ張られ、浅瀬に打ち上げられたオレは、まるでどぎえもんのように川のほとりで大の字になった。

ちきしゅ・・・、悔しいが、敵に命乞いしたのは確かだ・・・。

でも・・・、情けねえ〜が、オレはこんな所でくたばってらんねえ〜んだよ。

オレの命乞いという無様な姿を見て、さぞ満足したのであるうタカノブと芒は、そこら辺に唾を吐き、高笑いしながらいずこかへ消えた。

その後、解放されたと思いきや、1組のヤンキー4人一人一人に蹴られた拳句、旗本の蹴りを顔面にモロ食らって、オレの意識はかなり遠のいた。

しばらく何も考えられず、ただただ涙を流しながら、その場を去った旗本たちの後姿だけを見ていた。

心も体も・・・、痛え～・・・。

慣れてるはずなのに、こんな屈辱、中学の時とかさんざん食らってきたはずなのに、どうして今更涙なんか出るんだよ・・・。

テルの仇を討てなかったからか？ いや、元々、テルの仇なんかなかったのかもしれない・・・。

テルも長須も大橋も、タカノブも皆、岡村少年を助ける為に金を集めてたとしたら、タカノブをテルの仇などと思う事自体間違ってるし、大元の前田だって、罪滅ぼしの為のカンパなのであれば、他の悪行を恨むなら分かるが、カンパの行為自体を恨むのは筋違いなのかもしれない・・・。

・・・って、オレは、何弱気な事言ってるんだ？

悪に屈していいのか・・・？

でも、分からない・・・。

竜崎の言うように、カンパの件には被害者はいないのか・・・？

それとも・・・、オレも竜崎も、みんなみんな本当は被害者で・・・

・・・？

があ~~~~っ、理屈じゃねえ~~~~っ！！

悪に屈するつもりはねえ~~~~っ！！！！

ヨロヨロと川田河川を後にしたオレは、真っ直ぐ宮さんが働く工事現場へと向かった。

一昨日オツキーの部屋で談合した日も、宮さんは休まず仕事をしたのは知っている。

何だかんだ言っつて、宮さんはまだ金を集めるつもりなのだろうか・・・？

今日で7日目、日当1万5千円って言ってたから、丸10日やれば15万・・・、残りの85万はどくするつもりなんだ？！

オレは何度も倒れそうになりながら、やっとの思いで宮さんの工事現場付近まで辿り着いたが、ハッと我に返った。

・・・こんな血だらけのボロボロの姿を見せちゃったら、宮さんメッチャ心配するじゃん。

……オレは何やってんだ？ 無意識で宮さんに助けを求めたのか？ 憐あわれれんでほしかったのか？！

こんな姿見られて、何ていいわけすんだよオレは……。

宮さんの工事現場には寄らず、チラチラと舞い散る雪と曇り夜空を眺めながら歩いていると、冷たい雪が体中の傷痕に沁みてきて、沢山の雪の結晶が溶けた雪解け水とともに、オレの瞳からも汗とも違う塩辛いものが流れ落ち、悲しい気分が倍増した。

竜崎、宮さん、ユイ、誠さんらの言葉がオレの頭を過ぎる。

『ジオンさん、オレら、温度差が有り過ぎるんす。オレは元々冷たい人間なんすよ。ジオンさんは、熱すぎるっす……』

『ジオン、竜崎とは、ちょっと距離を置いた方がいいわ。アンタら少し、近づき過ぎたのよ』

『何でもない人とぶつかり合っても大した傷じゃないけれど、親友クラスになると、ぶつかり合った時の傷も深い。そんな大きな傷口を合わせると、しっかりはまって丸く収まる』

『でも、安心したわ。てっきり落ち込んでるのかと思っちゃった。このまま冬休みまで寝込んでじゃうのかと思ったわよ』

『ぶつちやけジオンさん、ウザイっすよ』

『亀ちゃん、亀ちゃんの事はオレに任せてくれ』

その後、竜崎は宮さんとはたまに会って話をしてるようだが・・・、オレはあれから2ヶ月以上、会ってない。

今更どの面つらぶら下げてアイツに会えってんだ？

流石にもう、無理だろ…………。

親友だと思っていたが、所詮アイツとの仲はそんなモンだったんだ。

現にアイツは、宮さんが大変な時だったのに顔も出さない。

……………か、オレらが竜崎に話してないだけなのか？

いや、アイツは元々仲村たちと……………んああ？ ああ……………
っ！ だ、大事な事忘れてた！！

仲村だ、橋だ、アイツら、その後どんな動きをしてんだ？！

思えば仲村たちの情報は何も入っていない。

8日前に柴と秋鹿の入院の事実を耳にした時、仲村の安否を確認したきりだ。

仲村、橋……………、アイツらは中立を装ってるが、何だかんだ言ってオレたちの味方？

ハッキリとは断定できないが、味方の線が濃厚だ。

KHJのガサ入れ、仲村たちの通報が発端なんじゃねえ？の？
織
川が自白したって可能性も無くはないが・・・。

。 Xデー前に、仲村たちの動向を確認しておく必要があるな・・・。

第361話 AかABかBかOか

Xデーまで残り2日。

学校は休んだが、オレは足を引きずりながら原チャに跨またがり、何とかオツキーの家に辿り着いたのは午後2時。

今日は土曜日で午前中授業だったのでオツキーはすでに家にいた。

「とりあえず月曜は、朝からユイと誠さんがマジブくを守る手筈ではずは出来てるよ」

オツキーが椅子の背もたれを抱きしめながら言った。

「それを聞いて安心したぜ。いまだに前田から金かねの指定場所の連絡がないよ」だな・・・」

前田はかなりの智能犯だ。

ま、警察に追われてるんだから、その位慎重になるのは当たり前だとは思うが、それにしても前田はキレ者ではある。

一体アイツは血液型、何型なんだ？

Aか？ ABか？ Bか？ Oか？

「しっかしジオン、フルボッコだったのか？ ボッコボッコにされたみてえ〜だな。カツアゲはされなかったの？」

「・・・んな事されるわきゃねえ〜だろ。もし金品奪われてたらココにいねえ〜よ」

「それもそ〜だな。今のジオンからカツアゲなんかしたら、取り返してアンドロメダ星雲とかまで追いそ〜だもんな」

「そんなにがめついか？ オレ」

「いや、何か執念深そ〜じゃん」

「悪が許せねえ〜だけだよ」

「その悪、前田の事だけどさ、オレは宮さんやユイと同意見だ。結局よくよく考えたけど、前田に逃走資金やって、とりあえず逃がして、マジブ〜の安全を確保するのが先。その後警察に通報するなりして、前田を追えばいいんだよ。逃走用の車はど〜せ宮さんのアニキの車なんだし、警察に通報したら即、前田は御用だ」

オツキーの言う通り、結局の所、宮さんが逃走資金と車を前田に提供する事に落ち着いたようだ。

オレはその事については多くは語らなかったから、皆オレが内心怒ってると思っていたに違いない。

悪をおめおめ逃がす案は実際面白くはないが、この際仕方ない気もする。

一旦逃がして、マジブたちの安全を確保してから通報し、逃走する前田を警察に捕まえてもらい、連鎖式で前田を匿ってたヤツらも捕まえてもらいたい。

それがベストのような気もする。

「ああ、オレも依存はない。ただ、宮さんは逃走資金を明後日までに貯めなきゃならないだろ？ 無理っぽくね？」

「それなんだけど・・・、オレ、無理にでも宮さんに頼んで借りてもらおうと思うんだ」

オツキーはそう言ってぶ厚い封筒を手にとった。

「ま・・・、まさか・・・」

「そう、ココに100万・・・、あるよ。さっき下ろしてきた」

オツキーは封筒から札束を出し、そいつをオレに見せ付けた。

「頼んで借りてもらって、何か変なカンジだな。でもさ、あの宮さん、超頑固だぜ。そ〜簡単に受け取らないと思うぞ。何か秘策はあるのか？」

「ないよ。だからさ、ジオンに頑固なB型へのお金の貸し方のアド

バイスを貰おうと思ってたんだよ」

頑固なB型への金の貸し方だと？　ねえよそんなの！！

「うっっん、しいて言うなら、B型はアマノジャクだから、それを逆手にとつて……」

いや、そもそも宮さんは親から金を借りるのも拒む人だ。

一筋縄じゃく、いかない。

「どくすりゃいい？　ジオン」

「真正面からぶつかるしかねえくだろ。マジブくを助ける為に、ちよつとだけ協力してほしいって。100万は前田が警察に捕まったら必ず返つて来るから、その時に返してもらえばそれでいいからつて、宮さんに魂でぶつかるしかねえくな」

「たつ、魂で？　ジ、ジオン、オレの代わりに言ってくんねえくか？　オマエの器用な話術でさく、宮さんを言いくるめてくれよ」

「バカ！　オレがぶつかつてどくすんの！　それはオツキー、オマエの金だぞ？！　オマエがぶつからないで宮さんに想いが伝わるワケねえくだろ！！」

「……だよな。が、頑張ってみるよ」

「ああ、頑張れ」

・・・たく。

「ところでオツキー、仲村や橋、はたまた竜崎の事なんだが・・・」

オレは、仲村たちの今現在の動向が気になり、竜崎に確認を取ってもらうよう要請してほしいとオツキーに頼んだ。

「分かった。さっそく竜崎に電話してみるよ」

そう言つてオツキーはケータイをプッシュする。

「あつ、もしもし竜崎？ そう、オレ沖田。オツキーだよ～～～ん、元気だよ～～～ん。ウン、ジオンも元気だよん」

そう言つてオツキーはオレの顔色を窺うかがい出したので、オレは大袈裟なジェスチャーでオツキーの視線を追い払った。

5分ほどの語らいを終え、オツキーはケータイを切った。

「・・・で？ 何だつて?!」

「例の『宿命の戦い』の大会の日、あれから竜崎は、仲村、橋とは距離を置いてるらしい・・・」

オレはその時、あの時の竜崎の言葉を思い出した。

『こつちこそ、スミマセンでした。仲村さんたちを止めたのも、みんなを救いたかっただけっス・・・』

つまりアイツは、オレと宮さんを救おうとして、仲村たちと交流していた。

KHJにガサ入れが入ったりリッキーが異動になったりして、オレたちを救う必要がなくなった今となつては、仲村たちと交流する意味が無くなった・・・と。

「結局警察に垂れ込んだのか？ 仲村たちは・・・」

「あれから全く連絡を取り合っていないって言うたから、今仲村たちがどんな動きしてるとか、そ〜いう事も竜崎は何も分からないみたいだぜ。別に気にする事ないんじゃないかね〜のか？ 仲村たちからしたら、ど〜せ前田が捕まるのは時間の問題だと思ってるだろ〜し、わざわざ危険を冒してまで前田に接触しようとはしないだろ。それに、宮さんの彼女が狙われてるって事実は、オレとジオンとユイと宮さんの4人しか知らない事だろ？」

「・・・まあ〜〜な」

「考え過ぎだよ、ジオン」

オッキーはのんきに欠伸あくびをした。

奴やっこさんはキレ者だから、あらゆる事を想定しとかないとダメなんだよ。

足元をすくわれてからでは遅いんだ……。

第362話 Xデーはネズミランド

オツキーの家の帰り道、オレは琵琶神社に足を運んだ。

巫女装束に身を包み、慎つつましく悠揚ゆうような雰囲気を漂わせながら掃き掃除をするユイがいた。

「結局やられたの？ そんな事だろ〜と思ったわ」

ユイがオレの顔面の絆創膏を見て笑った。

その近くのお守り授与所で、気品があり奥ゆかしい少女を発見。

「ワオ！ マジブ〜の巫女さん姿見るの初！！ マジで似合っね〜、マジブ〜」

「ジオン先輩、お久しぶりです」

「そ〜だね、1週間くらい会ってなかったモンね」

確か、マジブ〜と夜の公園で語らった時ぶり。

マジブ〜と軽く語らった後オレは、ユイを離れた場所に連れてきて言った。

「なあ〜ユイ、例の件なんだけど、ヨロシク頼むぜ、月曜日・・・」
朝からユイと誠さんがマジブ〜を保護するってヤツ。

ここにいるなら間違いなく安全だ。

「ウン、大丈夫よ。それよりアンタも大丈夫なんですよ〜ね？ 余計な事に首突っ込まないよ〜にね?! アンタはいつつも首突っ込んで事を大きくするんだから」

何だよそれ、それは自分の事だろ? ……ってユイにツッコミたかったが、例の如くオレは堪こらえた。

「・・・で、どんな手筈ではずなんだ? 朝って何時くらいからマジブ〜をここで匿かくまうの?」

「朝5時くらいから、事件が解決するまでよ。さすがに夜遅くまでは無理だろ〜し、次の日もってワケにはいかないけど、お金と車を渡すだけでしょ? とりあえずマジブ〜とマジブ〜の両親には嘘を付いちゃう事になるけど、マジブ〜を助ける為だから仕方ないわよね」

「もしかして、誠さんには言ったのか、ホントの事・・・?」

「ウン。どうして最近宮さんがお茶飲みに来ないんだろ? ……って気にしてたし、隠してたってどうせバレそ〜だと思って、マジブ〜には内緒ねって言うのを前提に、事件の内容もザツと言った」

「そしたら？」

「それが賢明だね・・・って」

そうか・・・、誠さんも認めたんなら間違いないんだ・・・。

「アタシたちの作戦は完璧よ。雫も詩乃舞ちゃんも、もちろんマジブくも絶対守ってみせるわ」

「朝露さんも詩乃舞も、今の所狙われてないモンな。狙われる前に・・・って言うか、前田の逃走に加担する時点で狙われるもクソもないんだけどな・・・」

「ホラ、アイツらは極悪非道だからね、用心に越した事はないわ」

「確かにな・・・。所でマジブくとかマジブくのご両親には何て言ってるんだ？」

「事情を聞いた誠さんが、せっかくだから3人でネズミランドに行くって」

ちなみにネズミランドは、石田町から新幹線で片道2時間ほど行った所にある、日本のテーマパークだ。

「何だよそれ、だったらオレも連れてけよ・・・！・・・ってなワケにはいかねえよな。宮さん命懸けなんだし・・・。・・・つつか、こっちは命懸けだったのに、そっちはネズミランドかよ・・・」

「マジブ〜の両親も喜んで承諾してくれたみたいよ」

「そりゃ〜誠さんと一緒なら・・・ってさ、ちよつとした疑問なんだけど、マジブ〜ってさ、ど〜して琵琶神社で巫女さんする事になったの？」

オレの問いに、ユイはキョロキョロと周りを見渡してから、誰もいないのを確認して語り出した。

「マジブ〜が中1の時、色々あってね・・・」

イジメの事・・・だな。

「ちよくちよく誠さんの所に相談に来てたのよ、マジブ〜と両親の3人で。アタシはその頃から神野流古武術を習いに通ってたんだけど、同じ中学の女の子が居るな〜くらいにしかその時は思わなかったワケ。ある時誠さんがマジブ〜に琵琶神社でバイトしてみないかって切り出して。それで、その辺りからマジブ〜を毎日見るようになって。いつの間にか巫女さんになってたってワケ。あのコ凄くマジメだし両親も良い人なの知ってるから、誠さんも安心して巫女さんを任せられたんだと思うよ」

ユイはマジブ〜が巫女さんになった理由を教えてくれた。

「なるほどな。ま、とりあえずこれで一安心だな。ほんじゃ、楽しんでこいよ、ネズミ〜ランド」

「ジオン、餞別せんべつは？」

「……じゃっ」

オレは早々とその場を後にした。

鳥居をくぐり、神社の階段を下りてる時、神社の出入り口付近で寂しそうな姿で佇たたずむ少女の姿が視界に入った。

いつもは両脇に一人ずつ、ヤンキー女を連れてるのだが、今日は珍めずらしく単独。

少女は制服の上にパーカーを羽織り、例によってフードを被っている。

琵琶神社に何の用だ……？

安室、濡れい……!!

第363話 黄昏を求めて

オレが警戒して間もなく、溼れいは虚ろな目のまま俯うつむき加減で歩き出した。

気付かれぬよう、距離を置いて後をつけてみた。

もしかしたら、前田の居所をつかめるかもしれない・・・？ そんな期待と不安を胸に、オレは生唾を何度も呑みながら溼の後をつけた・・・。

石田中からおよそ徒歩5分ほど進むと、見覚えのある住宅地が見えてきた。

そして・・・、辿り着いた場所は、中学時代、何度も訪れた高台の墓地。

夕方前ではあるが、墓地は人の気配は無く、不気味なくらい静まり返っていた。

オレはかつて、ここの断崖の絶壁から何度も飛び降りようとしたんだ。

イジメを苦し・・・。

でも、本気で飛び降りようと足を踏み出した時、オレを掴んで助けてくれたのが誠さんだった。

封印していた記憶が、当時の現場に来ることで、生々と甦よみがえってくる。

今でも鮮明に覚えている忘れられない苦い記憶。

こんな時間、こんな墓地に何の用なんだ？ 漣の身内の墓でもあるのだろうか………？

どンドン奥まで歩を進め、とうとう『自殺の名所』とまで呼ばれる例の断崖までやってきた。

高台から景色を眺めて黄昏たそがれを待つには、あまりにも場所が悪すぎるぞ？ ちょっとでも足を踏み外しちまったら、真つ逆さまだ……。

漣は断崖ギリギリに立つと、そこから真下を見つめた。

オレはあそこから何度も下を見てるから分かるが、真下は竹やぶになっっていて、落ちたら間違いないく串刺しで死ぬ。

どうしてそんな所を見る必要がある？ しかも一人で……。

し、死ぬつもりか？ 自殺願望でもあるってのか？！

漣は、ジリジリと前に進み、大きく息を吸った。

・・・・・・・・・・・・・・・・っ!!

直感で感じる。

死ぬつもりだ！ 本気だ！！

オレは全速力で漣との距離を縮めた。

そして・・・・・・・・！！！！

フワツと漣の体が宙に舞う寸前、オレは漣の腕を掴む事に成功した。

1秒、いや、0.5秒でもオレが漣の腕を掴むのが遅れたら間に合
わなかったかもしれない。

「きゃーーーーーっ！！」

突然の出来事で、漣は目の玉が飛び出すほど両目を見開き、大声で
断末魔のような叫び声をあげた。

腕を掴んで引つ張った勢いでオレたちは後方へ吹き飛び、そのまま
抱き合いながらゴロゴロと地面を転がった。

「いやー……ッ！ 放してえー……ッ！」

漣は泣きじゃくりながら暴れる。

「落ち着け！ 落ち着いてくれっ！」

オレは乱心する漣の肩を掴み、体を揺すった。

やがて、「はあ、はあ……」と息を吐きながら、漣が地面に力なく座り込んだ。

オレも同時にその場に胡坐あぐらをかいて溜息を吐いた。

ドキドキドキドキ

まだ心臓は落ち着かない。

オレはタバコに火をつけて空を眺めた。

相変わらずの曇り空……。

「……」

漣は黙って手を伸ばす。

「……ちっ、1本だけだぜ」

オレは仕方なくタバコを一本差し出した。

震える手でタバコを銜くわえた漣は、鼻水を垂れ流しながら何度もヒクヒクしている。

タバコに火をつけてやると、漣は軽く頭を下げ大きく煙を肺に入れた。

「ゲツホゲホゲホ・・・、ゲツホゲホゲホ・・・」

「吸えねえ！なら吸うなよ！」

オレはすぐに漣の口からタバコを奪うと、右手で握り潰して火を消した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

またもや漣は黙って手を伸ばし、オレのタバコを欲しがる。

「ふざけんな、オマエ、タバコ吸えんのかよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

首を大きく横に振る漣。

「20歳過ぎたら吸え。・・・つつか、吸うな、こんなモン。こんなモンは国の陰謀だ。只ただの税金の塊に過ぎん！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣はアヒル口を大きく突き出し、オレの胸ポケットに手を入れてきた。

「オ、オイ、やめろって・・・」

オレから無理矢理タバコを奪った漣は、ライターでタバコに火をつけ、またしても吸えないタバコを吸いだし、相変わらずケホケホやり出した。

・・・・・・・・つたく、勝手にしやがれ！

「・・・・で、オマエは死のうとしてたのか？」

「漣れい」

「・・・・・・・・ンア？ ああ。・・・・で、何回目？」

「・・・・・・・・・・初めて」

大粒の涙を幾つも溢し、漣はタバコを地面に押し付け火を消した。

「ふ~~~~ん・・・・・・・・」

オレは袖そでをまくり、左腕の根性焼きを出した。

「コイツは・・・、オレの年の数・・・以上ある。自殺を食い止めた数だ。そこら辺のヤンキーのように、オレの根性焼きは飾りじゃない。コイツは、オレが生きようと決意した数だ・・・。でも、オレ、根性ねえから・・・、結局こんなに沢山焼き跡作っちゃったけどな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣は固唾を呑んでオレの根性焼きを見つめる。

「偶然にも、オレが何度も死のうとした場所がココだ。それで、2年前の・・・、丁度今頃だよ、オレもこっから飛び降りる瞬間、ギリギリの所で命を救われてるんだ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣は、ゆっくりと自分の制服とパーカーの袖をまくりあげる。

漣の両腕には、おびただしいほどの根性焼きの痕あとがあった・・・。

第364話 湊の秘密

「それ、自分の意思でやったんでしょ？ 私のは……………」

湊はそこまで言うと、急に黙り込んだ。

…………自分の意思じゃないって事は、誰かにやられたってのか？

酷むごいな…………。

「湊の苦は、いつから続いているんだ？」

「…………え？」

「湊は、いつからイジメられてんだ？」

「……………っ、うっっ……………」

湊は口を押さえ、何度も咽むせび泣いた。

誰にも本音を吐かず、ずっと堪こらえてたってか…………？ ちんちん、辛かっただろ？…………。

「ゴメン、余計な事聞き過ぎた」

確かコイツはA型だったっけな……。

これ以上深入りするのによそう。

前田の側近でもあるし……。

「……い、1年前。中2の、半ばくらい……」

漣は嗚咽おえつを堪えながら語り出した。

「そうか。原因は、自分でだいたい分かってんのか？ 理不尽な力
ンジ？ それとも自分に原因があったりするの？」

「……わ、私が……、私がゼンブ悪いの……」

「多分、漣もオレと同じで優し過ぎるんだと思う。オレも昔そうだった。自分を責めて、自分が一番悪いんだって言い聞かしてきた。でも、ダメなモンはダメなんだよ、ホントは。NOはNOだ。嫌なモンは嫌、悲しい時は悲しいって表現しなきゃダメなんだよ。作り笑いで過ごしたって、結局自分を偽って生きてるだけでさ、いつかこうやって、何もかも終わらせたくなくなるんだよ……」

「……」

漣は地面に泣き崩れた。

あれれれれ？ 何か悪い事言っちゃまったかな？！

な、何か言わなきゃ……。

「この世に意味のない事は一つもねえから。澪が味わった孤独も、愛を知る為にあるんだよ、きっと。澪の犯してきた過あやまちの償つぐないは、必ず近いうちに終わっから大丈夫だ。勇気を出して明日を生きてみるよ。それに、澪をイジメる人たちにも、ちゃんと償いがあるんだ。必ずそいつらも過ちを償う事になる。だから、そいつらを恨まず許しちゃまえ。そくすりゃラクになっからさ」

気が付けば、2年前、誠さんに言われた事と同じセリフを吐いていた。

「……………」

澪はハンカチで涙を拭い、真っ赤な目で大きく頷いた。

「何を信じていいのか分からない時は、目を閉じて心の声に耳を澄ますんだ……。聞こえねえか？ 助けてって、声が……………」

「……………ワァァァァァァッ」

とうとう大きな声をあげて澪は泣き出した。

「辛い時は、助けてって言うてもいいんだぜ。誰か、必ず助けられるヤツはいるから。悲しい時は、無理せず泣いてもいいんだぜ。」

おかしいなっと思つたら、ちゃんと意思表示しねえとさ、いつまでも終わらねえとせ。それは誰の戦いでもねえ、遷、オマエの戦いだ。苦難つてのは、結局自分自身の戦いなんだ。ま、陰ながら応援してやっからよ、ガンバレよ。じゃな。

オレは遷が泣き止んだのを見計らつて背を向けた。

「. な、名前は？」

「名乗るほどのモンじゃねえよ.」

オレは高台の墓地を後にした。

理由は分からねえが. 頑張れよ、遷。

安室遷、A型、石田中3年。

初めて会つたのは元日、琵琶神社。

あの時オレとユイは、遷のただならぬオーラにビビつたっけ.

フードの下の顔立ちは一見可愛らしくもあり、美しくもある。

長いまつ毛とハッキリした二重まぶた、整った目鼻立ち、そして特徴的なWのようなアヒル口。

常に2人のヤンキー少女を両脇に従え、コスモはおるか、前田とも交流を持つ筋金入りのヤンキー女子中学生。

元コスモの小西の話では、全く男を寄せ付けない、レズっていう話だ……。

そして、施設育ちの孤児。

まさか澪が自殺を考えてるほど何かに追い詰められてるとは思わなかった……。

何が原因で、何が理由なのかは分からない……。

……が、何か運命的な出会い、そんなものを感じた。

澪が、何か大きな大きな鍵を握っているような気もするが、オレはこれ以上深追いは出来ない。

前田の女である可能性も十分あるし、ヘタに首を突っ込んだらそれこそ墓穴を掘りかねない。

さらに、澪はA型。

根掘り葉掘り聞かれるのは大嫌いだし、ましてや心を覗かれる事を非常に嫌がる。

遷から巧みに情報を仕入れる事も可能だった。

そうすればラクに前田の居場所を聞き出せそうな気がしたが、オレはA型の気持ちの方を優先したのだった……。

第365話 ダーウィンから学ぶべきこと

その日の晩、オレの頭に何度も溇が浮かんでは消えた。

溇の両腕にあった根性焼きの数は、オレの根性焼きの数を裕に越え、さらには自分の意思ではないという。

ある意味、オレがかつて味わった以上の苦しみを感じてるのではないか？ しかも、今、現在・・・？ だとしたら、何とか助けてあげられないだろうか・・・？ いや、助けるも何も、溇はオレたちの敵。

人質にされたマジブを狙う張本人。

もしかしてオレは、悪の命を助けたのかもしれない。

もしかしたら今日の出来事が、不運を招く結果だったのかもしれない。

でも、敵でも悪でも、今現在苦しんでる者に手を差し伸べて、何が悪い・・・？ あのタカノブも、オレが川の中流で溺れそうになった時、足を引っ張って助けてくれた。

敵に情け・・・か。

宮さんは、かつて敵に情けをかけて人生を狂わせた。

・・・でも、決して自分の選んだ選択に後悔はしていない、はず！
もう引き返せないのが人生なら、とことん前だけ見て突き進んでやる！

・・・これでいいんだ。

・・・これで。

たとえば、溘に裏切られても・・・、本望だ・・・。

竜崎・・・、裏切りを恐れたら、そこから先には進めねえぞ。

いつまでも立ち尽くす事になる。

それが暗闇だったら、真っ暗い所でいつまでも怯える事になる・・・。

勇気を出して、歩かなきゃ・・・。

「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き残るのではない。唯一生き残るのは変化する者である」ってのは、ある偉人の言葉だ。

この世は、無常。

常に世界は変わり続ける。

永遠なものなど、ありはしない……。

人の心も、同じ。

人は、変わる。

裏切りが怖いなら、裏切りなんか恐くもなるともないヤツに生まれ
変わりゃ〜いい。

オレは宮さんみてえ〜な力もなけりゃ〜、竜崎みてえ〜な勇気もね
え〜。

でも、人一倍、知恵は持つてるつもりだ。

オレはそいつを上手く利用して、ハツタリで生きてんだ。

オレは強え〜んだよ、オレは何も恐くねえ〜んだよ……って。

そしたらさ、案外すんなり上手くいくモンなんだ。

……いや、マジで。

翌日、1月20日、日曜日。

とうとうXデーは明日に迫っていた。

宮さんは相変わらず今日も朝から工事現場で汗を流しているのだろうか？

前田から明日の逃走資金と逃走用の車の受け取り場所の指定は、今日あるのだろうか、それとも、明日なのだろうか。

こんなオレでもメシがノドを通らないほどドキドキしてるんだぞ？

宮さんは一体どれほどのプレッシャーに耐えてるんだ？

愛する者が、憎き敵に狙われる現状。

その苦しみはハンパないはず。

以前、治るものは怪我って言わないって話を宮さんがしてたが、心の傷はどくなのだろくか？

忘れる事が出来る心の痛みは怪我じゃなくても、忘れられない心の痛みは怪我って言うのかな？

オレの根性焼きも、漣の根性焼きも、どっちの火傷も一生消えない。

これは怪我っていうのかな。

怪我イコール、過ち、過失……。

でも、怪我の功名って言葉もある。

過失でした事が、好結果になるって意味だ。

オレの根性焼きは、時としてハツタリをかます時の手段にもなる。

「これは、オレが今までぶっ潰してきたヤツらの墓標の数だ。もちろんザコは含まねえよ。オレと互角に渡り合ったライバルたちの墓標だ……」的に、敵を威嚇いかくするのに使った事もあつたっけ……。

でも、実際は、自殺を食い止めた数。

自殺をしようとした回数ではなく、あくまで生きると決意した回数。

つまり、これは死じゃなく生を残した証あかし、これは生きた証だ。

この世は無常。

自分の過去も生きた理由も人生の意味も、如何様いかようにも自己次第で変えられる。

だからこそ、人を自分のものさしで判断しちやいけないんだ……。

その人は、昨日とは別人の人かもしれない。

人を自分の小さな器うつわでジャッジせず、そのまんま、ありのままを、ただ体験するだけ。

感じるだけ……。

……と、そんな事を考えて、午前中はベッドの中で過ごした。

明日はXデー。

大きな動きがあるはずだ。

前田が逮捕される日でもあるし、マジブくが解放される日でもある。

もちろんオレたちも解放される。

やっと平和が訪れるんだ……。

とりあえず今日は、明日の為に生気を養おう。

エロDVDでも借りてこようかな……？ ……何て不埒ふらちな事を想像し、ニヤニヤした矢先……！

12時35分、とんでもないメールが飛び込んできた。

メールの差出人はユイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161ba/>

ギリ爆3 - 血液型マニュアル男のヤンキー伝記-

2012年1月6日17時53分発行